のみ』と仰せられた。たとへ凡ての人が皆煩惱に役せられて爭ひあひ鬩ぎあつて居ても、我一人の力を以て凡てを救護してやらうといふのである。此の洪大無邊なる慈悲心に、感激するものは、共に力を協せて佛の救護の御手傳をしやうといふ心になるべきである。此の心のある者は必ずや和合一致することが出來る筈である。

維摩詰は此の如き心をもてるが故に、衆生の病を以て吾が病と爲し、その病を滅せんとして心を勞したのである。されば彼は文殊師利に向ひ、『日は何故に空に懸つて居るのであるか』と問ひ、文殊が『明照を以てし之が爲に冥を除かんと欲す』と答ふると共に、

菩薩も是の如し。不淨の佛土に生ずと雖も衆生を化せんが爲にして、愚暗を合するにはあらざるなり。但だ衆生煩惱の暗を滅するのみ。

といつた。日は高く大空に懸つて居るが、決して獨り輝いて居るのではない。地上を遠く照すのである。而も此の地上の如何なる物をも照すことを厭はぬ。大なる物も小い物も、清き物も汚れたる物も一切差別なく照すのである。又如何に汚れた物を照しても日は少しも汚れに染むことなく、いつも清く明かな光りを放つて居る。佛の御心が正しく其の通りである。菩薩も亦佛の御心を以て吾が心とする者であるから、維摩詰は此の如くに語つたのである。即ち老子の所謂『光を和げ塵に同うする』心である。塵に同うして而も塵に染まぬ所が最も貴い。

斯く佛の御心を吾が心とし、一切衆生の爲に心を勞し身を勞して更に厭はぬのは其の中に大なる悅びがあるからである。其の悅びとは之によつて大なる功德を積み、次第に佛の境界に近づき得ることである。世の中に此より大なる悅びはない筈である。木の實や草の種を地中に埋めて置くと春になつて皆芽を出すが、その芽の伸びて行く勢は非常なものである。芽は至て軟いものであるが、其の軟い芽が固い地を突き破つて出るのである。さうして地面へ現はれ來ると共に、スタ〳〵と大空へ向つて伸びるのである。佛と成り得べき希望をもつた者も亦其の通りである。如何なる難をも排し、如何なる苦にも堪へて、其の希望を貫かうとする。勇猛精進といふは實に此の事である。彼の維摩詰の如き正しくその人である。彼は途で光嚴童子に逢つた時に、光嚴が『居士何れの所より來れる』と問へるに對して『吾道場より來る』と答へた。更に光嚴が『道場は何れの所か』と問へるに對して、『直心は是れ道場なり、深心は是れ道場なり、菩提心は是れ道場なり』等種々の例を擧げて、菩薩道を行ずる所は、何れの所でも皆道場であることを說き、

菩薩若し諸〳〵の波羅蜜に應じて衆生を敎化せんに、諸有の所作、足を擧ぐるも足を下すも、

當に知るべし皆道場より來りて佛法に住するものなるを。

といつた。此の心さへあれば世間到る所が盡く皆吾等の道場となるのである。

されば世の爲人の爲に力を盡すことが直ちに吾等自身の悅びとなるので、之に對する世間の報酬などは固より望むに及ばぬのである。地位も名譽も權勢も更に望ましくない。時によつては生命を失ふことも亦更に惜まぬのである。年の若い男女が果敢ない愛情の爲に命を捨つる場合でさへ、死ぬといふ決心さへつけば悠々として其の心に餘裕が出來るのである。況して佛と成るために不惜身命の覺悟をした者は、如何なる困難にも笑つて堪へ得べきこと勿論である。此の如き人は如何なる地位にも居られる人である。如何なる境遇にあつても常に之に安んじ得る人である。富むもよし、貧しくてもよし、榮譽ある地位に在つてもよし、卑賤にして終つてもよい。此の如き心をもつた人が相集つた時に、眞の和合一致が出來るのである。易の中に

二人心を同うすれば其の利金を斷つ。同心の言其の臭蘭の如し。

とあるは、誠に此の如き交りをいつたものであらう。此の如き人の集りが即ち眞の僧と稱せらるべきものである。

前にもいつた通り、元來僧といふのは集合體の名であるが、後には一人でも僧といふやうになつた。それで僧史略には

若し單に僧といへば四人以上にして方に之を稱するを得るなり。今は分稱を謂ひて僧と爲す理また差ふこと無く。萬二千五百人を軍と爲すも、或は單己一人をも軍と稱す。僧も亦之に同じ。

とある。義林章には

三人已上是れ僧の體なり。

とある。三人以上か、四人以上か、其の數は面倒に穿鑿するにも及ばぬが、兎も角も和合して佛法を學び又佛法を弘むる者を僧といふので、たとへ一人でも他の人と和合すべき心をもつて居る人ならば之を僧と稱しても妨げはないわけである。併し我意に募つて相爭ふものは僧とはいはれぬ。又たとへ和合一致したやうに見えても名の爲とか利の爲とか、其他卑しい目的を遂げんが爲に結合したものならば固より僧と稱せらるべきではない。

佛は遠い昔に吾等を捨て去られたが、佛の說かれた法は泯びずして今に遺つて居る。此の貴い法の中に佛の御精神が宿つて居る。吾等が此の法を學ぶことに依つて、面のあたり佛の說法を聽くのと同樣の利益を得られるといふことは、返す返すも有難い次第である。此の貴い法が

今に遺つて居るのは、身命を惜まずして此の法を學び、此の法を護り、又此の法を弘めた人々即ち僧の力に依るものである。僧を佛寶と法寶とに配して三寶と稱するのは誠に謂のあることである。髮を剃り法衣を纏ふ者ばかりを僧と呼び來つたのは隨分久しい習はしであるが、僧の僧たる所以は其の外貌に在るのでなく、實は其の心を持つことの如何に在るのである。和合して法を學び、和合して法を弘むるものが僧であるのであるから、吾等は皆共に僧たるべき覺悟を持たなければならぬのである。法華經の法師品に

若し惡人有り不善の心を以て、一劫の中に於て現に佛前に於て佛を毀罵せん、其の罪尚ほ輕し。若し一の惡言を以て在家出家の法華經を讀誦する者を毀訾せんには、其の罪甚だ重し。

とあるは、即ち僧たる者の極めて貴きことを說き示されたのである。佛は吾等末世の者共の爲に法を說き遺されたので、此の貴き法が普く世に弘まつて居さへすれば、佛は滿足せらるゝのである。若し其の法を弘むるものを毀つて、其の弘法の聖業の妨げをする者があれば、佛の大慈悲心が貫徹せぬことになるから、其の罪は佛を毀る罪よりも大きいと仰せられたのである。

尙ほ法師品には、僧の貴いことを極力說き示されて、

當に知るべし是人は佛の莊嚴を以て自ら莊嚴するなり。則ち如來の肩に荷擔せらるゝことを得ん。其の所至の方には隨て向ひ拜すべし。一心に合掌して、恭敬供養尊重讚歎し、……人中の上供をもて之に供養せよ。

とある。吾等は古來の弘法に力を盡したる諸僧を尊重すると共に、又自らも僧といふ貴い職分を盡さうといふ希望を以て常に勵まなければならぬのである。

既に僧寶の貴きことを知る者は、また法寶の貴きことを知らなければならぬ。僧は佛の正法を世に弘むることを以て其の任とするものである。若し此の法がなければ、宛も此の天地の間に日月の光明の無いのと同樣で、一切の物が皆其の存在の意義を失ふであらう。而して佛もまた法を學ぶことによつて佛と成りたまへる者である。觀普賢經には

此の方等經は是れ諸佛の眼なり。諸佛は是に因つて五眼を具することを得たまへり。佛の三種の身は方等よりして生ず。是れ大法印にして涅槃海を印す。此の如き海中よりして能く三種の佛の淸淨の身を生ず。此の三種の身は人天の福田にして應供の中の最なり。其れ大乘方等經典を讀誦すること有らば、當に知るべし此の人は佛の功德を具し、諸惡永く滅して佛慧より生ずるなり

とある。方等經といふのは大乘經のことで、方等とは方正平等の義である。方正とは經の中

に說かるゝ所の教理が方正にして些の誤もないことをいふのである。平等とは衆生と佛と平等であるとの意である。衆生は佛と相距ること甚だ遠きものであるが、大乘の教を學んで怠らなければ終には佛の境界に到達することも出來るのであるから、平等といふのである。此の大乘經が佛の眼であるといふのは、文字で書かれた經典のことでなく、此の經の中に說き示されてある所の眞正の理をいふのである。佛は始めから佛であつたのではない。靈鷲山に集つた諸菩薩が聲を同うして

遍く一切の衆の道法を學して、智慧深く衆生の根に入りたまへり。是故に今自在の力を得て法に於て自在にして法王と爲りたまへり。我また感く俱に稽首して、能く諸の勤め難きを勤めたまへるに歸依したてまつる。

といつた通り、勤めて學んだ結果として佛の境界に到達せられたのである。佛は自ら勤め學んで後に悟られた所を打明けて、大乘經の中に於て說き示されたのであるから、此の眞正の理が即ち佛をして佛たらしめたものである。即ち佛の眼であるともいへるわけである。

又佛は五眼を具へて居られるといふが、五眼とは一に肉眼、即ち吾等の共に有する所の眼である。二に天眼。普通の者の見及ばぬ所のもの迄も照見する力をいふのである。三に慧眼、人生の無常なるさまを明かに照見する力をいふのである。四に法眼、衆生を救はんが爲に一切の法門を照見する力をいふのである。五に佛眼、以上の四眼を並び具へらるゝをいふのである。佛は斯く五眼を具へらるゝことも、畢竟勤め學んだ結果として眞正の理を究められた爲である。次に三種の佛身に就ては後に至つて委しく說くつもりであるが、先づ其の名を擧げると、法身佛、報身佛及び應身佛である。

三種の佛身といふけれども、佛が幾通りもあるのではない。吾等が仰ぎ見たる佛の三方面である。

此處に法といふのは『實在』といふ意である。佛は不生不滅にして永遠に實在せらるゝものであるから之を法身と申すのである。次に報といふのは『勤め學んだ報として智慧を具ふること』である。佛は絕大の智慧を具へたまふが故に之を報身と申すのである。又應といふのは『應化』の義である。佛は絕大の慈悲を具へたまひ、一切衆生の惱みを救はんが爲に、それ〳〵之に適當なる教へを說き、之を教化せらるゝ故に之を應身と申すのである。されば三身佛といふは『實在として見たる佛』と『知慧の化身として見たる佛』と『慈悲の化身として見たる佛』とである。これは一の佛を三方面から仰ぎ見たるものに外ならぬので、實は『三身即一』なのである。

佛に此の三身の具はることも、畢竟ずるに方正平等の理を體得せられたが爲である。

次に大法印といふは大乘の教によつて示さるゝ所の妙法のことである。印とは印璽のことである。其の不變なるさまに喩ふるのである。又國王の印を押したものが天下に通用自在なるが如く、此の妙法は通達無礙であるから、之を法印と稱するのである。此の妙法は必ず之を學ぶ者をして皆涅槃に入らしむる故に涅槃海を印すといふのである。涅槃とは一切の惑を滅し盡したる境界をいふので、此中に一切の德を具ふることは宛も大海中に無限の寶を藏するが如くであるから、之を涅槃海と稱するものである。此の涅槃海の中から佛が出るといふのは、涅槃を得たる者が即ち佛であるとの意である。次に福田とは『多くの福を生ずるもの』といふ義である。人間界の者も天上界の者も、共に佛に歸依することによつて福を得べきが故に、佛を人天の大福田といふのである。次に應供とは『應に供養を受くべきもの』といふ義である。功德ある者は皆世間の供養を受くべきものであるが、佛は一切衆生を救護せらるゝものであるから、供養を受くべき者の中の最上と申すのである。

佛の事を說かれたのは即ち吾等の事を說かれたのである。吾等も共に皆佛と成り得べき身である。

されば何人でも此の大乘の教を學んで怠らぬ者は皆佛つ功德を具して諸惡永く滅するといつてあるのである。而して佛慧より生ずるといふのは『佛の智慧の中から生れ出た者』といふ意で、即ち『佛の子である』といふと同じ義である。一切衆生を救ふべき力を具へたものは、佛の御心を繼ぐ者なのであるから、即ち佛の子と稱せらるべきである。

此の觀普賢經の文はまことに能く法の貴ぶべく重んずべきことを說き悉してある。佛はいつも世に出現したまふものではないが、佛の說きたまへる法は泯びずして缺けずして永く吾等の間に存して居るのである。吾等は此の法を學ぶことによつて、共に皆佛の境界に近づき得べきこと。猶ほ佛在世の御弟子の如くなるべきである。心地觀經の中には法の貴きことを說いて頗る詳悉である。少しく長きに過ぐるやうであるが、其の一段を次に抄出する。先づ

善男子、一の佛寶中に無量の佛あるが如く、如來の說きたまへる法寶も亦然り。一の法寶中に無量の義あり。善男子。法寶に四種あり。敎法と理法と行法と果法となり。

とある。敎法とは佛の說きたまへる語のことである。其の語の中に含まるゝ所の眞正の理が即ち理法である。此の理を諦むるものは皆之を實行すべきである。これが第三の行法で、委しくいへば持戒、禪定、知慧等が即ちそれである。斯く佛法を學んで之を實行することによつて德

を成じ得べきである。之れが即ち第四の果法である。果とは修行の結果といふ意である。經文はなほ之に續いて。

法寶は能く一切生死の牢獄を破る。猶ほ金剛の能く萬物を壞るが如し。法寶は能く痴闇の衆生を照す。猶ほ日光の世界を照すが如し。法寶は能く衆生に喜樂を與ふ。猶ほ天樂の諸の天人を樂ますが如し。法寶は衆生をして彼岸に渡らしむ。猶ほ堅牢なる大船の如し。法寶は四魔を破し無上菩提を證す。猶ほ金剛の甲冑の如し、法寶は生死を割斷して繫縛を離れしむ。猶ほ智慧の利劍の如し。法寶は衆生を運載して火宅を出しむ。猶ほ寶車の如し。法寶は三途の愚闇を照破す。猶ほ明燈の如し。法寶は能く衆生を誘ひて寶所に達せしむ。猶ほ險路の導師の如し。之を法寶不思議の恩と名く。

とある。此の中に於て一二の字句に説明を加へて置かう。『生死の牢獄』といふは吾等が人生に於ける種々の變化の爲に心を役せられて、少しも自由を得ぬことは、宛も牢獄の中に囚はれて居ると同樣であることをいふのである。佛法を學ぶものは必ず此の牢獄を出ることが出來るのである。『彼岸に度る』といふは覺を得ることである。法は彼岸に達する船であるから、之を名けて『乘』といふので、其の中に大乘と小乘の別のあることは前に委しくいつた。『無上菩提』といふは即ち佛の智慧のことである。佛と同しき智慧を得るためには魔を打破らなければならぬ。魔には種々の區別があるけれども、吾等の心中に群り起る所の種々の惑が最も恐るべき魔である。智度論には、

慧命を奪ひ、道法の功德善本を壞る。是故に名けて魔と爲す。

とある。慧命を奪ふとは智慧の働きを妨ぐることである。繫縛とは即ち煩惱のことである。煩惱あるが爲に吾等の心は自由を得ぬので、宛も繩を以て縛せられて居るのと同樣である。火宅とは凡夫の常に種々の煩惱に苦められて居る有樣を、吾等の家が火に燒かれて居るのに喩ふるので、法華經譬諭品に

三界は安きこと無し、猶ほ火宅の如し。衆苦充滿して甚だ怖畏す可し。……如來は已に三界の火宅を離れ、寂然として閑居し林野に安處せり。

とあるは有名なる語である。次に三途といふのは火途と血途と刀途で、火途とは猛火に充ちたる所、血途とは互に相爭ひ相食んで血を流す所、刀途とは刀劍を以て迫らるゝ所である。これは煩惱に苦めらるゝ凡夫の境界のことをいふのである。寶所とは吾等が覺を得たる境界のことである。寶を得んとするには險難の路を越えなければならぬ。吾等は勤め學ぶことによつて煩

惱の險路を越え、はじめて寶所に達し得べきであるが、此の險路を越ゆるには佛の正法を導師として賴むより外はないのである。

自ら正法を學ぶことによつて煩惱を脱し得たる者は、又他の人を誘うて共に正法を學ばしめたいといふ心を起す筈である。即ち增一阿含經に、

汝等身を正うし意を正うし、結跏趺坐して他の想なくして專ら法を念ぜよ。正法は諸〳〵の欲愛を除き、塵勞を除き、渴愛の心を永く起らざらしめ、欲をして無欲ならしめ、諸の煩惱の結縛と病とを離れしむ。自ら法を念じ、又人をして念ぜしめよ。

とあるのは、凡て正法に歸依する者の志でなければならぬ。但し法を弘むるに當つては最も周密なる用意がなければならぬ。譬へば使者が其の主人から寶玉を預つて、他の人の家へ傳達する時に、途中で其の寶玉に疵をつけたならば、主人に對して濟まぬのみならず、又先方の人に對しても濟まぬことになるであらう。法を弘むる者も亦此の如くである。之を說くに當つて恣に私意を加へ、佛の御心と相違したやうな事を傳ふるならば、佛に對して罪を得ると共に、聽く人に對しても亦大なる罪を作ることになる。此事は返す返すも戒愼すべきである。

然るに世間の法を說く者を見るに、或は名利の念に囚はれて、聽く者の意を迎へんがために曲解邪說を敢てして平然たる者がある。或は自分の研究の不充分なために、其の正しい意義を解することが出來ず。之を誤り傳へて自ら其の誤を悟らぬ者もある。十住毘婆娑論に之を戒めて、

法を說く者は應に四法を行ずべし。一には廣博多學にして、能く一切の言辭文句を持すべし二には決定して善く世間出世間の諸法の生滅の相を知るべし。三には禪定と智慧とを得て、諸經の法に隨順して諍ふこと無かるべし。四には增さず損せず所說の如くに行ずべし。

とあるのは誠に有益なる訓である。先づ第一に佛の得たまへる所の法は絕對の眞理であるから時代によつて變化すべきものでは固よりない。併しながら之を普く世に弘めんとするには、其の時代の人の解し得るやうな說明の仕方をしなければならぬ。又多くの人は機根の善くないものであるから、法を聽くこと久しからずして嫌厭の念を生ずることを免れぬ。此等の人をして嫌厭の念を生ぜしめず、いつも法を聽くことを喜ぶやうにしやうとするには、常に彼等に適切なる譬諭言辭を擇み、深く彼等の心の底に徹するやうに說かなければならぬ。故に說法者は博く學び深く究めて、その言辭文句に就て一〳〵に苦心を重ぬることを怠つてはならぬのである。此の用意の足らぬのは慈悲心の足らぬ者といはなければならぬ。

次に諸法といふは凡ての事物のことである。生滅の相といふは、凡ての事物の變化して行く有様のことである。生滅の相を知るといふのは即ち時勢の變化、思想の變遷、世相の推移等に就て充分に通曉することである。世間出世間とあるが、世間とは所謂實社會のこと、出世間とは宗教とか學問とかいふ方面のことである。此等凡ての方面に亘つて能く通曉して居なければならぬのである。人々が如何に惱むかを知らずして之を救はうとしても、その骨折は多く徒勞に終る。人々が如何に苦むかを知らずして之を慰めやうとしても、彼等は何の喜びをも感ぜぬであらう。自分は昨年外國を旅行して居る間に一篇の小説を讀んだが、其の中に出て來る一人の老牧師が貧しい一青年を相手に、諄々として神の恩に就て説いて居る。相手の青年は默々として之を聽いて居る。牧師は彼が自分の説を傾聽して居るものと信じて頗る得意を感じ、彼に向つて『今まで自分の説いた所に對する君の感想を聞かう』といつたが、之に對する青年の答へは次の一語であつた。

私は腹が空きました。たゞそれ丈です。

實際此の老牧師に似た説法者が世間には多くあるであらう。

又第三に擧げられたる條件も極めて大切である。自分の心が散亂して居たり、自分の智慧が昏かつたりしては、人を教へ導くことの出來やう譯がないから、禪定と智慧とを得るやうに努めなければならぬのはいふ迄もない。なほ其の上に大切なのは諸經の法に隨順して説くことである。隨順するといふのは即ち私意を加へぬことである。私意を加へて説くのは佛を汚し法を汚すもので、極めて大なる罪といはなければならぬ。兎角吾等は自己を辨護したり、或は自己の説を飾るために古人の語を使用することが多い。項羽が『書は姓名を記すに足る、劍は一人の敵なり、請ふ萬人の敵を學ばん』といつたのは有名な話であるが、これは項羽が大志を有したることを證すべき逸話である。然るに自分などは非常に文字が下手で、先輩の人に『少し字を習つたら宜からう』と忠告された時に『書は姓名を記すに足る』と放言したことを覺えて居る。今考へれば實に恥かしいことである。又孔子の語に

民は之に由らしむ可し、之を知らしむ可からず。

とあるのは、一般人民に愚昧の者が多くて、之を導いて或る善事を實行せしむることは出來るが、其の理由を充分理解せしむることは出來ぬと、深く歎息せられたのである。人民は命令して服從せしめさへすれば宜いといふ意ではない。然るに壓制を施して私利私欲を逞うせんとする者が、『民は由らしむべきである』と聖人の語を吾が私を遂げる口實に使つた例は屢々聞き

及んだことである。吾等凡夫には此の如き性癖があるから、深く之を戒めなければならぬ。佛法を世に弘むるに當つても、動もすれば之に私意を加へて、己に便利なやうに說かうとする傾きがある。是はまことに大なる罪である。『諍ふこと無かるべし』といふは恣に異を立てはならぬとの意である。

最後に擧げられたのは『佛の說かれた通りに實行すること』である。自ら實行せぬことを人に向つて說いても、人を動かすことの出來るものではない。勿論佛ならぬ者は誰でも缺點があるのであるから、佛の敎へられた通りを滿足に實行するといふことは容易に出來ないが、『敎へられた通りを實行しやう』といふ決心をもつて常に努力しなければならぬ。『增さず減ぜず』といふは即ち『敎へられた通りに』といふ意である。此の如き敬虔の念を以て、自ら之を實行しつゝ身を以て衆を誘ふといふ健氣なる覺悟をもつた者が即ち眞の法師である。以上の四箇條を具足して、熟心に法を弘むる者があれば、末法濁亂の世と雖も必ず淨く明るい時代と變つて行くべきである。又長阿含經には清淨說法と不淨說法との區別が說いてある。若し法を說くものが

我彼の人の爲に法を說けり。彼當に我を信敬し、能く我に多くの飲食衣服等を與ふべし。

と考へて說くならば、それは不淨說法であつて、少しも功德はない。若し又法を說く者が

聽く者をして能く佛法を證解し、現在の苦を除き、諸〳〵の煩惱を離れしめん。

と考へ、

聽く者をして說の如く修行せしめ、能く法を得、義を得、利を得、心を安んずることを得しめん。

といふ覺悟をもつて說くならば、是こそ淸淨慈悲の說法であるといつてある。說く者も聽く者も共に、法を重んじ法を貴ぶの心を假にも失つてはならぬ。佛の御精神の籠つて居るものが即ち此の法である。之を輕々しく思つてはならぬ筈である。

以上は佛法の貴いことを說いたのであるが、法が何故にそれ程貴いかといふことを明にするためには『法とは何ぞや』といふ問題に就て更に研究して見なければならぬ。唯識論には

法とは軌持を謂ふ。

とある。軌持とは『吾等が共に軌範として持つべきもの』といふ意である。何故に吾等が之を持たねばならぬかといへば、それは眞理に根柢を有するものなるが故である。されば唯識論述記には

法とは道理の義なり。

といつてある。然るに『諸法の實相』といふやうな語もあるが、此の法といふ語は唯識論にいふ所と同意義とは思はれぬ。元來此の『法』といふ語は梵語の『達磨』を譯したのであるが、それには種々の義がある。之を概括していへば、大乘義章に擧ぐる所の二種になる。即ち

法の義不同なり。汎く釋すれば二あり。一には自體を法と爲す。二には軌則を法と名く。

とある。自體といふのは『存在するもの』といふことである。『實體』といふも同義である。譬へば此處に机がある、書物があるといふのは机といふ自體があり、書物といふ自體があることを認めていふのである。又軌則といふのは吾等が日常の言行を律すべき法則のことである。なほ之を委しく說明して見やうと思ふ。

法を軌則の意に解するとしても、其の軌則の中に更に二種を分つて見なければならぬ。其の一は世間で一般に法律とか規則とかいふ類のものである。其の二は其等の法律や規則の根柢となる所の敎法である。前の章に於て引用したる華嚴經の文に

人は王を以て命と爲し、王は政法を以て身と爲す。世道既に和平なれば佛法茲より始まる。

とあるが、國に政法がなければ決して安らかには治まらぬ。此の政法は世法ともいひ、又王法ともいふので、即ち國民の共に守るべき軌則である。それは久しい間に形作られたる國民の風俗習慣に基いて作られたるものである。前にも說いた通り人は元來社會性を有するもので、孤獨の生活は決して出來ぬのである。如何なる野蠻人でも皆群を作つて生活して居る。希臘の哲人アリストテレスが『人は社會的動物である』といつたのは動すべからざる名言で、最近世に至り各地の野蠻人の生活狀態に關する研究が進んで來ると共に、アリストテレスの言の誤らぬことが事實によつて證據立てられた。

共に群を成して住む以上は、その間に何等かの統一が存し秩序が立たなければならぬ。若し人々がたゞ雜然として群り住み、互ひに其の欲望を達せんことのみを求めて居るならば、片時も紛爭の絕え間は無く、誰も平和なる日を送ることは出來ぬであらう。其故に苟くも共に住む以上は秩序あり統一ある生活をしなければならぬ。既に孤獨の生活の出來ぬのが人の本性であることを認むるならば、

秩序を求め統一を求むることも亦人の本性である

ことをも認めなければならぬ。此の本性に基いて、其等の多くの人の中で相當に思慮分別のある者が、其の共同生活の仕方に就て或る規約を作り、多くの者は之に服從することになる。

是れが即ち國家組織の初歩である。支那などでは聖人が出て法度を立てたのであるといひ傳へて居るが、聖人が勝手に法度を立てたのではない。人の本性に基いて法度を立てたに外ならぬ。若しそれが人の本性に背いたものであるならば、如何なる聖人の作つた法度でも、一般の人が之に服從しやう筈はない。易の繫辭傳には

天神物を生じて聖人之に則る。天地變化して聖人之に效ふ。天象を垂れ吉凶を示し聖人之に象る。

とあるが、聖人が天に則るといふは要するに人の本性に基いて法度を立てたことである。

此等の法度は、最初から條文を規定したわけでは無く、唯だ聖賢とも稱すべき人の指示した所に一般民衆が服從して、それが習慣的に傳はつたものに過ぎぬ。併し世間が次第に複雜になると共に、單なる習慣法のみでは汎く一般民衆を支配すべき力が無くなる。茲に於て或る條文を規定して之を民衆に示し、之に背反するものには嚴しい制裁を與へるといふことになるのである。希臘のアゼンに賢人ソロンが出て國法を制定したといふが如きは即ち其の一例である。是れが華嚴經にいふ所の『政法』なるものである。而して國王なる者は國民生活の中に存する所の秩序統一を掌る者であるから、國王の念とする所は常に國民の健全なる生活といふことであるべき筈である。國王の念とする所はいつも國民の健全なる發展といふことであるべきである。之を以て念とするが故に國王は其の國に於て最高の地位を占め得べきである。されば古代の支那に於ては聖人が即ち國王であるべきものと信じられて居た、希臘の哲人プラトーンの如きも『哲人にして初めて王たるべし』と說いた。

但し國王が如何に賢明であつても、國王一人で凡ての事を指揮命令するわけには行かぬから、是非とも國王を輔佐するものがなければならぬ。然るに其等の者が皆賢人であつて、皆私心がなく、皆盡く國民の健全なる發展を念として居れば申分はないが、必ずしも左樣ばかりは行かぬ場合もある。又一般人民の中には思慮の淺い者もあり、性質の僻けた者もあるから、國家の法律規則が自分達の健全なる發展を目的として立てられたものであるといふことを辨へず、之を自分達の自由を拘束する所の鎖であるやうに考へ、種々に工夫を凝して、法網を潛つて自分の勝手をしやうと計畫するものも現はれて來る。されば法律規則を勵行するのみでは決して法律規則の制定せられたる目的を達することは出來ぬのである。人々に人の人たる本性を敎へ、人の人として向ふべき道を指示し、人々の心が直く正しくなつて、初めて法律制度も遺憾なく行はれて行くべきである。孔子が

之を導くに政を以てし、之を齊らするに刑を以てすれば、民免れて恥無し。之を導くに德を以てし、之を齊らするに禮を以てすれば恥有りて且格る。

といつたのは實に此の意である。法がなければ治まらぬが、法を立つるは國民の健全なる發達を目的とするのであるから、此の根本の精神を沒却して、專ら法の形式を嚴しくすることのみに力を用ゐるならば、所謂免れて恥無き者のみが多くなるのである。

又斯る條文の具はつた政法のみならず、國民の間に習慣的に守られて來た事も、廣い意味の『法』といふ中に含まるべきものである。例へば日本でいへば正月を祝ふとか、節句を祝ふとか、鎮守の神の祭禮をするとか、或は婚禮とか葬式とかの儀禮なども皆所謂『世法』中に屬すべきものである。此等の習慣は何れも久しい間に自然と發達して來たものであるが、その發達し整頓するに就ては、聖賢とも稱せらるべき人々が之を指導し誘掖したことも大に與へて力があるのである。禮記に

何をか人の情と謂ふ、喜怒哀懼愛惡欲なり。七者は學ばずして能くす。何をか人の義と謂ふ、父は慈にして子は孝、兄は良にして弟は弟、夫は義にして婦は聽き、長は惠にして幼は順、君は仁にして臣は忠なるなり。十者之を人の義と謂ふ。信を講じ睦を修む、之を人の利と謂ふ。爭奪して相殺す、之を人の患と謂ふ。故に聖人の人の七情を治め十義を修め、信を講じ睦を修め、辭讓を尙び爭奪を去る所以、禮を舍て何を以てか之を治めん。飲食男女は人の大欲存す。死亡貧苦は人の大惡存す。故に欲惡は心の大端なり。人は其の心を藏して測度す可からず。美惡皆其の心に在りて其の色に見はれず。一に以て之を窮めんと欲せば禮を舍て何を以てせんや。

とあるは能く此間の事情を說明したるものである。各國民の間に自然と發達し來つたる習慣は法律制度と相並んで大なる力を有するもので、若し之に背く者があれば、世間から相當なる制裁を受けなければならぬ。之によつて世間の秩序が維持せらるゝのである。

併しながら時勢は常に變つて行くものであるから、風俗習慣も皆時勢の變に應じて改められて行かなければならぬ。其の變るのは決して出鱈目に變るのではなく、變る中に一貫して變らぬ所の精神が存すべきである。例へば冬になれば綿入の重ね着をする。夏になれば單衣を唯一枚着る。それは全く異つたことのやうであるが『季節相應な物を着て、身體の健康を損はぬやうにする』といふ精神に於ては異る所はないのである。又例へば生れたばかりの赤子には乳を與へ、成人に近い子には肉をも野菜をも與へる。其の與へる物には異ひがあるけれども、『其の

子に適當な物を與へて、それ〴〵に健全に發育を遂げさせたい』といふ目的に於ては少しも異らぬのである。

形に現はれた所はちがふけれども、其の心に於ては一貫した所がある

のである。斯く常に時勢の變遷に注意すると共に、また常に高き理想を失ふことなく、秩序を持ちつゝ一歩一歩と健全なる歩みを進めて行くことに努むるのが、即ち社會を指導する者の務めである。

明治維新の大改革によつて、六百年來續いて來た封建制度が崩れ、それと同時に西洋の近世文明の模倣が盛に行はれた爲に、吾が國の思想界は未曾有の混亂に陷つた。其の中に於て錯綜したる種々の主張があつたが、其の舊に泥む者は時代の變遷と沒交渉なものが多く、其の新に奔る者は奇矯に過ぎて極めて危險であつた。斯る中に於て明治天皇には、明治十四年十月を以て國會開設の勅諭を發せられ、

顧みるに立國の體、國各宜きを殊にす。非常の事業、實に輕舉に便ならず。我祖我宗照臨して上に在り。遺烈を揚げ洪模を弘め、古今を變通し斷じて之を行ふ、責朕が躬に在り。將に明治二十三年を期し議員を召し國會を開き、以て朕が初志を成さんとす。……朕惟ふに人心進むに偏して時會速なるを競ふ。浮言相動かし竟に大計を遺る。是れ宜しく今に及で謨訓を明徵し以て朝野臣民に公示すべし。

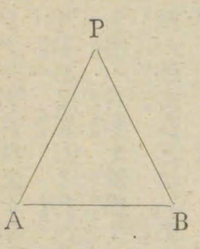
と諭させられた。此の聖訓を明治元年三月の宸翰中に、

汝億兆舊來の陋習に慣れ、尊重のみを朝廷の事となし、神州の危急を知らず、朕一たび足を擧れば非常に驚き、種々の疑惑を生じ萬口紛紜として朕が志をなさゞらしむる時は、是朕を

して君たる道を失はしむるのみならず、從て列祖の天下を失はしむるなり。

と仰せられた所と併せ拜するならば、何人も茲に最も大なる教訓を見出し得べきである。凡て中正を失つたものは範とするには足らぬのである。

併し中正の立場に在る者は、時として舊に泥む者と新に奔る者との雙方を敵としなければならぬことがある。此の圖に於てAは左の方に偏し、Bは右の方に偏して



居る。其の中正を得たるものは即ちPである。併しAから見ると、PはBと同じ一線の上に在るから、矢張りBの同類の如くに見える。又Bから見ると、PはAと同じ一線の上に在るから、Aと同類のものゝ如くに見えるのである。之を史上の例に見ると、ソクラテスが希臘に出た頃、希臘の固陋なる老人等

は時代の變遷を少しも辨へず、たゞ舊い道德を形式的に守ることを青年に强ゐんとして居た。ソクラテスは之を非とし、『眞理を明にするために力を用ゐなければならぬ、正しく知る者にして初めて正しく行ひ得べきである』と主張した。其の爲に老人等の中には彼を以て奇矯なる說を唱へ青年を誘惑する者と爲し、彼を國賊の如くに憎み視た者も少くなかつた。又一方に詭辯派の學者などは『定まつたる道とか、絕對の眞理とかいふものは無い。勢力のある者の主張が正義として認めらるゝのである』と唱へ、多くの青年は之に附和雷同した。之に對してソクラテスは嚴しく其の非を責め、努めて怠らなければ必ず眞理を捉へ得べきものなることを說き、又國民として國法を輕んずるは大なる罪であることを說いた。それ故に彼等はソクラテスを以て固陋なる老人達に味方して、自分等に壓迫を加へんとする者とし、之を仇敵として憎んだ。ソクラテスが死刑に處せられたのは、要するに斯く雙方に敵をもつやうになつた爲である。

世間の多くの人は眼前の事ばかりに心を取られて永遠の事を思はぬ。又多くの人は其の心が僻んで居て中正の理を見ることの出來ぬものである。斯る人々の中に立つて、正しく之を敎へ導かうとする者は、たとへソクラテスの如く生命を失ふことは無くとも何等かの迫害にあひ、何等かの不利を招くことを覺悟しなければならぬ。耶蘇は

義しき事の爲に責めらるゝ者は福なり、天國はその人のものなればなり。

といつたが、實際義しき事の爲に責めらるゝ者の多いのが世間の常である。法句譬喩經に記さるゝ所に據ると、釋尊が舍衛國に居たまへる時に、其の國に一人の富豪があつた。彼は既に八十歲に近い老人であつたが、少しも人としての道を知らず、唯だ豪奢なる生活をすることを誇りとし、多くの職人を雇うて好き舍を新築して居た。その爲に彼は毎日少しの暇もなく、朝は早くから日の暮まで職人の監督に一生懸命であつた。釋尊は弟子の阿難を伴うて其の家に至り、彼の老人の樣子を見られたが、もはや餘命幾くもないやうに見えた。釋尊は彼が何故に斯くも身心を勞して、毎日忙しくして居るのかと問はれた。老人は『此處は客間、此處は自分の居間、此處は寶藏、此處は下人の部屋、此處は何、此處は何……』と熱心に說明して、其の普請の成就することをのみ樂みとする樣であつた。釋尊はいたく彼を憫み『暫く其の業を止めて自分のいふことを聽くがよい。自分は君のために最も大切なことを話さうと思つて來たのである』と仰せられ、人生の大問題に就て彼に說き聞かさうとせられたが、彼の老人は

今は忙しくて敎へなどを聽く暇はない。又暇な時に承りませう。

と至て冷淡に挨拶した。釋尊は彼を如何にも悼ましく思はれたが據なく別を告げて其の門を出

られた。老人は又忙しさうに屋椽の下に立つて職人達に指圖をして居たが、忽ち一本の屋椽が彼の頭の上に落ちて、彼は即時に死んでしまつた。家人は彼の屍を繞つて泣き悲しんだが、如何ともすることは出來なかつた。

釋尊は途中で此の事を聞かれて、世俗の人の分別の足らぬことを今更ながらに氣の毒に思はれたが、其の時數十人の出家が釋尊の所へ集つて來て、『何處から來られたのであるか』と御尋ね申したので、釋尊は以上の事實を話された。彼等はいたく感動した樣子であつた。そこで釋尊は彼等の爲に偈を說いて、

愚暗にして智に近くは瓢の味を斟むが如し。久しく狎習すと雖も猶ほ法を知らず、開達にして智に近くは舌の味を嘗むるが如し。須臾習ふと雖も即ち道の要を解す。愚人は行を造して身の爲に禍を招く。快心にして惡を作り自ら重き殃を致す。行を爲すこと不善なれば退きて悔ることを見、涕の面に流るゝを致さん。報は皆宿習に由る。

と仰せられたので、人々は皆感悟して厚く禮を述べて立去つたとある。實際道を求むる心も無く理を究むる念も無いものは、釋尊に對しても其の聖者なることを知らず、切角懇なる勸めを受けても『暇な時に承らう』といふやうな挨拶をして、再び得難き好機を逸してしまふ。宛も杓子や椀が如何に旨い物に接しても、その味を知らぬのと同樣である。

併し佛の所謂忍辱の心をもてる人々は、斯る無智なる者を敎へ導き、如何にもして彼等をして意義ある生活を送らせ、又如何にもして社會の健全なる發達を促さうとして常に努力して來たのである。又たとへそれ程深い考へが無くても、其の心が素朴であり順良であるものは、斯る賢人の努力に感じて、其の敎へを遵奉し、其の定めたる法度に違はぬやうにと心懸け、その爲、幾多世間的の損失を受けても怨む所なく自分の生活の淨く正しきことに滿足を感じて來たのである。

此の數百千年來、吾等が禽獸ともならず、兎も角も人らしい生活を續けて來たのは、斯る貴い人々が少からぬ犧牲を拂ひ、少からぬ困苦を冒して、正しき道を維持してくれた賜と思はなければならぬ。

考へて見れば誠に有難いことで、一切衆生悉く佛性を具へて居るといふ、佛の敎への誤なきことを痛感せざるを得ぬ次第である。

斯く考へて來ると、たゞ簡單に世法なるものは『自然に發達して來た風俗習慣を元として立てられたものである』とのみ斷定して濟むとは思はれぬ。多くの貴むべき人々の苦心努力が積

み重ねられて初めて正しい風俗習慣も作られ、又正しい政法も確立したものである。法を立てる人、法を實行する人、法を守る人は共に正しい心をもつた人でなければならぬ。又將來に於ても法が嚴しく守られ、正しく發達して行くためには、世間でいつも正しい人が勢力をもつて居ることが最も肝要なる條件である。然るに前から段々述べ來つた通り、人々皆佛性を具へて居ると共に又種々なる煩惱がいつも其の心を塞いで居るものであるから、人の心を正しくするには教の力に依るより外はないのである。即ち

教法が本となつて初めて世法が成立つといふことを知らなければならぬのである。論語に

季康子政を孔子に問ふ。孔子對へて曰く、政は正なり。子帥ゆるに正を以てせば孰か敢て正ならざらん。

とあるのは能く此の道理を明にしたものである。帥ゆるに正を以てするといふは即ち爲政者が自ら範となつて民に教を布くことである。吾が國に於ても政治を『まつりごと』といふのは、神を祭る心を以て政治を爲さなければならぬといふことを意味するのである。治むる者も治められる者も共に神を祭り神に事ふる心を以てするならば、國は必ず安穩なるべきである。明治元年七月を以て江戸を東京と改稱せられ、明治天皇には同十月中旬に東京に着御あらせられたのであるが、直ちに大宮驛の氷川神社を當國の鎮守と定められ、御親祭の儀を擧げらるゝに就て詔書を下され

神祇を崇め祭祀を重んずるは皇國の大典にして政教の基本なり。然るに中世以降政道漸く衰へ祀典擧らず、遂に綱紀の不振を馴致せり。朕深く之を慨す。方今更始の秋、新に東京を置き親臨して政を視る。將に先づ祀典を興し綱紀を張り、以て祭政一致の道を復せんとす。

と仰せられた。政治は力なりなどゝいふ主張はマキヤヴエリ流の思想であつて、祭政一致の精神とは全く一致せぬものである。マキヤヴエリは十五世紀に於けるイタリーに生れ、羅馬教會の勢力に壓迫せられて國家の力が非常に微弱であつたのに憤慨して、終に『國家の隆盛を謀るためには如何なる手段を用ゐてもよい。目的は手段を神聖にするものである』と唱へ、『力ある者の爲すことは常に正しきものと認めらるゝのである』とまで極言したが、是れは一種の反動的思想であつて、決して中正を得たものではない。然るに今日でも斯る思想が相當に勢力をもつて居るのは歎くべきことである。教法を本として立てられたる政法でなければ、永く人の心を支配し得べきものとはいはれぬ。

佛が法を說かれたといふは即ち此の敎法を吾等に與へられたことである。而して佛が此の敎法を本として世法を立つべきことを敎へられた次第は前々から委しく申述べた通りである。佛の吾等に敎へられた所は、吾等が努めて怠らなければ共に皆實行し得べき所のことである。

凡ての人が皆實行し得べきことでなければ法として永く持たるべきものでは無いのである。

或る特殊の人のみの能くすることは、世間の多くの人を驚かすには足るであらうが、決して凡ての人の軌範とはならぬ。孔子が

隱れたるを素め怪を行はゞ後世述ぶること有らんも吾は之を爲さず。

といはれたのは眞に良い敎訓である。世を驚かすのみでは少しも貴いことではない。荀子の中にも

君子は行苟くも難きを貴ばず、說苟くも察なるを貴ばず、名苟くも傳はるを貴ばず。唯だ其の當ることを之れ貴しとす。

とある。當るとは正しき道に當ることである。更に之に續いて、

懷に石を負うて河に赴くは是れ行の爲し難きものなり。而して申徒狄は之を能くす。然り而して君子貴ばざるは、禮義の中にあらざればなり。……盜跖吟口なるも名聲は日月の若く、舜禹と俱に傳はりて息まず。然り而して君子貴ばざるは禮義の中にあらざればなり。

とある。申徒狄は勇者であつたから、石を懷に入れて河に入つても溺れなかつた。盜跖は吃者であつたが大盜として後世に傳へられて居る。併し君子は此等の者を貴ばぬ。それは凡ての人の範とすべきものでないからである。

佛の敎へられた所も亦其の如くで、少しも奇怪なことでもなく、又神秘的なことでも無く、何人も皆實行し得べきことのみである。碧巖錄に或る僧が洞山に向つて『如何か是れ佛』と問うた時、洞山は『麻三斤』と答へたといふことが記されてある。圜悟禪師の說明に據ると、その時宛も洞山は麻を秤つて居たので、直ちに眼前に在る麻を以て之に答へたのだといふことである。なほ其の說明の續きに、

只這の麻三斤一に長安の大路一條に似て相似たり。足を擧ぐるも足を下すも是ならずといふこと有る無し。

とある。洞山が麻を秤つて居から麻三斤と答へたのであるが、若し大根を掘つて居たなら、『大根一本』と答へたであらう。若し又麥を揑いて居たなら『麥一升』と答へたであらう。要する

に吾等の眼前の事、吾等の日常の業一として佛法ならざるは無く、佛を知らんとするならば眼前の事物の眞相を知ればそれで宜いのである。長安に通ずる大道は平々坦々として而も眞直であつたといふ。是れが眞の大道である。是れは人々の共に行くべき道である。歩みの早い者も歩みの遲い者も、その歩みを續けて怠らなければ、終には皆長安に達し得らるゝのである。人々皆佛と成ることが出來るといふも亦之と同じ理である。要は努むると努めざるとの差で、佛と凡夫との別が立つのである。佛の教へらるゝ所は平々坦々たる大道である。紆餘曲折したる小徑ではない。

又同じ碧巖錄に、或る婆維門が釋尊の所へ教を求めに來た時、釋尊は唯だ默然として良久しく彼に對して居たられたが、彼は讃歎して『世尊大慈大悲我が迷雲を開き、我をして得入せしむ』といひ、拜謝して去つた。彼が去つて後阿難が釋尊に、彼は如何にして悟つたのであるかと問うた時に、釋尊は

世の良馬の鞭影を見て行くが如し。

と答へられたとある。馬を走らすのには鞭を加へるのが常であるが、良き馬は鞭を加へられぬ前に、鞭の動く影を見たばかりで直ちに乘る人の心を察し、走つて行くといふことである。彼の婆維門も亦その如くで、釋尊が法を說かるゝを聞かぬ前に、釋尊の氣色を見て其の意中を察し、拜謝して去つたのである。然らば釋尊の彼に示された所は何事であるか。潙山の大圓といふ人は之を說明して、

外道懷に至寶を藏す。世尊親しく爲に高く提し、森羅顯現し萬象歷然たり。

といつた。其の至寶とは即ち佛性のことである人々皆佛性といふ寶をもつて居るのであるが、それを自覺せずして種々の曲つた道へ迷つて行くのである。之に對して自覺を與ふることが釋尊の說法の目的ともいへるのである。若し自身に貴い佛性の具はれることを覺り、此の佛性を開發せしむるために力を盡さうと決心すれば、世の中の如何なる業も皆其の役に立つわけである。それで圜悟禪師は

盡大地是れ世尊の大慈大悲の門戸なり。

といつた。盡大地とは此の地上到る處といふ意である。世尊の大慈大悲の教は地上何れの處に在つても之を學ぶことが出來るのである。されば如何なる境遇に在るものでも皆釋尊の教を學び、凡夫の境界を脫することの出來る筈である。

佛の說きたまへる法は此の如くに平々坦々たるものであるが、吾等の心が煩惱に充されて居

るために、之を學び之を實行することが甚だ困難なのである。今此の圖のAB線は眞直である

がCD線は少しく右へ傾いて居る。今此の圖ではBとDとの距離はAとCとの距離に比べて極めて僅かの差があるのみである。併し此の二線を何丈も、何十丈も長く延して行くならば、其の距離は非常に遠いものになるであらう。吾等の一念の上に於て寸毫の迷ひが起つても、其の行に現はるゝ際には、容易ならぬ間違ひとなり終には佛と相距ること天地も啻ならぬやうになるのである。されば吾等は常に自ら反省し、佛の御心に些かなりとも背反せぬやうにと努めなければならぬ。天台の法華文句の中には、

諸佛に供養するとは只是れ佛語に隨順するなり。

といつてある。前にもいつた通り、供養は吾等の感謝の意を現はす方法である。其の供養としては、花を捧げるとか香を焚くとか、飲食衣服その他種々の物を献ずることもあるが、それで供養の意が悉されて居るのではない。

佛の最も滿足したまふものを捧ぐることが即ち最上の供養でなければならぬが、佛は何を最大の悦びとしたまふかといへば、佛法の世に普く行はるゝことである。但し佛法が行はれて居るといつても、それが佛の御本意に叶はぬやうな意味で信じられて居たのでは何にもならぬ。前に引いた法華經寶塔品の中に、『若し能く持つものは則ち佛身を持つなり』とあるのも、たゞ法華經を世に弘めるといふだけの意ではなく、佛の御心の如くに之を信じ、又その信ずる所を實行し、身を以て世を率ゐることを『持つ』といふのである。されば又『若し暫くも持つ者は我即ち歡喜す、諸佛も亦然なり』ともいはれたわけである。此の如き心をもつ者が即ち佛語に隨順せるものであつて、此の如き人の行が即ち眞の供養である。涅槃經の文は今迄にも屢々引いたが、此經の中に貧女が其の愛子と共に溺死したことが譬喩として說かれてある。其の貧女の境界を說いて

居家救護の者有ること無く、加ふるに復た病苦飢渴に逼められて遊行乞丐す。佗の客舍に止り、一子を寄生す。是の客舍の主驅逐して去らしむ。其の產して未だ久しからざるに是の兒を携抱して佗國に至らんと欲し、其の中路に於て惡風雨に遇ひ寒苦並び至る。

とある。斯く多くの困苦を重ねて、恒河を渡ることになつたのであるが、

兒を抱いて度るに、その水漂疾なれども敢へて捨てず。是に於て母子遂に共に俱に沒しぬ。

とあつて、此の貧女はたとへ死んでも其の愛兒と離るゝに忍びなかつたのである。釋尊は此の

母の子に於ける慈念の如くに、一心に法を護れと敎へられた。即ち是の如き女人慈念の功德により、命終の後梵天に生じぬ。若し善男子有りて正法を護らんと欲せば、彼の貧女が恒河に在りて子を愛念するが爲に身命を捨つるが如くせよ。善男子、護法の菩薩も亦應に是の如くなるべし。寧ろ身命を捨てよ。是の如きの人は解脫を求めずと雖も解脫自ら至ること、彼の貧女が梵天を求めずして自ら至るが如し。

とある。法を護つて斷絶せしめざることは最も大なる功德で、これが佛恩に報ずるの第一なのである。

又此經の中に有德王が正法を護るために命を捨てたといふ有名な話が出て居る。遠き過去の世に於て拘尸那城に歡喜增益佛が出て法を說き、衆生を敎化し已りて入滅せられたのであるが、其の後に有德王の護法の事蹟が現はれて來たのである。即ち經文には

爾時に一の持戒の比丘あり、名を覺德といふ。多く徒衆眷屬有りて、能く師子吼し、頒宣して廣く九部の經典を說く。諸の比丘を制して奴婢牛羊非法の物を畜養することを得ざらしむ。爾時に多く破戒の比丘有り。是の說を作すを聞きて皆惡心を生じ、刀杖を執持し、是の法師に逼る。是時の國王の名を有德といふ。是事を聞き已り護法の爲の故に即ち說法者の所に往至し、是の破戒の諸惡比丘と極めて共に戰鬪し、說法者をして危害を免ることを得しむ。王時に創を被ること擧身に周遍す。爾時に覺德尋いで王を讃めて言く、善い哉善い哉王は今眞に是れ正法を護る者なり。當來の世に此身當に無量の法器と爲るべしと。王是時に於て法を聞くことを得已りて心大に歡喜し、尋いで即ち命終して阿閦佛の國に生る。

とある。正法が世に廢れてしまへば、世は眞暗闇になるのであるから、有らゆる人の力を集めて正法を護らなければならぬのである。正法を護るといふことには種々の力が必要である。佛法を學ぶために力を盡す者、佛法を說き弘むるために力を盡す者、財力を以て之を援助する者之に對する迫害を防ぐために有德王の如くに力を盡すもの、其他種々あるであらうが、其等は何れも不朽の事業に貢獻する者であつて、所謂諸佛の稱めたまふ所である。

人々皆佛性を具へて居るとはいふものゝ、其の佛性を長養し開發する方法が立たなければ佛性を具へたかひは無い。之を長養し開發すべき道を吾等に指示されたものが即ち佛法であるから、吾等は佛の大慈大悲の力に賴つて、佛性を具へたかひの有る生き方をするやうに努めなければならぬのである。此の法は佛の說きたまへるものであるが、佛は吾等の本性を見究めて此の法を說かれたのである。吾等に此の貴い法を信解し得べき力の本來具はつて居ることを見究

めて、斯る法を說かれたといふことが何よりも有難いのである。韓退之が雜說を作つて『世に伯樂有りて然る後に千里の馬あり』といひ、

千里の馬は常に有れども而も伯樂は常に有らず。故に名馬有りと雖もたゞ奴隸の手に辱められて槽櫪の間に斃死し、千里を以て稱せられざるなり。

といつたのは尤もな言である。千里を走る力があつても之を認むる者がなければ駑馬の群に混じて毎日を送らなければならぬ。左樣いふ事を久しく續けて居る間に、其の千里の志はいつか銷耗してしまつて、結局駑馬となつて終るより外はないのである。吾等衆生も亦その如くである。若し吾等に佛性が具はつて居るといふことを指示されもせず、唯だ無意味に近い毎日を送るのみであつたなら、吾等は徒に自ら侮り自ら輕んじて果敢なく一生を過してしまふであらう。

『一切衆生悉く佛性有り』といふ一語は吾等に取つて何より大なる力である。一切衆生は千差萬別である。其の中には賢者も愚者も共に含まれて居る。善人も惡人も皆共に含まれて居る。それが盡く佛性を具へて居て、修養を積みさへすれば皆共に佛となることが出來るといふことを明言されたのは、眞に有難いことである。吾等は佛に對して深く感謝しなければならぬと共に、又吾等自身が斯る貴い本性を具へて居るといふことに對して深く感謝しなければならぬのである。釋尊が降誕の時に於て『唯我獨尊し』といはれたといふことは誰も能く知る所であるが、それは種々の經典にも出て居る事で、例へば瑞應經には

四月八日の夜に到り、明星出る時に化して右脅より生じて地に墮ち、即ち行くこと七步にして右手を擧げ住りて言はく、天上天下唯我獨り尊し、三界は皆苦なり何の樂む可き者あらんと。

とあり。又因果經には

菩薩即ち蓮花の上に墮ち、扶持する者無きに自ら行くこと七步にして右手を擧げて師子吼す。我一切天人の中に於て最尊最勝なり。無量の生死今に於て盡きぬ。此の生に一切の人天を利益せんと。

とある。而して智度論には

菩薩初めて生るゝ時行くこと七步にして口に自ら說言す。我が生るゝ所以は衆生を度せんが爲の故なりと、言ひ已りて默然たり。乳哺すること三年、行かず語らず、漸次に長大にして行き語ること法の如し。一切の嬰兒小時には未だ行語すること能はず、漸次に長大にして能

く人の法を具す。今菩薩初めて生れて能く行き能く語り、後便ち語ること能はず。當に知るべし是れ方便力の故なり。

とある。此等の傳說は釋尊が吾等一切衆生を救ふべき天職を帶びて此の世に降誕せられたものであるといふことを示すものであるが、併し是れは獨り釋尊の御身の上にのみ限られた事ではないのである。

吾等衆生は皆佛性を具へて居ながら其の佛性を具へて居ることを自覺せず、種々なる煩惱に役せられて無意味に近い每日を送つて居る。故に『三界は皆苦なり何の樂む可き者あらん』といはるゝのである。若し自ら佛性を具へたることの自覺を得て、此の佛性を開發すべきために力を盡さうといふ決心をすれば、『天上天下唯我獨尊し』といふ自信をも得らるべきである。『我』といふのは釋尊御一人のことではない凡て『佛と成るべき者』のことである。前にも屢々引いた語であるが首楞嚴經には

衆生元より佛性有り、他より得べきにあらず。

とあり、又大集經には吾等の心性の至て淨きことを說いて

猶ほ虛空の玷汚すべからざるが如し。

といつてある。此の自覺を得たる者はやがて一切衆生を救ふべき力をも具ふるやうになり得べき者である。佛の敎が如何に貴くても無よりして有を生ずべき力のあるものではない。吾等の本來具へたる佛性が佛の敎を學ぶことによつて長じて行くに外ならぬのである。昔の高僧の行狀に就ては隨分奇拔なことが傳へられて居て、中には佛像を毀して焚き、その上に跨つて暖を取つたといふやうな話さへあるが、それは決して佛を尊いと思はぬといふ意味ではない。自己の具へたる佛性の貴いことを知り、自ら努力して佛にならうといふ決心をしなければならぬといふ敎訓を示したものである。

又佛や高德の菩薩が道を行く時には其の脚の下に蓮花が生ずるといふことも言ひ傳へられてあるが、是れは其の德を天地間の凡ての者が讃歎するといふ意を表はしたものである。釋尊が生れた時に蓮花の上に墮ちたといふのも、斯る高い德を具へた御方であるといふ意を表はした話であるが、是れ亦釋尊御一人のことではなく、吾等が皆蓮花の上へ生れ落ちた者と思ふべきである。又誰も扶持するものが無くて七歩を運ばれたといふのは、誰でも佛に成るのには自ら努力し自ら修行を積まなければならぬといふ意味を現はしたものである。次に『無量の生死今に於て盡きぬ』といふは即ち眞の覺を得たる者の境界である。前の章にもいつたことであるが

生死といふは人生に於ける種々の變化を總稱するのである。凡夫は其等の種々の變化によつて一々に影響を受け、榮ゆれば喜び衰ふれば悲み、勝てば誇り負くれば元氣を失つてしまふ。眞の覺を得た者は決して境遇の變化によつて其の心を動すことはない。これ即ち生死の外に立てる者である。久しい間生死の中に流轉して居たが、一たび覺を得れば最早其等の累を受くることは無いといふ意が『今に於て盡きぬ』といふ一語によつて能く現はされて居る。

白雲深き處月輪孤なり。

といふ語があるが、吾等が下の方から眺めて居ると、雲が重れば月が隱れ、雲が散れば月が顯はれて來るのである。併し月その物は雲の有無にかゝはらず獨り澄み渡つて居るのである。生死に累はされぬ者の心事も亦此の如くである。此の如くにして初めて天上人間一切の者に利益を與ふべき力が具はるのである。

又智度論にあるやうに、最初生れた時には能く行き能く語り、然る後に行かず語らずして三年を經たといふのも極めて意味深き教訓である。吾等は皆生れながらにして佛と成り得べき貴き本性をもつて居るのであるが、此の貴い本性は學ばず努めずして其の働きを現はすものではない。吾等は貴い本性を具へて居るものであるから、決して徒に自ら輕んじ自ら卑しんではならぬ。併し此の本性を長養することに努めずして、空しく自ら傲り自ら安んずるは愚の至である。釋尊御一代の事蹟は實に吾等に對する活きたる教訓である。其の言に出して說かれた教が貴いばかりで無く、其の身に行はれた所が盡く皆貴い說法である。嵐雪の句に

今日になりて菊作らうと思ひけり

とあるのは能く人情を悉したるものである。菊の美しく咲き出たのを見れば、誰でも菊を作りたい氣になるが、菊を美しく咲かせるのには非常なる丹誠を積まなければならぬ。前の年から殆んど毎日骨を折つて、次の年の秋に美しい花が咲くのである。其の骨折をせずして、人の家の菊の美しく咲き出たのを見て羨んでも役には立たぬ。併し菊作らうと思つた其の日から心掛けて丹誠をしさへすれば、翌年の秋は自分の家にも美しい花が咲くのである。吾等が釋尊の御事蹟によつて學び得る所も亦此の如くでなければならぬ。

釋尊は吾等に對して實行の範を示さるゝと共に、吾等のために貴い佛法を說き遺したまうたのである。其の法は吾等の具有する所の本性に基いて說かれたものである。吾等の具有する所の本性は即ち釋尊の具有せられたる所の本性と異るものではなく、所謂他より得べきにあらざるものである。其の教法の基く所は吾等の本性である。即ち大乘義章に

自體を法と爲す

といふ説明も能く了解が出來るわけである。併し吾等は此より更に廣い意味を考へて見なければならぬ。倶舍論註疏に

法の名を釋するに二あり。一には能く自性を持つなり。謂く一切の法各自性を守る。色等の性の常に變ぜざるが如し。

とある。此の意味でいへば凡て其の本性を具へて居るものを盡く法と名けてよいのである。吾等自身も法であるが、吾等の相對する凡ての物も皆盡く法である。有らゆる法が集つて居るのであるが、其等諸法は各その本性を具へて相同じからぬものである。之を總稱して即ち法界といふのである。摩訶止觀に、

法界の外に出て何れの處にか別に法有らん。

とあるが、止觀輔行（妙樂のかいた止觀の註釋）には

法界といふは、法とは即ち諸法にして、界とは界分を謂ふなり。相同じからざるが故に。

とある。吾等の眼前にあるもの即ち法界である。

佛は諸法の實相を知りたまへる者であるといふが、諸法とは一切の事物のことである。一切の事物は皆それ〴〵其の本性をもつて居る。蘇東坡の詩の句に

柳綠花紅眞面目

とあるが、柳の葉はいつも綠で、花の色はいつも紅である。それが各自の眞面目で、彼の倶舍論註疏にいふ所の各自性を守るものである。其等凡ての物の本性を明かにし得たことを諸法の實相を知るといふのである。佛は能く自ら知り、又能く他を知り、能く有らゆる人を知り、又有らゆる物を知り、之に基いて法を説かれたのである。其の説かれたる法（即ち教法）は、一切の事物の實相の上に立脚したるものであるから、萬古に亘つて變らぬ所の力を具へ、一切衆生を救ふ所の働きを具へて居るのである。吾等も亦佛の教へられたる所を學ぶことに依つて、諸法の實相を知るべき力を具ふるやうになれるのである。能く知るものは能く物に對し人に對する道を覺り、惑はず懼れずして、其の心は常に平和である。

各種の經には皆其の經の功德が説かれてある。例へば此經を持つものは一切の人を救ふべき力があるとか、此經を讀誦すれば有らゆる災難を攘ふことが出來るとかいふ類のことが説かれてある。それで和漢共に天變地天などがあると、多く僧を集めて經を讀誦せしめるといふやうな事が屢々行はれたのである。併し經が貴いといふのは經の文字が貴いといふことではなく、

その文字に現はされたる法が貴いといふことである。其の法は諸法の實相の上に立脚して說かれたものであるから貴いのである。法華經の法師品には

在々處々に若は說き若は讀み若は書き、若は經卷所在の處には皆應に七寶の塔を起し、極めて高廣嚴飾ならしむべし。復た舍利を安んずることを須ゐず、所以は何ん、此の中には已に如來の全身有す。此の塔をば應に一切の華香瓔珞繒蓋幢旛、伎樂頌歌を以て供養恭敬尊重讚歎すべし。若し人有りて此の塔を見ることを得て禮拜し供養せん、當に知るべし是等は皆阿耨多羅三藐三菩提に近きぬ。

とあるが、是れは法の貴いことを力說せられたる文である。

釋尊は自分の滅後に遺骨を埋めて寶塔を建てるには及ばぬから、經卷所在の地に寶塔を建てよと命ぜられた。抑も塔なるものは佛菩薩等の德を記念し、之を普く世に傳へんが爲に建てらるゝもので、其の起原に就て十誦律の中には次の如くに記してある。

給孤獨居士深心に佛を信じ、佛所に到り頭面に足を禮して一面に坐し、佛に白して言さく、世尊、世尊の諸國に遊行したまふ時我世尊を見たてまつらず、故に甚だ渴仰す。願はくば一物を賜へ、我當に供養すべしと。佛爪髮を與へて言はく、居士汝當に此の爪髮を供養すべしと。居士即時に佛に白して言さく、願はくば世尊我が爪塔髮塔を起すことを聽したまへと。佛言はく、爪塔髮塔を起すことを聽さんと。是を起塔の法と名く。

是れは佛を記念するために塔を建てたことを述べたのである。然るに眞諦三藏（西印度の人であるが、梁の武帝の時に支那へ來て佛敎を弘め多くの經論を譯述した）は、十二因緣經に據つて八種の人の爲に塔を起すことを得べきを說いた。此の經は今に傳はらぬものであるが、眞諦三藏のいふ所に依ると、塔の上の露盤の層數によつて其の人の德を表はすといふことである。即ち佛塔は露盤八重以上、菩薩のは七盤、緣覺のは六盤、羅漢のは五盤、阿那含のは四盤、斯陀含のは三盤、須陀洹のは二盤、轉輪王のは一盤である。若し比丘比丘尼等のために塔を起す時は、其の塔の上に露盤無く、又人をして之を禮拜せしめぬが宜いといつてある。それは佛菩薩等の如き德が具はらぬ者であるからであらう。

今日では昔と時勢がちがふから、必ずしも佛菩薩の德を記念するために塔を起すには及ばぬ。たゞ塔を起した人々の精神を學べば宜いのである。それは佛菩薩の德を永く忘れず、其の遺されたる敎を普く世に弘むる爲に努力しやうといふ精神である。此の精神を失はなければ宜いのであるが、特に注意すべきは釋尊が『我が爲に塔を起すに及ばぬから、經卷所在の處に

塔を起せ』と仰せられ、其の理由として『此の中に佛の全身があるぞ』と仰せられたことである。是れは最も大切のことであるから、前にも一通りいつた事であるけれども重ねて此處に申述ぶるのである。經卷の中に佛の全身があるといふのは、此の經の中に說かれたる法が即ち佛の全身であるとの意である。

佛法を學ぶ心がなくて、唯だ佛像を禮拜しても佛は決して御悅びにはならぬといふことを能く辨へなければならぬ。

抑も禮拜するといふことは何の意味であるか。それは崇め尊ぶ意味でなければならぬ、又信奉する意味でなければならぬ。又賴み奉るといふ意味でなければならぬ。既に佛を崇め、佛を信じ佛に賴るといふ念がある以上は、佛が吾等の爲に說き遺されたる法を忽且にしてならぬのは勿論の事ではないか。

但し佛像を禮拜することを無用といふのではない。佛の大慈大悲に感激する念がある者は、佛の姿を寫したる木像畫像等を禮拜供養する心の起るのが當然である。昔周の召伯は德の高い人であつたので、民が其の德を慕うて、召伯の宿つた所の甘棠の樹を永く記念して、其の枝を折りもせず撓げもせぬやうにと語りあつたことが詩經の中に出て居る。是れが人情である。耶蘇敎を奉ずる人の中には一切の神佛を拜することを皆偶像崇拜として排斥するものも少くないが、それは至て淺はかなる考へ方である。偶像を拜んでならぬといふことは豫言者モーセがシナイ山の麓に於て神より受けたる十戒の中に

我は汝の神エホヴアなり、我より外何者をも神とすべからず。

とあり、又

汝偶像を造りて之を拜み之に事ふべからず。

とあるのに據るものであるが、其の所謂偶像の意義を深く考へて見なければならぬ。偶像といふは單に木や石で作つた神の形といふ意味ではない。各自が其の心で勝手次第に想像して作り上げた神は皆偶像といふべきである。眞の神ならぬ神、人が私に作り上げた神、此等をこそ眞の偶像といふべきである。凡夫が勝手に想像して作つた神は、必ず凡夫の欲望を滿足すべき力をもつた者と考へられたる神、即ち神聖なる性質を失つたる神である。之を排斥するのは當然のことである。

それと吾等が佛菩薩の像を禮拜するのとを同一視するのは間違つて居る。吾等が木像や畫像を拜むのは、其の木とか紙とかを拜むのではない、それを通して佛や菩薩を拜むのである。此

の場合に吾等の眼に映る佛菩薩の姿が媒となつて、吾等の心に佛菩薩の御力が通ふのである。例へば親の恩を有難いと思ふ人ならば、親の遺した物を、假令微細な物たりとも麁末には扱はぬ筈である。孔子が『三年父の道を改むる無きは孝と謂ふべし』といはれたのを、孔安國が說明して、

孝子喪に在りて哀慕す、猶ほ父の存するが若し。父の道を改むる所無きなり。

といつたのは能く人情を悉したる語である。宰我が孔子に向つて『三年の喪は長きに過ぐるやうである、一年で宜くはあるまいか』と問うた時に、孔子は

女安くば之を爲せ、夫れ君子の喪に居る、旨を食へども甘からず、樂を聞けども樂まず、居處安からず、故に爲さざるなり。今女安くば之を爲せ。

と叱し、宰我がその坐を立つた後で

子生れて三年然る後に父母の懷を免る。夫れ三年の喪は天下の通喪なり。

といはれたと。斯く報恩の重んずべきことが古來から懇に敎へられてあるので、彝倫を尊む、といふ美風が永く廢れずに居るのである。父子の間に此の如き恩愛情誼の存すると同樣に、師弟の間も亦極めて敦き恩愛情誼を以て結び附けられて居たものと思はれる。

禮記には『凡そ學の道は師を嚴にするを難しと爲す。師嚴にして然して後に道尊し。道尊くして然して後に民學を敬することを知る』とある。師弟の間に嚴しい禮節の必要なるはいふまでもないけれども、それと共に父子の如き恩愛の存するあつて、初めて所謂師道が立つて居たものである。孔子と顏淵とのことは今までに幾度もいつたが、顏淵が死んだ時に其の葬儀の行ひ方に就て孔子の指圖せられたことを、他の門弟子等が能く守らなかつた。(他の門弟子も決して師の命を輕んずる意があつたのではないが、朋友の情として、孔子の命ぜられた程度よりも手厚く葬儀をしたのである。)孔子は之を聞いて、

回や予を視ること猶ほ父の如し。予視ること猶ほ子の如くなるを得ず。

と嘆息せられたといふ。孔子の此の言を彼の匡に於て危難に遭つた際に顏淵が『子在す、回何ぞ敢て死せん』といつた言(此の事は前にも引いたが)と比べ合せて見ると、顏子が其の師の德行に對して心服して居たのみならず、宛ら子の父に對するが如き情を以て師を愛慕して居た有樣がよく分ると思ふ。又孔子が顏淵を吾が子の如くに愛して居られたことは、其の死に當つて覺えず慟哭し、なほ又

噫天予を喪せり、天予を喪せり。

と長嘆せられたのに依つても察せられる。獨り顏淵のみならず、他の諸弟子に對しても孔子の情愛の厚かつたことは、

閔子側に侍す、誾々如たり。子路は行々如たり、冉有子貢は侃々如たり。子樂む。

とあるによつても略ぼ想像し得られるやうである。又或時孔子が數人の弟子に各其の理想とする所を語らせた中に、曾點が

暮春には春服既に成り、冠者五六人、童子六七人、沂に浴し舞雩に風し、詠じて歸らん。

といつたのを聞いて孔子は喟然として歎じて『吾は點に與せん』といはれたのを見ても、如何に英才を教育することを樂みとして其の半生を過されたかを知るべきである。師弟の道はたゞ嚴なるのみが主ではない。此の如くに恩愛情誼によつて離るゝことの出來ぬやうに結び附けられて居てこそ眞の師弟である。

釋尊が孝道の重んずべきを教へられたことは今までに屢々説いた所であるが、其の御弟子との間に父子の如き恩情の存して居たことは、御弟子の人々が常に愛慕して已まなかつた事情に徵しても（前に引いた給孤獨居士の塔を起した事の如きは其の適例といふべきであらう。此人は有名なる祇園精舍を作つた須達長者のことである。常に孤獨の人を救濟することに力を盡したので、世間の人が之を尊んで給孤獨長者といつたと傳へられて居る。）知るべきである。前にも法華經壽量品の文を引いたが、其の中に賢き父が愚なる子等を憫むが爲に或る方便を設けて、良き藥を與へ、子等も亦父の慈愛に感じて其の藥を服したことを述べて、佛と衆生との關係を説明せられ、衆生が佛を思慕する情を説かれて、

咸く皆戀慕を懷いて渴仰の心を生ず。

とある。眞に佛の御教の尊いことを知るものは在世の御弟子達は勿論後世に生れた吾等と雖も皆佛に對して戀慕を懷き渴仰の心を生ずべきものである。

佛を思慕する心が切であれば、佛の在さぬ時に佛の遺し置かれた物とか、若くは佛の御姿とかに對して、せめては思慕の情を慰めんとするのが人情である。彼の祇園精舍とか竹林精舍とかいふのは何れも佛の説法したまへる靈場であるが、釋尊の在さぬ時に御弟子の中の重な人が代つて説法する場合には、釋尊の坐したまへる法座を眞中に置き、自分は其の側に立つて説き『佛に代つて説く』といふ意を現はすと共に、佛の御力が自分の説く語の中に少しでも宿るやうに祈つたといふことである。師弟の情として左もあるべき事と思はれる。此の如き情が現はれて佛像を作るといふことにもなつたものである。獨り佛のみならず、佛の化導を賛くるほど

の力のある菩薩は無量義經にも、

是れ諸〳〵の衆生の大良福田、是れ諸〳〵の衆生の請ぜざるの師、是れ諸〳〵の衆生の安穩の樂處救處護處、大依止處なり。處々に衆生の爲に大良導師、大導師と作る。

とある通り、一切衆生に崇敬愛慕せらるゝこと佛と多く異る所なき者であるから、此等諸菩薩の像が佛像と同じやうに作らるゝやうになつたのも更に不思議ではない。

佛や菩薩の像を造ること、若くは拜むことに大なる利益があるといふのは斯ういふ意味を含んでのことである。勿論後世になると一身一家の繁榮を祈るために佛菩薩の像を拜むことが盛になり、彼の耶蘇教徒などに偶像崇拜として非難されても仕方がないやうなことになつたが、斯る弊があるからと云つて、佛菩薩の像を造ることが罪惡であると斷定するのは、食ひ過ぎて腹を痛めた者を見て、食物は一切有害であると斷定するのと同樣な、まことに愚な業である。佛の吾等に遺されたる教を能く信じ能く守りさへすれば、それで各自も救はれ、世の中も善くなつて行くには相違ないが、此の『能く信ずる』といふことが實は容易に出來るものではない。其の說かれた道理がスッカリ呑み込めてからでなければ信ずることが出來ぬものならば、能く信ずる人などは殆んど無くて終るかも知れぬ。前にもいつた通り宗教が立派な宗教として成立つためには

哲學的基礎をもつて居ることが必要ではあるが、哲學が即ち宗教であるといふことは出來ぬ。

哲學は研究を主とするものである。即ち專ら理智の作用によつて成立つものである。宗教にも理智の働きは大切であるけれども、それと共に感情の働きがまた極めて重要なる要素となつて信といふものが成立つ。それが無ければ宗教といふものではない。如何に多くの宗教の教理を比較研究して、それを一々誤りなく理解して居ても、それだけでは宗教研究者たるに止り、宗教を信奉するものとはいはれぬ。之を信ずる者でなければ、勿論之を實行することも出來ぬわけである。

多くの事を知らずとも、信ずることが篤ければ淨く正しい行をすることは必ず出來る。釋尊の御弟子の中に槃特といふ極めて魯鈍なものが終に覺を得たといふ話が傳はつて居る。彼は何事を聞いても直に忘れてしまふので、釋尊はたゞ『箒をもつて塵を掃へ』といふ一句を敎へて之を暗誦せしめたが、『箒を』と思ひ出す時には『塵を掃ふ』といふことは思ひ出せず、『塵を掃ふ』と思ひ出す時には『箒をもつて』といふことは思ひ出せず、幾度も習つては幾度も忘れ、

六年の歳月を送つてしまつた。併し六年を過した後に至つて其の箒といふのは佛の正法のことで塵といふのは心の惑のことであるといふ意義を覺り、終には他の多くの御弟子達にも仰ぎ貴ばるゝやうな立派な人物になつたと傳へらるゝのである。法句譬喩經には

賢者槃特は一偈の義を解して理に精しく神に入る。身口意寂として天の如し。

と稱めてある。眞に彼が如きは賢者と稱せらるゝに耻ぢぬ人である。千萬言を學んでも實行の出來ぬ人は一句を學んで之を實行した人に及ばぬこと遙かに遠い者といはなければならぬ。

此の槃特に關する說話は、信の力の如何に重んずべきかを能く說明したるものである。彼は深く釋尊を信じて居た。又釋尊の敎へられた所を守りさへすればよいといふことを固く信じて居た。それ故に幾度でも其の習つた一句を繰返し繰返して倦まず怠らなかつた。其の爲に終に魯鈍極まる境地を脫して、賢者と稱せらるべき人となり得たのである。中阿含經の中に信の貴いことを述べて、

國王の邊城に樓櫓を造り地を築き、堅くして毀ち壞ること能はざらしむるは、內に國家を安穩にし、外に怨敵を制せんが爲なるが如く、佛子堅固に如來を信ずれば信の根已に立ち、終に他の沙門梵士、惡魔及び惡世間には隨はず。是を信の城樓を得たりと謂ひ、佛子の惡不善を除き諸の善を修するの法と爲す。

とあるが、槃特の如きは正しくそれである。又華嚴經には

信を道の元と爲す。功德の母なり。一切の諸の善法を長養す。

とあるが、これも槃特の場合に能く當て嵌まる敎訓である。彼は唯だ釋尊を信ずることを知つて居た爲に、終に覺を得て多くの人々を敎へ導くべき力をも具ふるやうになり、多くの功德を種ゆることが出來たのである。

若し佛の在世に生れあはせ、面のあたり佛を拜することが出來るならば、信を得ることもそれ程難くはないであらう。佛の具へたまへる洪大無邊の德は自ら其の御姿にも御語にも現はれて居たであらうから、たとへ其の說きたまへることの深い意義は分らずとも、其の御姿を拜し、其の御語を聽いたゞけで大なる感化を受け得られたに違ひない。併し末世の吾等にはさういふ事は望まれぬ。尤も佛の吾等に說き遺されたる法の中に佛の御心は打込まれてあるのであるから、之を充分に味へば、親しく佛の說法を聽くのと同樣であるべき筈であるが、之を深く味ふといふことが實は頗る難事である。されば莊嚴なる儀式を整へ、尊い佛像を拜して宛ら佛と共に在るが如き感じを起すといふことが如何しても必要になつて來るのである。古今東西を

問はず、

宗教には必ず莊嚴なる儀式が伴ふのである。唯だ教理を究むるといふだけで信を起すといふことは頗る困難である。

吾等人類はたゞ理智の力のみによつて動さるゝものでなく、感情の力によつて動さるゝことが極めて多いのであるから、唯だ教理を學ぶのみでは甚だ物足らぬ感じのするのが當然である。佛菩薩の像を拜することは信心を養ふために最も有益なことであつて、之を一概に偶像崇拜と批評し去るが如きは、宗教といふものゝ本質を能く辨へぬ者の言といはなければならぬのである。

但し吾等が佛菩薩の像を拜むに就て深く考へなければならぬのは、佛や菩薩の德が形に現はし盡せるものではないといふことである。昔から言ひ傳へられたる三十二相とか八十種好とかいふものは、要するに佛の具へたまへる德が自然と外に現はれたもので、『法界次第』には、

如來應化の身に此の三十二相を具して、以て法身の衆德の圓極を表はすなり。

とある。應化とは衆生の有らゆる惱みを救はんが爲に世に出て、之に化導を與へらるゝこと。法身とは佛の本性のことである。(なほ此等の事は後に委しく說くつもりである)。又無量義經の中には三十二相を數へ上げて後に

是の如き等の相三十二あり、八十種好見る可きに似たり。而も實には相非相の色無し。

とある。三十二相といふのは之に對する者をして自ら崇敬の情、歸依の念を起させるやうな氣高い姿が頭とか顏とか手足とかに現はれて居るさまを數へ上げたものである。更に之を一層細かに分けたのが八十種好である。八十種好とは『八十種の好き相』といふ意である。斯く尊く氣高い姿は佛の具へたまへる德が自ら外に現はれたものではあるが、いかに美しく尊く見えても限りある姿形を以て、限りなき德を現はし盡すことは出來ぬ。それ故に此の經文には『相に現はし盡せぬものが實在するのである』といつてある。

されば畫とか彫刻とかに非常に卓越したる人があつて、此の三十二相八十種好を少しも遺憾なく現はし得たとしても、それでも佛や高德の菩薩を活きた通りに現はすことは不可能と見なければならぬ。況して其等の好相を盡く現はすだけの技倆をもつた者は殆んど無いのであるから、唯だ佛菩薩の像を仰ぎ見るだけではいつも極めて物足らぬものたるを免れぬわけである。併し自身の信仰が進むに隨つて、同じ像に對しても以前よりも尊さが增したやうに感ぜらるゝに違ひない。それは

其の像に現はし盡せぬ所までも、自分の心で補つて仰ぎ見ることが出來るからである。同じ物を見ても、見る人の心の持ち方で全く異つて見える。貧しい家では障子にも穴が明いて居る。その穴から秋風が吹き込むのは決して愉快なものではない。然るに貧しい俳人として知られた一茶の句に

美しや障子の穴の天の川

といふのがある。吾等を繞る所の自然界の美しい風物にいつも心を惹かれて居る一茶の如き人は、障子の穴から天の川を見ても、それを『美しや』と讃歎して、その貧しさを忘るゝことが出來たのである。一寸や二寸の小い穴から見えた天の川は少しも美しいものではないが、一茶は其の想像力を以て之を補つて美しく見たのである。彼は幾度も晴れ渡つたる大空を仰いで、其の大空に白く斜に懸る所の天の川の美しさに眺め入つたに違ひない。されば今障子の穴から天の川を見た時も、その美しかつた景色を思ひ出し、『美しや』の句を得たわけである。

佛菩薩の像に對する者も亦此の如くでなければならぬ。佛法に就て全く知る所なく、たゞ一身一家の福を祈るが爲に佛菩薩の像を拜するものは暫く措き、聊かなりとも佛法を學び、佛に歸依する心を持てるものは、其の尊い像を拜することによつて一層其の信心を增進し得らるゝであらうが、又其の信心が增進するに隨つて一層其の像の尊さが愈增るやうに感ぜらるゝであらう。要するに吾等が禮拜讃歎する所の主體は、木像でも繪像でもなく、其の像によつて現はされたる生身の佛なり菩薩なりであることを忘れてはならぬのである。されば其等の尊像に對して合掌する際にも、

佛の御心は其の吾等に遺されたる貴い法の中に籠つて居るといふことを決して忘れず、此の法を學び、此の法を信じ、又此の法を世に弘むるために力を盡すことが即ち洪大無邊なる佛恩に報ずる所以であると覺悟して居なければならぬのである。併し此の如き覺悟を固めるのは實に容易なことではない。華嚴經の中には

普く衆生を觀じて道心を發す。

とあるが、道心とは即ち佛の境界に達せんことを求むる心で、菩提心といふと同じ意である。法華經義疏には『菩提を道といふ』と說明してある。普く衆生を觀ずるといふは世間一般の人の生活の無意義に近いことを徹底的に知ることである。斯くして初めて佛の正法を學び、又此の正法を世に弘めて、多くの人を其の虛僞の生活より救ひたいといふ考へが起つて來るわけである。遊戲的の氣分で何十年佛法を學んでも、道心を發すことの出來るものではない。

中阿含經の中に說かれたる大人の八念といふは、吾等のために極めて適切なる訓戒を含むものである。これは阿那律が案じ得たる所で、其の大人といふは大なる志のある人のことである。大なる志とは一切衆生を救ふべき力を具ふるやうになりたいといふ志である。苟くも佛弟子たる者は誰も皆此の志をもつべき者である。阿那律は獨り林中に坐して、靜かに此程から佛によつて說き示されたる所を思ひ返し、此の八念を得たといふことである。それは

(一)道は無欲によつて得らる、有欲にして得べきにあらず。(二)道は知足によつて得らる、厭くこと無くして得らるべきにあらず。(三)道は遠離によつて得らる、聚會にして得らるべきにあらず。(四)道は精勤によつて得らる、懈怠にして得らるべきにあらず。(五)道は正念によつて得らる、邪念にして得らるべきにあらず。(六)道は定意によつて得らる、亂意にして得らるべきにあらず。(七)道は智慧によつて得らる、愚癡にして得らるべきにあらず。(八)道は不戲樂によつて得らる、戲行にして得らるべきにあらず。

といふのである。此の八點に注意することは獨り佛法を學ぶ者のみならず、一技一藝に達せんとする者にも極めて肝要なる義と思はるゝのである。此より簡單に此の八點に就て說明して見やう。

先づ第一に無欲といふことが擧げてあるが、欲といふにも種々の別がある。佛の境界に達せんことを欲し、一切衆生を救護せんことを欲するのも亦一種の欲である。此の如き欲は大きいほど結構なので、智度論の中に擧げられたる十八不共法(佛の具へたまふ十八種の功德のこと である)の中には『欲無減』といふことが數へてある。それは一切衆生を救はうといふ念が常に熾であつて、決して減少することの無いのをいふのである。斯樣の欲は至て貴いものであるが、普通吾等の欲といふのはさういふのとは全く正反對のもので、大乘義章に

緣に於て受くることを欲するを欲と稱するなり。

といふのが其の意を悉して居る。即ち周圍の者に向つて求めて止まぬ念をいふのである。其の求むる所は財物、權勢、名譽等種々である。若し自己の努力に對して名利權勢等を得んことのみを常に念とするならば、自己の望むやうなものが得られぬ場合には直に其の努力を止めるであらう。此の如き考へでは一技一藝に熟達することすら出來ぬに極つて居る。芭蕉が自分の境遇を說いて

假に名けて風羅坊といふ。誠にうすものゝ風に破れ易からんことをいふにやあらん。狂句を好むこと久し、終に生涯のはかり事となす。……終に無能無藝にしてたゞ此一筋に繫がる。

といひ、古來の有らゆる道に精通したる人々の事をあげて『その貫通するものは一なり』といひ、更に自已の身の上に返つて、

而も風雅に於けるもの造化に從ひて四時を友とす。

といつたのも、要するに他に對して求むる所なく獨り其の道を樂むことを述べたのである。又渡邊華山が三河の田原に幽居中に椿山に與へた書簡の中に、

之に依つて閑を求めずして身閑なり、靜を求めずして心靜なり。閑靜は書畫を生ず。山靜にして草木生じ、人靜にして思慮出づ。畫なるもの人に耻ぢず、天に背かぬ樣に出來候はゞ願欲する所の者得らるべく候歟。

とあるのも、外に向つて求むる所なき心境を能く言ひ現はして居る。此の如くにして初めて芭蕉の如き名句も出來、華山の如き名畫も出來たのである。況して道を學ばんとする者は猶更のことである。孔子の言に

人知らずして慍らず亦君子ならずや。

とあるは、人の能く知る所である。世に知られんことを求めぬ以上は、財貨や權勢などに執著のあらう筈はない。佛法を學ぶ者も固より此の如くであるべきである。佛法を學ぶことによつて利益を得たり名譽を博したりすることを望むならば、いかに久しく學ぶとも、全く學ばざる者と異る所は無いであらう。

第二には知足といふことが擧げてある。これは其の境遇に安んずることをいふのである。强いて順境に處らんことを求むるは愚であるが、ありとて强いて逆境を求むるにも及ばぬ。金が無ければ何事も出來ぬといふは俗士の見であるけれども、金の無い方が宜いといふは偏屈者の考へである。若し安樂に生活すべき境界であつたなら、安樂にして居て何の差支へもない。併し安樂が得られぬならば貧困にも平然として堪へて行けるだけの修養を積んで居なければならぬ。これが即ち『知足』といふことで、知足の者は必ず其の分に安んずることが出來るのである。希臘のソクラテスは人の爲に敎を說いて、人が之に報酬をしやうとした時にはいつも嚴しく之を斥け、『自分は奴隷ではない、仕事をして給料を貰ふことは望まぬ』といつたと傳へられて居る。これは至て潔白の行であるが、人が感謝の情よりして贈らうとする物まで斥けて取らぬのは餘りに心が狹いやうである。プラトーンは人の爲に敎を說いても決して報酬を求めなかつたが、人が感謝して贈つた物は快く受けたといふ。これが穩當なる態度であらう。孟子は屢々舜の事蹟に就て語つたが、或時は

舜の深山の中に居り木石と居り鹿豕と遊ぶや、其の深山の野人と異る所以のもの幾んど希なり。其の一善言を聞き、一善行を見るに及びては、江河を決して沛然たるが若く、之を能く禦むる者なし。

又或時は

舜の糗を飯ひ草を茹ふや、將に身を終へんとするものゝ若し。其の天子と爲るに及びては袗衣を被て琴を鼓し、二女侍る。固より之を有せるが若し。

といつた。野人で居た時は野人たるに安んじて敢て求むる所なく、天子と爲るに及んでは最初から天子で居た者の如くに其の位に安んじ、天下皆之に服したといふ。これ實に舜の聖人たる所以である。何人も遽かに聖人たることは出來ぬが、道を學ぶものは之を以て其の理想としなければならぬ。

知足といふことの正反對は即ち『厭くこと無き』といふことである。厭くこと無きとは自己の欲望を滿足せしめんことを求めて厭くを知らぬをいふのである。人の欲望は際限もなく增長するが、その欲望を充す物は固より際限がある。其の欲望が少しく充さるゝ時には、更に大なる欲望が起る。それは宛も燃え盛つた火に少しの水を注げば却て火勢を增すのと同樣である。

久しく困苦に堪へて清節を守つて居た人が、少しく得意の境遇に入るに及んで、私利私欲を營んで晩年を汚したといふ例が世間には少くない。何よりも戒むべきは此の一事である。若し此處に反省すること無くして、多く學び博く究むるならば、其の學び得たる所は却て其の過を文り其の非を遂ぐるの用に供せらるゝのみで、全く學ばぬ者よりも却て世を害することが多い。

紫の朱を奪ふを惡む。

と孔子のいはれたのは如何にも道理である。佛法を學ぶ者の中にも此の類の少からぬのは、まことに歎ずべきの至である。孔子はまた

士道に志して惡衣惡食を恥る者は與に議るに足らざるなり。

ともいはれたが、程子は之に註して『道に志して而も心の外に役せらるゝもの何ぞ與に議るに足らんや』といつた。必ず惡衣惡食に安んぜよといふのではない。惡衣惡食より外に途がなければ之に安んじて居るべきである。それを恥づるやうな心では、心を專にして道を學ぶことは出來ぬのである。前に引いた傳敎大師の訓戒の中に、

道心の中に衣食あり、衣食の中に道心無し。

といふも此の意である。衣食の美を求むるに專なる者に道心の起らう筈はない。紫衣を纏ひ錦

繡を身に飾る者を羨む者の多い末法の世に『宗教排斥』の聲の昂まるのは少しも不思議でない。一概に宗教を排斥するのは間違つて居るが、魂を失つた宗教は當然排斥せらるべきものである。

第三に遠離といふことが擧げられてあるのは特に注意すべきである。遠離といふのは世俗の人に遠ざかることであるが、それは身に就ていふのでなく、專ら心に就ていふのである。法華經の中に高德の菩薩を稱めて、

世間の法に染せざること蓮華の水に在るが如し。

とあるのが即ち是れである。蓮は水の中に植えられて其の根は深く泥の中に入つて居るが、其の花は高く水の上に出て清く氣高い香りを放ち、少しも泥に汚れぬのである。佛法を學ぶ者は之を以て理想としなければならぬ。其の身は世俗の人の中に混じて居ても、其の心は世俗の人よりも遙かに高きものでなければならぬ。世俗の人の考へが盡く間違つて居るといふわけではないが、其の大多數は眼の前の利害損得ばかりを考へて、永遠の事などは殆んど考慮の中に入れて居ないのであるから、何事に就ても正しい判斷を下すことはむづかしいのである。彼等は皆幸福を求めて居るけれども、如何にしたならば眞の幸福が得られるかといふことを知つて居るものは殆んどない。多數の人を幸福にすることは固より大切であるが、若し多數の人の考への一致する所を其儘に實行するならば、決して之によつて多數の人の幸福を來すことは出來ぬのである。如何にして多數の人を幸福ならしむべきかといふことは、極めて少數の賢者によつてのみ決定せらるべきもので、

多數決は良い指導者を得た時にのみ價値を有するものである。

されば世を導かんとする者は世に求むる所の無いものでなければならぬ。世間の多くの人に知られ、世間の多くの人に喜ばれやうといふ考へでは世間を指導し啓發することの出來るものではない。凡て眞實の道を歩まんとする者は、多數の人の稱讃を求めやうとはせぬのである。七代目市川團十郎は名優であつたといふが、彼は或時其の舞臺に立つ心得を語つて、

あの土間の中で誰か一人私の藝を本當に見て居て下さる方があらうと思つて、少しも氣は許せませぬ。

といつたさうである。彼は決して多くの人の喝采を博さうとは思はず、一人の具眼者の批評を畏れて其の藝に魂を打込んだのである。俳優でも其の道に忠實な者は此の如くである。況して道を究め教を求めんとする者が世間の人の批判などに囚はれて居て濟むものではない。常に其

の身は世間の人に同じて、其の心は世間の人よりも超越して居なければならぬ。

聚會といふは多數の人と混じて居ることで、即ち世間の人の見解に同ずる意味である。若し世間多數の人の意向に一致して、其の人々の間に好い評判を得たいといふ念が一度萠す時には、眞實の道を求めやうとする心は之によつて全く抑へられてしまはなければならぬ。勿論多くの人の惑を解いて、正しい道に入れてやらうといふ慈悲心から、彼等の耳に入り易いやうに敎を說くといふことは、菩薩たる者の必ず具ふべき用意であるが、それと衆に媚びて好評を得やうと努むるのとは全くちがふ。其の外形に於て幾分か似た所があつても其の精神が全くちがふ。一は衆に對する慈悲心であり、一は自己を中心とする名聞心である。孔子の言に

鄉原は德の賊なり。

とある。鄉原とは其の一鄉の人に良い人と稱せられたい爲に、外面を飾る者のことである。朱子は之に註して『夫子其の德に似て德に非ず、反つて德を亂るを惡む故に以て德の賊と爲し、深く之を惡むなり』といつた。孟子が門人萬章の問に答へて此事を說明したる一節は、最も適確であつて、特に今日の時勢に極めて適切なる訓戒と思はれる。即ち次の如くである。

流俗に同じ汙世に合し、之に居るに忠實に似たり、之を行ふこと廉潔に似たり。衆皆之を悅び、自ら以て是なりとして與に堯舜の道に入る可からず。故に德の賊といふなり。孔子曰く似て非なる者を惡むと。莠を惡むは其の苗を亂らんことを恐るゝなり。佞を惡むは其の義を亂らんことを恐るゝなり。利口を惡むは其の信を亂らんことを恐るゝなり。鄭聲を惡むは其の雅樂を亂らんことを恐るゝなり。紫を惡むは其の朱を亂らんことを恐るゝなり。鄉原を惡むは其の德を亂らんことを恐るゝなり。君子は經に反るのみ。經にして正しければ即ち庶民興る。庶民興れば斯に邪匿無し。

庶民興るとは多くの人が奮發して正しき道を行ふことである。多くの人の意を迎へて、氣に入るやうなことばかり語つて居れば、いつも人氣は一身に集る。當世の政治家などの爲す所は多くそれである。此の如きは實に衆人を毒するものである。衆人は其の甘言に惑はされて少しも反省することを知らず、孟子のいつた通り皆『自ら是なりとして與に堯舜の道に入るべからざる』ものになつてしまふ。若し幸にして衆人に媚びず、堂々として經の道を說く人があれば、之によつて覺醒せられて漸く邪匿なきに至るべきである。佛法を學ぶ者は固より此事を以て自ら任じて居なければならぬ。人氣を取ることのみを考へて、自ら欺き他を欺くことに慣れてしまへば佛と相距ること日に益々遠くなり行くべきのみである。今日の佛門に此の如き徒の少か

らぬのはまことに痛歎すべきことである。

第四には精勤といふことが擧げてある。精とは其の心が純粹無垢であつて少しも邪念の交らぬことである。勤とは日夜道を求むることに力を盡して聊かも怠らぬことである。世間の人は皆忙しげに奔走馳驅して居るが、その爲すことの多くは無意味に近い事である。此の如きは『心に能く勤むるものとはいへぬのである。佐藤一齋の言は今までにも度々引いたが、其の『言志錄』に

今人率ね口に多忙を說くも、其の爲す所を觀るに、實事を整頓するは十に一二、閑事を料理するは十に八九。又閑事を認めて以て實事と爲す。宜なるかな其の多忙なるや。

とある。又

人の精神面に在れば物を逐ひて妄動するを免れず。須らく精神を收斂し、諸を背に棲ましむべし。方に能く其の身を忘れて而も身眞に吾が有と爲らん。

ともあるが、まことに良い敎訓である。精神が面に在るといふのは人に見せたい聞かせたいと思ひ、人に知られたい、譽められたいと思つて頻に心を勞することである。斯ういふ淺はかな考へに役せられて日夜忙しく動いて居る人が世間には多いのである。其人自身は能く動き能く勤めて居るつもりでも、正しい意味からいへば之を懈怠の人と稱すべきである。凡て惡を斷じ善を修することに力を盡さぬのを懈怠といふので、唯識論には

能く精進を障へ染を增すを業と爲す。謂く懈怠とは染を滋長するなり。故に諸の染事に於て策勵するを亦懈怠と名く。

とある。染とは即ち煩惱のことである。煩惱を增したり、煩惱を起すべき性質の事に力を用ゐたりすることを一切皆懈怠と名くるといつてある。人の心の力には固より限りがあるから、役にも立たぬ事に多く心を勞する者は、大切な事に力を盡すことが出來なくなる。一齋のいふ通り閑事を認めて實事と爲すが爲に、心が疲れてしまつて實事に疎かになるのである。斯る懈怠の心を自ら制することが出來なければ、其の生涯は全く無意義なものになる。

第五には正念と邪念とを分つてある。正念とは眞實を愛するの心である。邪念とは正しき道を愛せずして專ら一身の私に殉せんとする心である。されば起信論には

心若し馳散せば即ち當に攝し來りて正念に住せしむべし。

とある。又正念といふことの說明は、慧遠の觀經疏に

相を捨て實に入るを名けて正念と爲す。

とあるのが最も要領を得て居る。此處に相といふは物事の外貌のこと、實とは其の實質のことである。外貌のみによつて立てた考へは所謂皮相の見である。實質に基いて立てた考へが即ち眞實の見である。何事に就ても眞實に考へずに、唯だ其時其時の間にあふやうなことばかりして、毎日を過す人が少くない。それは高い足駄を穿いて綱の上を渡る『綱渡り』の藝人と同じやうな了簡の人である。慣れてしまへば平氣で出來るのであらうが、實は頗る危い事といはなければならぬ。古い狂歌に

世渡りも氣合は同じ縄渡りビク〳〵しては出來ぬ藝當

といふのがあつた。成程それも一種の藝當には違ひあるまい。それには又一種の勇氣を要するのだが、併し如何に勇氣を振ひ起しても、兩足にシッカリと大地を踏んで歩くやうな氣分になれる筈がない。其の綱渡りを終つて先づ安心と一息吐いた時には、モウ精神も氣力もなくなつて唯だ死を待つにすぎぬやうな老境に入るのが通例である。斯樣な果敢ない世渡りの仕方を早く止めなければならぬ。

歐陽修の醉翁亭記は其の一代の作中に於て屈指といはるゝ名文であるが、其の劈頭に於て先づ地形を叙して、

滁を環りて皆山なり。其の西南の諸峰林壑最も美、之を望むに蔚然として深く秀るものは琅琊なり。云々

とある。最初歐陽修は稿を起した時に、其の周圍の山の形狀を委しく書き陳ねて見たが、どうも意に充たぬので段々と筆刪を加へて行つて、終に『滁を環して皆山なり』といふ一句にしてしまつたといふ話が傳はつて居る。今日吾々が讀んで見ると、此の一句が全篇の抑へとなり、『醉ては能く其の樂みを同くし、醒めては能く述ぶるに文を以てする者は太守なり』といふ結末の句と相俟つて誠に寸分も動きのない好字面であるが、それは其のあたりの眞實の景色を寫し出さうといふ苦心の結果として斯る妙句を得たものである。『文妙處に到れば則ち奇なり、奇極處に到れば則ち平なり』といふは確かに穿つた語である。徒に巧な形容を陳ねた數十百字の文よりも、眞實の心の籠つた一句二句の方が遙かに力のあるものである。人生の事も亦全くその通りで、巧なるものは結局拙き者に及ばぬのである。

松平樂翁公が壯年にして其の封土を嗣ぎ、白河藩の藩主となつた時に、家臣全體に頒布した心得書があるが其の中に士は常に節義を守るべきことを說いて

士は右申す通り節義をたしなみ、人がら貞信にさへ候へば、世話の如く立居振舞不調法にし

て物言あしく候ても、士の瑕にてこれ無く候。少しも苦しからざる義に候。當代の士多くは忠信これなく、なまじゐに差當り賢しく世話かしこく、立居振舞見苦しからず候故、己が才智に飽くまで自慢いたし、貞信なる者をば反て初心なりと見下し、其有樣輕薄なる者これあり、其内剩へ老功にて樣子靜かに取りつくろひ、能き人がらに化したるもこれあり、又不巧にて浮氣に見ゆるもこれあり、其品區々かはり候へども、皆同類の人にて候。かやうの人才智あるのみならず、血氣にてこそ候へ、似合に勇力もある故に、或は己が役義或は傍輩の事につき少々苦勞する義をも、己が名利の賴これある内は、身に引受けて精を出すものにて候其故賴もしき人がらの樣に見え候へども、元來佞人にして一筋に義理を守る心なく候故、大事に臨みては必ず時々の模樣を見合せ眞實の志なきものに候。一命を捨候て、專度の用に立ち申す義などは存じも寄らず。某が家臣にも此の如きの人これあり候や、大に政敎の妨に候周公の才、孟賁が勇候とも、少しも珍重に存ぜず候。

といつてあるが、正念と邪念との區別を最もよく說明したものと思はれる。人に知られたい、世間に示したいといふ念が即ち邪念である。假令世に知られず人に認められずとも、專ら眞實なるものを求めて努力を積みたいといふ念が即ち正念である。正念に依らずして佛道を學ぶことは出來ぬことである。

第六には定意と亂意との分ちが說いてある。定意とは心に統一の存すること、亂意とは心に統一がなくて、周圍の事物のために絕えず亂さるゝことである。三藏法數（明の一如といふ人の撰したものである。）

定とは禪定なり。謂く能く散を攝し神を證し、性を見道を悟る、故に定學と名く。

とある。散を攝するといふは散亂したる心を取り收めて統一のあるやうに努むることである。

孟子は學問要を說いて、

仁は人の心なり、義は人の路なり、其の道を舍て由らず、其の心を放して求むることを知らず、哀しいかな。人雞犬の放るゝ有れば則ち之を求むることを知る。心を放すことありて求むるを知らず。學問の道は他無し、其の放心を求むるのみ。

といつた。放心を求むるとは譬へば雞や犬が迷ひ出したのを探して引戻すやうなものである。吾等の心は周圍の事物に惑かれて果てしも無く動搖するから、常に反省することを怠つて居ると、途方もない所へ外れて行く。之を引戻すやうに努力するのが即ち放心を求むるといふことである。若し心が動搖して定まらぬ時には、何事に對しても決して其の眞實の相を見ることは

出來ぬ。されば智度論の中には、

定とは一心不亂に名くるなり。亂心の中には實事を見得ること能はず。水波の動きて面を見ることを得ず、風中の燈の能く黙ずることを得ざるが如し。

とある。世間は日に益々多事多端になるのみである。餘程氣をつけて居ても、心の散亂し動搖するを免れぬやうである。

列子の中に『亡羊』の說がある。楊子といふ人の隣の家で羊を失つたので、多くの人を驅り催してそれを探しに出た。『一匹の羊を探すのに、何故そんなに多くの人が出るのか』と楊子が問うたのに隣人は答へて『路が多く分れて居るから、皆で手分けして探さなければならぬ』といつた。そこで

既にして反る。問ふ、羊を獲たりや。曰く、之を亡へり。曰く、奚ぞ之を亡へる。曰く、岐路の中に又岐あり。吾之く所を知らず、反れる所以なり。楊子曰く、大道に岐多きを以て羊を亡ふ。學者は多方なるを以て生を喪ふ。學は本同じからざるにあらず、本一ならざるにあらず。而して末の異ること是の若し。唯だ同に歸し一に反れば得喪なしと爲す。

とある。『得喪なし』とは世間の利害得失に心を惹かるゝこと無く、能く道に達し得ることである。實に此の譬喩の通り、世間の一切の事があまりに煩はしく、岐の中に又小い岐が分れて居るといふ有樣である。又世間の人の說も多く分れて居て其の何れが果して正しいものであるか、容易に判斷のつかぬ程である。それ故に吾等は常々充分に自ら戒めて三藏法數にいふ所の『散を攝し神を證する』ことに力を用ゐなければならぬ。能く散亂したる心を收めて一に歸せしむることが出來れば必ず神を證することも出來る。證するとは悟ることである。神を證するとは吾が本心の如何なるものであるかを知ることである。吾は何の爲に生きて居るのか、吾は何を思ひ何を爲すべきかを知ることである。

徒に多く聞き多く讀むとも、益を得る所は必ずしも多くない。一條兼良といふ人は彼の足利時代の山名細川の爭亂のあつた頃の人で、攝政關白ともなり、又多くの著述などもあつて、博學多識を以て聞えた人であるが、其の側近の人々に向つて『世の人は多く菅原道眞を賢人として崇敬して居るが、自分は菅公よりも勝つて居ることが三つある。菅公は右大臣であつたが、自分は太政大臣にして關白となつた。是れその一つである。菅公は筑紫の配所で寂しく死んだが、自分は斯く安穩に毎日を送つて居る。是れ其の二である。又菅公は學者として聞えて居るが、自分は菅公の頃から今日まで世に公にされた書物を皆讀んで居る。それ丈菅公よりも多く

の智識を有して居るわけである。是れ吾が菅公よりも勝れりとする第三の點である』といつたと傳へられて居る。成程菅公が亡くなつてから兼良の時までは五百數十年を經たのであるから、其の間に吾が國で公にされた書物や、支那から舶來した書物を讀んだ丈に兼良の方が多くの智識を得たわけである。併し今日に至つて一條兼良を菅公以上の人物と思つて居る人は誰もあるまい。勿論兼良とても決して平凡な人物ではないが、菅公以上の人として崇敬せられることはない。此の事實は多く讀み多く識ることが必ずしも貴くはないといふ證據とするに充分であらう。

多く聞きて義に於て了せざることを願はざれ。

といふ涅槃經の戒めを深く味はなければならぬ。亂意を去つて定意を得ることに努むるは道を求むる者に取つて殊に大切な事である。

第七には智慧と愚痴との別を立てある。眞の智慧は佛にして初めて具へらるゝものであるが、吾等も共に力を盡して智慧を磨き上げ、愚痴の念を去ることに努むべきである。大莊嚴論には智愚の別を說いて、

譬へば師子の如きは、打射する時而も彼の師子人を逐ひ來る。譬へば癡犬の如きは、人あり

て打擲すれば便ち瓦石を逐ひて、本を尋ぬることを知らず。師子といふは智慧の人の其の本を求むることを解して煩惱を滅するに喩ふ。癡犬といふは則ち是れ外道の五熱に身を炙りて心の本を識らざるに譬ふるなり。

とあるが、之れはまことに適當なる說明である。師子は智があるから、人に石を打着けられた時に、直ちに其の石を投げた人を見附けて、其の人に向つて行く。犬は癡であるから、人に石を打着けられた時に、其の石を敵として之に嚙みつくが、之を投げた人のあることに氣附かぬのである。此處に智愚の別がある。凡て眼前の事のみを見て、其の由て來る所を究めず、又其の事が如何なる結果を生ずべきかをも考へぬのが愚痴の人である。智慧のある人は如何なる事に出逢つても、其の事と他の事との關係をよく思案工夫し、其の實相を捉ふることに努むるのである。常に智慧を磨かうとする者は、心を此處に致さなければならぬ。

和蘭の哲人スピノザが『完全なる觀念』に就ての說明は、此の場合まことに良い參考となるやうである。彼の說に據れば、一切の事に就て完全なる觀念をもつて居る人は、世に處するに當つて思ひ惑ふ所がなく、その心は常に平和であり安靜である。之に反して何事に就ても不完全なる觀念をのみもつて居る人は、如何にして世に處すべきかを明かに辨へ知らぬから、其の

心は常に疑惧と不安とのみを以て充されて居る。然らば如何にして完全なる觀念を得べきかと云ふに、凡ての事を一々皆神の力の發現と見ることにより、又凡ての物は一も孤立せず、相俟ち相補うて渾然たる組織を作つて居ると見ることに依つて、初めて其等一々の事物に就ての完全なる觀念が作らるゝのであると。彼は實に

凡ての物の中に一々皆神の力の現はれて居ることを見得たのである。

如何なる物も孤立せず、各皆他の物と離るべからざる關係をもつて居る。如何なる事も偶然に起るものでは無く、其の間に整然たる因果關係の存することを認め得たる彼は、非常に貧しい生活をしながら其の心に少しも煩悶なく、常に偉大なる神の力を讃歎しつゝ、晴れやかなる氣分を以て其の日其の日を送つて居たさうである。能く彼を知つて居た或人が彼を評して『スピノザは遠くから神を眺めて居るのではない、神の光りの中に其の身を浸して居るのである』といつた。佛法を學ぶ者も、亦此の如き心を以て一切の事物に對し得るやうにならなければなるまい。

徒に多くの事を知るとも、それで智者となり得るわけではない。譬へば如何に多くの杉や檜の木材を積み重ね、又如何に多くの瓦や石材を積み重ねて置いても、それが山よりも高くても何の用にも立たぬ。それより遙かに少量の木材や瓦や石材でも、之を組立て柱とし天井とし、礎とし屋根とすれば、吾等の住むべき家が出來上るのである。小さな家は大きな材料の山よりも遙かに勝つて居る。出曜經に

智者は一句を尋ねて百種の義を演出し、愚者は千句を誦するも一句の義を解せず。

とあるが、幾千萬句を誦するとも、それが個々別々に解せられて居たのでは、其等の句の說かれた趣意も何も更に分らぬから、詰り一句の義をも解せぬといふことになる。之に反して假令一句たりとも深く之を味へば、之より幾十百種の義を尋ね出すことも難くはあるまい。此の理は書を讀むに當つても、人の說を聽くに當つても、若くは日々遭遇する所の一切の事物に對するに於ても一貫したるものである。

佛の說きたまへる敎は決して斷片的のものではない。其の一代の說法を一貫する所の大精神があつて、假令簡單なる一言一句にも、其の大精神が含まれて居るのである。假令佛が方便的に說かれた所でも、それは『一切衆生をして盡く佛の境界に到達せしめんが爲に』といふ大目的を離れたものではない。譬へば此の地上に在る一切の河、一切の溪、一切の溝の水は終には皆海に歸するのである。大きな河の水は直接に海に注ぐが、小さな溪河や溝の水は他の河の中

へ流れ込んで然る後に海に入るのであるから、海へ届きさうも無いやうに見えるけれども、直接間接の差はあつても、結局は皆海の水となるのである。佛の說法も亦其の如くであつて、常に『佛に成る積りで修行せよ』といふやうな事ばかりを說かれたのではなく、時としては『盜んではならぬ』とか、『僞りを語つてはならぬ』とかいふやうな、誠に卑近なことを敎へられた場合も少くない。併し其等の卑近な敎を信じて其の實行に勵む者は、何れも皆更に進んで其等の敎へよりもモツト高遠に、モツト深奧なる敎を學ぶやうになるので、それは宛も溝や溪河の水が大きな河と合流して終に海に注ぐと同じことである。佛の說法は斯くして聯絡を保ち組織を具へ、何れの場合の說法でも一切の人を皆佛の境界に到達せしめんといふ大目的を達するために役立つて居るのである。法華經の方便品には先づ

諸佛世尊は唯だ一大事の因緣を以ての故に世に出現したまふ。

とあつて、次に其の一大事の因緣なるものを說明して、

諸佛世尊は衆生をして佛知見を開かしめ、淸淨なることを得しめんと欲するが故に世に出現したまふ。衆生をして佛知見を悟らしめんと欲するが故に世に出現したまふ。衆生をして佛知見の道に入らしめんと欲するが故に世に出現したまふ。

といつてある。此の目的が達しられなければ佛の世に出て法を說かれたかひは無いわけである。

譬へば東京から汽車に乘つて十分間經てば品川に達し、三十分間經てば横濱に達する。而して下ノ關まで行くには二十時間を要する。併し下ノ關へ行くには横濱も品川も通らなければならぬ。横濱や品川で汽車を下りてしまつた人は下ノ關へ行くことは出來ぬが、下ノ關まで乘り續けた人に取つては、品川を通つたことも、横濱を通つたことも皆下ノ關へ到達するために役に立つたのである。若し佛つ說法の一部分を聽き、世間の無常を觀じて、深山に引籠り唯だ一身を潔くするのみで終るならば、切角佛法を學んだかひは無いけれども、進んで菩薩道を學ぶ楷梯としては世間の無常を觀ずるといふことも役に立つて居るのである。前にもいふ通り、斯く人生の無常を觀じて、何事にも囚はれぬやうになつた者を聲聞といふのであるが、法華經の信解品に據れば、迦葉等は『菩薩の道を行じて後必ず佛となるであらう』といふ釋尊の御許しを得て後、大に歡喜して、

我等今者眞に是れ聲聞なり。

といつたとある。是れは聲聞であつたことが、即ち佛と成るべき楷梯であつたことを知つて、

大に歡喜したのである。若し聲聞で終るならば、聲聞たるかひも無いわけである。

實に釋尊御一代の說法は極めて宏莊なる一大建築の如きものである。此の建築の隈から隈までが光り輝き、一大調和を示して居る。此の大建築の中に含まるゝものは例へば障子の細い骨一本でも、襖の小い引手一つでも、皆此の一大調和を成すための役に立つて居るのである。若し此の障子の骨一本を拔き取つて外へ持出すか、襖の引手一つ外して持出して見ても、あまり價値のある物ではあるまいが、此の大建築の中へ置けばそれ〴〵に皆大切な役目を勤めて居るのである。斯ういふ風に考へて、釋尊の說かれたる一字一句に對すれば一句を尋ねて百種の義を得ることも必ず出來る筈である。一字一句でも深く味つて深く解し、深く信ずることが肝要である。

深心は即ち是れ道場なり。功德を增長せしむるが故に。

と維摩經に說かれたのも尤もである。

又吾等の周圍にある一切の物も、眼の着け方一つでは、悉く天地間の妙機を語るものならざるはない。其の極めて小なる物の相にも大なる自然の力がよく現はれて見える。之をよく看取するものこそは彼のスピノザの所謂完全なる觀念を作り得た者である。大隈言道の『山家寒夜』と題する歌に、

たゞ一つ夜半の枕にまろび來し木の葉うごきて寒き山ざと

といふのがある。夜半に眼が覺めて枕元を見ると、一枚の木の葉の落ち散つて居るのが、微かな燈影で見える。折しも窓の戸の隙間から吹き込んだ風に吹かれて、その木の葉が小さな音を立てゝ動くさまである。家の外は風も吹き荒れて居ることであらう、雪も降り出したかも知れぬなどゝ思ひやると、山家の寂しさが身に逼るやうに覺える。此の時の感じは、彼の蘇東坡の詩に、黃州の禪智寺に宿した寂しい晩に、少年の頃或る寺の壁上に『夜凉くして雨有るかと疑ひ、院靜にして僧無きに似たり』といふ句の題してあつたのを思ひ出し、一絕を得たとあつて、

佛燈漸く暗して飢鼠出で、山雨忽ち來りて修竹鳴る。知んぬ是れ何人の舊詩句ぞ、已に我が此の時の情を知れるなるべし。

といふのと頗る似通つたものゝ如くである。それにしても唯一枚の木の葉を寫して、寂莫たる山家の情を髣髴たらしめたのは勝れた手腕といはなければならぬ。これは字句の巧に依るのではない。眼のつけ方の勝れたのに依るものである。實際眼のつけ方さへ良ければ、木の葉一枚

によつて山家の情景を代表せしむることも出來るのである。

一滴をなめて大海の潮を知り、一華を見て春を推せよ。

と日蓮上人のいつたのは味ふべき語である。多く讀み多く聞き多く見ても、それのみで智者となれるものではない。

併し吾等は凡夫であつて、兎角眼前の小事にのみ執著し、達觀することの出來惡いものである。されば常に自ら反省して吾が愚癡の見に陷らんことを恐れ、努めて智を磨かなければならぬ。法律三昧經に

天下の愚人但だ人の惡を見て自の惡を知らず、但だ自の善を見て人の善を見ず。己を智と稱する者は皆智にあらざるなり。自ら明に處るものは其の迷へること甚し。

とあり、更にまた

其の自ら過を見る者は與に善事を說くべし。自ら善を見る者は與に語り議るべからず。

とあるは吾等の共に服膺すべき所である。出曜經には

自己の愚を知る愚人は當に善慧を得べし。

とあるが、自己の愚を知るものは既に愚人の域を脫した者である。人は自ら知ることが實に難きものである。文中子は李密が英雄を問へるに對して、

自ら知る者は英なり、自ら勝つ者は雄なり。

と答へた。又書經にも

克く邦に勤め、克く家に儉にして、自ら滿假せざれば惟汝賢たらん。

とある。吾等は共に自己の愚を省みて、智を求むるためには如何なる努力をも惜むまいといふ決心をしなければならぬ。

終りに不戲樂を擧げて戲行を戒めてあるが、何事でも不戲樂の念がなくて成就するものではない。不戲樂といふは物事を輕んじて、宜い加減にして置くといふやうな念の全く無いのをいふのである。人の當に爲すべきことは大小となく皆大切である。人の當に爲すべからざることは大小となく斷じて之を止めなければならぬ。遊戲半分といふやうな氣分で人に對し事に處するは、是れ人を侮り自ら侮るものである。自分は少年時代に或る漢學の先生の所へ毎日通つて居たが、或日先生の友人の某といふ書家が來て、先生や塾生の爲に揮毫をしてくれた。自分は半折の額を一枚かいて貰つたが、その後で又扇を一本出して『先生序に此の扇にも願ひます』といつたところが、彼の書家が容を正して『君はまだ年が若いから輕々しくそんな事をいふの

であらうが、是から氣をつけなければならぬ。序に書いてくれとは何事だ。私はいつでも一心を凝して字を書くのだ。序になぞ書いたことは一度もない。失敬なことをいふものではない』といつた。自分は其時大勢の中で叱られたので、大に面目を失したが、後になつて考へて見ると是れは誠に良い教訓であつた。

書を以て立つ人が、一字たりとも序に書くなどゝいふ事のあるべき者ではない。萬事が之と同じ理である。自分の爲すべきことを遊戯半分に片附けるのは、自分の業を侮ることである。又自分を自分で侮ることである。大なる罪といはなければならぬ。

俳句などは隨分慰み半分にやる人も多くあるが、眞の俳人の句を作るのは一生懸命である。僅かに十七字であつても、其の十七字に生命を打込んでやるのである。芭蕉の事は今迄にも度々いつたが、彼は生涯の半以上を旅で暮した。その旅は決して慰みの旅ではなく、天地の美を究め盡して、其の詩情を養はんが爲であつた。其の奥羽旅行の折の紀行『奥の細道』の中に飯塚から白石へ行くまでのことを叙して、

夜に入りて雷鳴、雨しきりに降りて臥たる上より漏り、蚤蚊にさゝれて眠らず。持病さへ起りて消え入るばかりになん。短夜の空もやうやう明くれば又旅立ちぬ。猶夜の餘波心ずゝまず、馬をかりて桑折の驛に出る。遙なる行末をかゝへて斯る病覺束なしといへども、羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん是れ天の命なりと、氣力聊か取り直し、路縱横に踏みて伊達の大木戸を越す。

とあるが、其の道のために身をも心をも打込んだ芭蕉其人の意氣が能く窺はれて甚だ貴く思はれる。いかにも

俳諧をなぐさみにする上手より樂む下手ぞたふとかりける

といふ主義を以て多くの門人を導いた筈である。又大阪で沒する少し前に詠んだ句に

秋深き隣は何をする人ぞ

とあるが、是れは大阪邊の俳人が慰み半分に談林風の句を作つて得々として居たのに憤慨しての作と思はれる。

此の眞面目なところが芭蕉翁の生命と思はれる。今日翁の句を讀んで見ると、巧といふ點に於ては門人の其角等よりも劣り、後世の俳人蕪村闌更等よりも遙に劣つて居るやうである。又其の多くの作の中には甚しき駄句も交つて居る。併し何れの句にも世間の名利を一切捨て、其の道に魂を打込んだ芭蕉其人の性格がよく現はれて居るので、吾等は他の人々の巧なる句を讀

むよりも動さるゝのである。誠心の力といふものは大きいものである。門人其角が『芭蕉翁終焉記』に

抑此翁孤獨貧窮にして德業に富めること無量なり。二千餘人の門葉邊遠一つに合信する因と緣との不可思議いかにとも勘破し難し。

といつたのに依つても、其の門人等に景慕せられて居た有樣はほゞ推察せられやう。其の大阪で病臥中には門人之道の請により、其の門人たる呑舟と舍羅の二人が萬事の世話をしたのであるが、終焉記には

人々にかゝる汚れを耻ぢ給へば、坐臥のたすけとなるもの呑舟と舍羅なり。これは之道が貧しくてありながら切に心ざしをはこべるにめでゝ、彼が門人ならば他ならずと、召して介抱の便としたまふ。そも彼等も緣にふれて師につかふまつることは悅びながらも、今はの際のたすけとなれば、心弱きもことはりにや。各が計らひに麻の衣の垢づきたるを恨みて、よき衣に脫ぎかはし、夜の衣の薄ければとて、錦繡のめでたきを調へたるぞ、門葉の者共が面目なり。

とある。此の門人達の心盡しのさまは、宛ら聖人とか賢人とか仰がるゝ人の病に侍するやうではないか。是れ一に翁が常に不戲樂の念を以て其の道に力を盡して來た結果である。

人生は遊戲の場所ではない。固より吾等の身心の力には限りがあるから、いつも緊張したる氣分ばかりで、過すことは出來ぬが全く緊張したる氣分を持たずに毎日を送る者は自ら悔るの甚しき者といはなければならぬ。禮記の中に、

張りて弛めざるは文武も能くせざるなり。弛めて張らざるは文武爲さゞるなり。一張一弛は文武の道なり。

とある。これは周の文王武王等の聖君が民に對する態度を說明したものである。弓の弦をいつも張つて置けば弱つてしまつて、大事な時に用を爲さぬから、弦を外して休めて置くことが必要である。併しいつも弛めて置くばかりで全く張ることをせぬならば、弓の用を爲さぬわけである。其の弛むるは之を張らんが爲である。民を休むるは其の養つた力を以て大に國家の用を爲さしめんが爲である。一張一弛はあつても、弓の用は其の張つた時に在る。休養も娛樂も必要ではあるが、人生の眞の意義は其の緊張したる時に發揮せらるゝのである。人生を以て遊戲の場所と心得てはならぬ。

然るに和漢ともに隱逸の士なるものがあつて、全く人生の事に頓着せず、遊戲的の氣分で生

涯を送つたやうに傳へられて居る。併し其等の人はそれを本望として居たのではない。若し自分を知つて重く用ゐるものがあれば、如何なる大任にも當るだけの實力もあり抱負もあつたのであるが、世に用ゐられぬために隱逸なる生活に入つたので、『名利を求めんが爲に己の信ずる所を枉げぬ』といふ、まことに凛然たる氣象を持つて居たのである。その外形は遊戯的の如くに見えるが、道を守り節を枉げぬといふ眞劍なる覺悟をもつて居た點は大に尊敬すべきものである。韓退之が友人李愿の盤谷に歸るを送る序に、先づ世間に重用せらるゝ人の榮華のさまを述べて『大丈夫の天下に遇知せられ、力を當世に用ゆる者の爲す所なり。吾此を惡みて之を逃るゝにあらず。是れ命あり、幸にして致すべきにあらざる也』といひ、次に隱逸生活の有樣を述べて、

其の前に譽あらんよりは其の後に毀無からんに孰れぞ。其の身に樂あらんよりは其の心に憂無からんに孰れぞ。車服に維がれず、刀鋸も加へられず、治亂も知らず、黜陟も聞かず。大丈夫の時に遇はざる者の爲す所なり。我は則ち之を行ふ。

といつたが、能く所謂隱逸の士の心事を悉したるものである。兎にも角にも或る一貫したる主義を以て終始する人は不戯樂の念をもつた人で、其の周圍の人々にも必ず大なる感化を與へる。孔子の所謂『德孤ならず必ず隣あり』である。

釋尊御入滅の際に御弟子の人達に最後の教誡を與へられた中に（佛遺教經に記す所であるが）次の如き一節のあるのは殊に注意すべきである。

汝等比丘、晝は即ち勤心にして善法を修習し、時を失はしむること無かれ、初夜後夜にも亦廢すること有る勿れ。中夜にも誦經して以て自ら消息せよ。睡眠の因緣を以て、一生空しく過ぎて得る所無からしむること無かれ。當に無常の火諸の世間を燒くことを念ひ、早く自ら度せんことを求めて睡眠すること無かるべし。諸の煩惱の賊常に人を殺さんと伺ふこと怨家よりも甚し。安んぞ睡眠して自ち驚寤せざるべけんや。煩惱の毒蛇睡りて汝が心に在り。譬へば黑蚖の汝が室に在りて睡るが如し。常に持戒の鉤を以て早く之を屏除すべし。睡蛇既に出でなば乃ち安んじ睡るべし。出ざるに眠るは是れ無慚の人なり。慚恥の服は諸の莊嚴に於て最もこれ第一なり。慚は鐵鉤の如く能く人の非法を制す。是故に比丘常に當に慚恥すべし。暫くも替ることを得る無かれ。若し慚恥を離るれば即ち諸の功德を失ふ。

睡る勿れといふは即ち少しも心を緩めてはならぬとの意である。慚恥とは自ら省みて吾が足らぬことの多きを恐るゝをいふのである。釋尊は其の入滅に際して斯くまで嚴しく御弟子達を戒

められ、終りに

世尊は此の諸の大衆をして皆堅固なることを得て、大悲心を以て復た衆の爲に說かしめんと欲す。

とある。常に極めて緊張したる心を以て修行に努むる者にして、初めて衆の爲に佛の大法を說くことが出來るのである。勿論前にもいふ通り、口で說くばかりが說法ではない。正しい信仰をもつて世に立つ人の一言一行は悉く皆說法である。

淮南子の中に、楚の大司馬の部下に鉤を鍛ふるに巧なる者があつたといふ話がある。鉤といふは劍の類である。此の人は歲八十にしてなほ其の技が衰へず、極めて鋭い鉤を鍛へ成した。大司馬は彼に其の理由を問うた。

大司馬曰く、子巧なるか、道あるか。曰く、臣守るところ有るなり。臣年二十にして好みて鉤を作る。物に於て視ることなく、鉤に非れば察せざるなり。

『物に於て視ることなく』とは他の物には一切注意せぬとの意である。鉤を作るより外のことは一切顧みぬ故に、心が其の業に專であるによつて年衰へても技が衰へぬのである。淮南子は之を說明して

是を以て之を用ゆる者は必ず用ゐざるを假るなり。

といつた。一方に充分力を用ゆることの出來るのは妄りに他のことに力を用ゐぬからである。用ゐざるを假るとは、他に力を用ゐぬ御蔭であるとの意である。尙ほ淮南子は老子の

道に從事するものは道に同ず。

といふ語を引いて之を證した。何の道でも一心不亂になつて之に從事するものは、其の身と其の道とが一つになつてしまふのである。それが非常に貴い所である。此の老人の如きは眞に不戲樂の心を以て其の業に勉めた者である。故に其の言つたことが永く後世の人の訓となるのである。佛法を學ぶ者は常に此の如くでなければならぬ。

以上阿那律の覺り得たる八念に就て一通りの說明を下したのであるが、是れは釋尊も稱讃して、『能く吾が意を得たり』と仰せられたとある。阿那律は實に精勤の人で、其の般那蔓闍寺林に於て同志の人々と修行をして居た時の如きは、釋尊が態々之を訪れて、まことに修道者の範とすべしとさへ稱へられたといふことである。元來彼は釋尊の徒弟であつたので、最初は幾分か釋尊に狎るゝやうな心があつたものか、或時說法を聽聞しながら居睡りをしたので、釋尊は嚴しく其の不心得を戒められた。之に依つて阿那律は深く自己の不謹愼を悔ゐ、夜も睡らず

して專心に修行したので眼病に罹つた。釋尊は之を聞かれて、物事は過不及のないのが宜いのであると諭されたが、その時は病現に重くして治療の途がなく、終に失明してしまつた。併し彼は決して不幸ではなかつた。

肉眼を失ふと共に、彼の心眼は著しく明になつた。而して彼は釋尊十大弟子の一人に數へられ『天眼第一』を以て稱せられた。此の如き人物の案じ得た所であるだけに、此の八念の說は佛法を學ぶ者に取つて極めて有益なものである。

斯く熱心に法を學ぶものが即ち眞の佛弟子と稱せらるべきものである。佛の吾等に遺された佛法の中には佛の魂が打込まれてある。之を學ぶものは即ち眞に佛を敬ふ者である。されば華嚴經には

如來は法を尊重したまふこと孝子が父母を尊重し、顏色に承順して心に暫くも捨つることなきが如し。如來は修行の中より來りたまへり。法を修行するは是れ供養なり。

とある。佛は修行の結果として其の洪大無邊なる智慧を得たまへるものである。而して其の洪大無邊なる智慧によつて照し見られたる萬有の實相を說かれたものが即ち佛法である。此の佛法を修行するのが即ち佛に對する眞の供養である。同じく華嚴經には『如來の出世は衆生を利益せんが爲なり』とあるが、それに續いて

大菩提心を捨つる者は利益すること能はざるなり。

とある。大菩提心とは即ち『佛の覺りたまへる所を覺らんとする心』である。此の大菩提心があつてこそ佛の利益を蒙ることも出來るのである。利益を蒙る者は即ち佛の御心に叶へる者である。

此處で再び法華經信解品の長者と窮子との譬喩を引用して見たいと思ふ。此の長者には唯一人の子があるのみであつたが、其の子は父を捨てて去り、諸國に流浪して極めて貧しい生活をして居た。時に父の長者は自分の財產を讓り與ふべき者のないことを深く憂へ、

我若し子を得て財物を委付せば、坦然快樂にして復た憂慮無けん。

と思つた。その後長者が他國へ行つて滯留して居た時に、彼の子が圖らずも長者の門に立つた。子の方では父の顏を見忘れて居ても、父は直ちに吾が子なることを知つて大に喜んだ。即ち經文には

時に富める長者、師子の座に於て子を見て便ち識り、心大に歡喜して即ち是の念を作さく、我が財物庫藏今付する所有り。我常に此の子を思念すれども之を見るに由無かりき。而るに

忽ち自ら來れり。甚だ我が願に適へり。

とある。而して其の子は久しい貧苦の爲に心が甚しく下劣になつて居たので、長者は暫く下人として彼を雇ひ入れ、次第に家の中の樣子に馴れて來た時に、親族知己を集めて初めて親子の名乘りをして、

昔本城に在りて憂を懷きて推ね求めき。忽ち此間に於て遇ひ會ひて之を得たり。此實に我が子なり。我は實に其の父なり。今吾が所有の一切の財物は皆其の子の有なり。

といつたとある。此の長者の心は即ち佛の御心である。此の窮子は其儘に吾等の身の上に當るのである。

長者が其の子に財物を讓り與へんことを熱望した通りに、佛は其の覺りたまへる所を吾等に傳へ、吾等をして共に佛の境界に到達せしめんことを念願とせられたのである。併し吾等は彼の愚なる子と同樣に、佛に遠ざかつて間違つた道ばかりを歩いて居たのである。併し吾等が佛を忘れても、佛は吾等を見棄てたまはず、常に吾等の事をのみ念として居たまふのである。若し吾等が少しなりとも佛法を學ばんとする念を起せば、彼の長者が其の門に立つた子の姿を見付けた樣に、

甚だ我が願に適へりとて大に歡喜せらるゝのである。

誠に勿體ないことであるが、吾等は多く此の貴い御心を知らずして、毎日を送るといふ有樣である。『昔本城に在りて憂を懷きて推ね求めき』とあるのが即ち佛の御心であつて、涅槃經の中には

一切衆生が異の苦を受くるは悉く是れ如來一人の苦なり。

とある。一切衆生が種々の苦を受くるは其の心に煩惱が充滿して、佛の境界と相距ること餘りに遠きが爲である。佛は之を以て御自身の苦とせられ、吾等が斯る苦を脫し盡さぬ間は決して御心を休められぬのである。

其の心配の大きくあつたゞけ、其の子に財產を讓り與ふる時の喜びも大きかつたに違ひない。『忽ち此間に於て遇ひ會ひて之を得たり』といふ一語には其の歡喜の情が溢れて居る。佛も亦其の如く、吾等が佛の境界に近づくことを以て何より大なる喜びとせらるゝのである。佛恩に報ずるの道は此より外にない。彼の長者は親子の名乘りをする前に、其の子に向つて、

我今多く金銀珍寶有りて倉庫に盈溢せり。其の中の多少取與すべき所、汝悉く之を知れ。我が心是の如し、當に此の意を體すべし。所以は何ん。今我と汝と便ち爲れ異らず。

と語つたとある。これは佛が吾等の共に佛の境界に到達し得べきものなることを許されたることをいふのである。父の心が子に通じて、子が父の財産を相續した時、父は初めて安心したのである。佛も亦其の如く、吾等が佛と同しき覺を得る時初めて安心せらるべきである。此の有難い御心を知り得た迦葉等は、

今我等方に知んぬ、世尊は佛の智慧に於て悋惜したまふ所無し。

といつた。今吾等は佛世を距ること甚だ遠く、迦葉等の如くに親しく佛の面前に於て佛恩に感謝することは出來ぬ。併し吾等に遺されたる大乘の教の中に佛の魂が宿つて居るのであるから、吾等は誠心を籠めて之を學び、之を信じ、之を身に行じ、之を世に弘めて以て佛恩に報ずべきである。華嚴經に

財寶飲食衣服の如きは眞の供養にあらず。

とあるが、眞の供養は佛法を自ら信じ、他人をして信ぜしむべく努力することのみである。

祖先の勞苦を思ふものは、自身も亦勞苦を厭はずして其の遺業を守り、以て祖先の恩に報ぜんことを期すべきである。垂仁天皇第二十五年の詔に、

我が先皇……己を剋め躬を勤め、日に一日を愼む。是を以て人民富み足りて天下太平なり。

今朕が世に當りて神祇を祭祀すること豈に怠る有るを得んや。

とあるが、此の如き御心を以て列聖相承けて今日に及びたまへるが故に、吾が國は長へに榮えて行くのである。佛弟子たる者も亦此の佛法は佛が勤苦して得たまへる所であると思つて、之を重んじ尊ばなければならぬのである。但し財寶と法寶とは其の性質が根本からちがふことを考へなければならぬ。祖先の勤めて貯へたる財寶を重んずるの念と、佛の勤めて得たまへる法寶を重んずるの念とは同一であるべきものであるが、

財寶を重んずる者は之を散さぬやうに努めなければならぬ。法寶を重んずる者は之を普く世に弘むることに努めなければならぬ。

此處に根本の差がある。財寶を散してしまへば家は貧しくなるが、法寶の方は之を散すことによつて益々裕になるのである。

吾等は三寶の恩を決して忘れてはならぬ。三寶の恩を知る者は共に此の恩に報ぜんことを志としなければならぬ。

同聲相應じ同氣相求む。水は濕へるに流れ火は燥けるに就く。雲は龍に從ひ風は虎に從ふ。聖人作りて萬物覩ゆ。

とは易の文言にある語である。聖人が出て教を與へらるゝのは宛も日が出て闇を照すが如きものである。山が峙ち水が流れて居ても、草木が美しく茂つて居ても、日の光りが之を照さなければ其の美しさも人の眼には見えぬ。若し聖人が出て人倫を教へられなかつたならば、君臣父子夫婦兄弟の道も立たず、世は長へに闇であらう。併し聖人の教が如何に貴くとも、其の貴い教を受けて之を實行すべき素質が一切の人に具はらぬならば、其の貴い教は終に空言たるに過ぎぬであらう。人々皆聖賢たるべき素質をもつて居るから、貴い教を聽けば之に從ふことを知り、高き行を見れば之に倣ふことを望むのである。これ即ち同聲相應じ同氣相求むるものである。さりながら聖人の教が無ければ各自に斯る貴い素質をもつて居るとも知らずに、果敢ない一生を送るのみであらう。聖人作りて萬物覩ゆとは至言である。

佛は聖の中の聖である。佛は勤苦して修行を重ね、凡夫の境界を脱して佛の境界に到達せらるゝと共に、凡ての人の本性を明かに照し見たまひ、彼等は皆共に凡夫であるけれども、皆共に佛となるべき素質を具へて居ることを確め、之が爲に教を說かれたのである。佛が

一切衆生は煩惱の中にあるも常に染汚せざる如來藏有り、德相備具せること我と異ることなし。（首楞嚴經）

といふが如くに說かれたことは、宛も大空に日が現はれて、山川草木の姿が初めて明かに見えたのと同樣である。若し佛の出現がなかつたら、吾等はいつ迄も自ら佛性を具ふる者たることを知らず、隨て此の佛性を養つて大なる功德を積み得べき身となることも知らず、無意義の一生を送るのみであらう。法華經の五百弟子受記品には有名なる衣裏の珠といふ譬喩が出て居る。或人が其の親友の家を尋ねて饗應を受け、醉うて寢てしまつたが、其の親友は急の用事が出來て外出することになり。醉臥して居る人の衣の裏に非常に貴い寶珠を結び付けて出て行つた。一方の人は眼がさめて其の家を出たが、自分の衣に斯る貴い珠が付いて居るとは氣付かず、其の後生活に困つて種々の勞働をして、やうやく暮しを立て居た。斯くして久しく經つて後に彼の親友にめぐり逢つたが、親友は彼の困苦のさまを見て、

咄や丈夫、何ぞ衣食の爲に乃ち是の如くなるに至れる。我昔汝をして安樂なることを得て、五欲に自ら恣ならしめんと欲し、某の年月日に於て無價の寶珠を以て汝が衣裏に繫けぬ。今なほ現に在り。而るを汝知らず、勤苦し憂惱して以て自ら活きんことを求む。甚だこれ癡なり。汝今此の寶を以て所須に貿易すべし。常に意の如くにして乏短なる所無かるべし。

といつたとある。佛も亦此の如く、吾等が皆貴い佛性を具へて居ながら之を自覺せず、無意義なる毎日を送つて居るのを憐んで、吾等の爲に此の佛性を開發せしむべき道を示されたのである。赤染衛門の歌に

衣なる珠ともかけて知らざりき醉さめてこそうれしかりけれ

とある。吾等は共に佛恩の洪大なることを忘てはならぬ。

唯だ吾等は末世に生を受けた爲に、面のあたり佛の教へを受けることの出來ぬのがまことに殘念である。併し佛は末世に生れた吾等を救はんが爲に特に大乘の法を說き遺されたのであるから、吾等の信心一つで、面のあたり佛の教へを聽くのと同樣な利益を受けることが出來る。吾等は佛を尊ぶと同じ心を以て、吾等に遺されたる佛の正法を尊ぶべきである。それにつけても最も大切なのは吾等自身の心の持ち方である。華嚴經には

菩提心は則ち一切諸佛の種子たり。能く一切の諸の佛法を生ずるが故に。

とある。又心地觀經には

願はくば諸佛加護を垂れて能く一切顚倒の心を滅したまへ、願はくば我早く眞性の源を悟りて、速かに如來の無上道を證せん。

とある。此の如き心を以て佛法を學び、佛法を信ずるに於ては、たとへ幾千年を隔てゝ居やうとも宛ち佛と相接するの想を爲し得るにちがひ無い。

人生はまことに複雜なもので、吾等は生涯の間に幾度となく困厄に逢ふことを覺悟しなければならぬが、之を少しも歎くには及ばぬ。生れながらにして聖智を具へたものは兎も角も、吾等の如き凡夫に在つては苦を嘗め難を冒すことなくして道を成ずることの出來やう筈はない。圓覺經に

一切の障礙は即ち究竟の覺なり。

とあるは眞に味ふべき語である。一事ごとに自ら省み、一難毎に自ら奮つて、假令少しく知り得た所があつても自ら之に安んぜず、進み求めて止まなければ、一々一歩と凡夫の境界を離れて行くことも出來るであらう。天台大師が

若し智多くして德寡ければ狂人と名け、德多くして智寡ければ痴人と名く。狂と痴とはみな賢にあらず。(法華玄義)

といひ、又

無明轉ずれば即ち變じて明となること、氷を融せば水となるが如く。更に遠きものにあらず

餘所より來るにあらず。たゞ一念の心に普く皆具足す。（摩訶止觀）

といひ、なほ又

癡迷を以ての故に法性變じて無明となり、諸の顚倒善不善等を起す。寒來れば水を結し變じて堅氷となすが如く、又眠來れば心を變じて種々の夢あるが如し。（同上）

といつたやうに、心一つが吾等の世界を作るのであるから、常に勤めて習ひ苦しんで學ぶことを忘れてはならぬ。

斯うは思つても吾等凡夫は心に緩みが生じ易いものであるが、吾等は此の章の始めに數へ上げたやうな貴い人々の事蹟を學び知ることに依つて大なる教訓を受ける。彼の人々は何れも佛の正法を世に弘めんが爲に力を盡し、以て佛恩に報ぜんことを志としたる人々である。其の貴い事蹟を知る者は誰も皆自己の懈怠を恥ぢ、精進の念を起さずには居られぬ。昔富樓那は西方輸盧那へ赴いて佛法を弘めんことを佛に請うた。佛は『彼の國の人は凶暴にして能く罵るが、汝は若し彼等に罵られたなら、如何するぞ』と問はれた。富樓那は之に答へて、

我此の念を作さん、彼の西方輸盧那の人賢善にして智慧あり、我が前に於て凶惡弊暴にして我を毀辱すと雖も、猶ほ手石を以て打擲せずと。

といつた。佛は更に『彼等が石を以て汝を打つたならば汝は如何するぞ』と問はれた。富樓那は之に答へて

我當に念言すべし、輸盧那の人賢善にして智慧あり、手石を以て我に加ふと雖も而も刀杖を用ゐずと。

といつた。佛はまた『若し刀を以て汝に加へた時は……』と問はれた。富樓那は答へて

我當に此の念を作すべし、彼の輸盧那の人賢善にして智慧あり、刀杖を以て我に加ふと雖も而も我を殺さずと。

といつた。佛はなほ『若し彼等が汝を殺したならば汝は如何するぞ』と問はれた。時に富樓那は之に答へて

我を殺さば當に是の念を作すべし、彼の西方輸盧那の人賢善にして智慧あり、我が朽敗の身に於て少に作せる方便をもて即ち解脫を得しめたりと。

といつた。茲に於て佛は之を稱めて善い哉と仰せられ、

汝今能く輸盧那の人の間に於て住止するに堪ゆ。汝今宜しく去るべし。未だ度せざる者を度し、未だ安からざる者を安んじ、未だ涅槃を得ざる者に涅槃を得しめよ。

と許された。此の富樓那の如き精神をもてる者にして、初めて佛の正法を弘むるといふ大任を果し得るのである。

眞の勇者とは此の如き人をいふのである。如何に多く學び博く識つて居ても、臆病未練の心で弘法の大事が果せるものではない。孟子の言に

志士は溝壑に在ることを忘れず、勇士は其の元を喪ふことを忘れず。

とあるが、富樓那の如きは正に其の人である。獨り富樓那のみならず、前に其の貴い事蹟を擧げた人々の如きは、何れも眞の勇者と稱すべき者である。佛法が今日まで泯びずして傳はり來つたのは、斯る勇者が居た爲であると思へば、吾等は心から之を感謝しなければならぬ。佛の尊いことはいふ迄もない、佛法の尊いことはいふ迄もないが、佛法を弘むるために力を盡した人々を僧寶として貴び之を佛と法とに配して三寶と稱し來つたのはまことに意義あることである。

一切衆生煩惱業障ありて都て覺知せず、苦海に沈淪して生死窮まりなきも、三寶世に出て大船師となり、能く愛の流を截ちて彼岸に超昇せしむ。諸有の智ある者悉く皆瞻仰したてまつる。

と心地觀經にある通りである。幸に三寶の恩を知る者が世間に多くなるならば、吾等の前途は光明に充ちたるものになるであらう。

八、佛國土

吾等如き凡夫が佛に就て語ることは僭越の甚しきものであらう。佛の覺りたまへる所は、固より吾等の窺ひ得ざる所である。彼の般若經の中に

諸佛の境界は思議す可からず。一切衆生佛境を思量すれば心則ち狂亂す。

とあるのも、佛の境界と吾等の境界とのあまりに甚しく懸絶せることをいつたものであらう。勿論吾等とても雜阿含經に

一切諸法の起滅を了知し、修すべきは已に修し、斷ずべきは悉く斷じたまへるを以て佛と名けたてまつる。佛の世に在すや蓮花の泥の中に生じて更に泥の著かざるが如く、世に在りて世に著せず、一切の煩惱を破し、究竟して生死の際を離れたまふを以て佛と名けたてまつる。

とあるほどの事は想像のつかぬこともない。併し其の生死の際を離れて今如何なる境界に居られるのかといふことは容易に分らぬ。例へば人が水の中へ入つたのを見て、陸を離れて水に入

つたといふことは分つても、水中の有樣が如何樣であるかは、水に入らぬ者に想像のつくものでは無い。人が高い山へ上つて行くのを見て、其の山の頂に達するであらうといふことは推測が出來ても、其の山上の眺めが果して如何樣であるべきかは、其處へ登つた者でなければ分らう筈が無い。佛のことも亦其の如くである。釋尊が舍利弗に向つて、

要を以て之を言はゞ無量無邊未曾有の法を佛は悉く成就したまへり。

と仰せられて後、更に

止みなん舍利弗、復た說くべからず。所以は何ん。佛の成就したまへる所は第一希有難解の法なり。唯だ佛と佛とのみ乃し能く諸法の實相を究盡したまへり。（法華經方便品）

と仰せられたのは如何にも道理と思はれる。英雄にして初めて英雄を知るべきが如く、佛にして初めて佛を知るべきである。

併しながら假令吾等の分際として佛の境界を知り悉すことは出來ずとも、全く分らぬと極めてしまふには及ばぬであらう。佛の說かれたる法は正しく今に遺つて居る。吾等は之によつて佛の御心の在る所を窺ひ知ることは出來る。又佛は吾等のために菩薩の道を委しく說かれ、吾等の共に之を學び之を信じ、之を實行すべきことを勸めて居らるゝのであるが、菩薩道を行ずるによつて結局は佛の境界に到達し得らるべきことも佛の明言したまへる所である、華嚴經には佛と菩薩とを比べて『その體に於て異る所はないが、その功德威力に於ては異る』とあつて摩尼珠の未だ彫飾磨瑩を充さゞるに於ては光彩有ること無きが如く、菩薩の法身も磨飾を充さゞるに同じ。

と譬喩を說いてある。佛は磨き上げた珠、菩薩は磨き上げられぬ珠の如くである。菩薩道を正しく解するならば、佛の境界も幾分か推想の出來ぬことは無いであらう。水中の有樣は水中へ入つた者でなければ充分には分らぬけれども、岸の上から覗いて見ても幾分か想像の出來ぬことはない。高山の頂の眺望は麓から充分には分らぬけれども、低い山へ登つた經驗に照して幾分か見當のつかぬことも無い。

佛に就て出來る丈多くを知ることは、佛法を學び佛法を信ずるものに取つて最も喜ばしい事である。されば先づ佛の十號といふことから始めて、吾等の窺ひ得べき佛の境界に就て說き試むることにしやう。佛は如何に讃めても讃め盡せぬものであるが、吾等の立場から佛を見上げて殊に貴く感ぜらるゝ點を擧げたのが此の十號である。それは譬へば富士山の寫眞を其の周圍の十點から撮つたやうなものである。之によつて富士の勝景を悉すことは出來ぬにしても、其

の名山たる所以を推知する便りとはなり得べきである。其の十號といふのは

如來。應供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛世尊。

である。此の中の無上士と調御丈夫とを併せて一號とし、佛と世尊とを別つて、凡て十號とする說もあるが、自分は以上の如くに分つ方が區別が明確であると思ふのである。

此の十號に就て極々簡單に說明をして見やう。先づ第一には如來である。吾が國では鎌倉時代の中頃から念佛が最も盛に行はれ、阿彌陀如來の名が最も汎く行はれ來つた爲に、如來といへば直に阿彌陀を聯想するやうになつて居るが、佛は凡て如來なのである。此の『如』といふのは『眞如』といふ時の如と同じことで、常住不變の義である。次に『來』といふのには二つの意義がある。先づ

因よりして果に來る。

といふのが其の第一の意義である。また

衆生の間に來る。

といふのが其の第二の意務である。第一に因といふのは修行を積むことである。果といふのは其の修行の結果として佛たるの德を成就せられたることである。されば因より果に來るといふは久しく修行を積んだ結果として絕對の眞理を覺り、永遠の生命を具ふる身と成り得られたことである。成實論に

如實の道に乘じて來り正覺を成ず、故に如來といふ。

とある。如實の道とは常住不變なる所の理をいひ、乘じて來るとは修行を積んで其の絕對の理を覺り得られたことをいふのである。次に第二の『衆生の間に來る』といふのは、凡夫の中に身を現じて敎へを說かるゝことである。秘藏記に

如來とは謂く、成佛より以來悲願力の故に化を垂れたまふなり。如に乘じて來るが故に如來

といふ。

とあるは此の義である。此處で如に乘じて來るといふのは絕體の眞理を其の身に體して衆生の間に來り、之に敎化を與へらるゝの義である。

次に應供といふは『供養を受くべきもの』といふ意である。供養は感謝の意を形に現はしたものであるが、常に大慈悲心を以て一切衆生に臨まるゝ佛こそは眞に一切衆生の供養を受くべき者である。智度論に

應に一切世間の供養を受くべし、故に名けて應供の人と爲す。

とあるは即ち此の義である。若し世の爲人の爲に力を盡すに當つて、一切名利の念を離れ、全く自己を捨て力を盡すならば、世間の感謝を受くる資格の充分あるものであるが、吾等凡夫は少しく善を爲せば忽ち其の善に誇り、之を世間の人に認めさせたいといふ念を起す。此の如き善行は眞の善行と稱せらるべきものでないから、供養を受くべき資格はないのである。顏淵の如き大賢人であれば『善に伐ること無からん』といふ志を以て人に對することも出來たであらうが、吾等の容易に企て及ぶべき所ではない。唯た大慈悲の外に何物も無き佛にして、初めて一切衆生の供養を受くべきである。

次に正徧知といふは、眞正に徧く一切のことを知るとの義である。梵語では三藐三菩提とも、或は三藐三佛陀ともいふ。註維摩經に、

三藐三菩提を秦に正徧知といふ。其の道眞正にして法として知らざる無きは正徧知なり。

とあるに依つて其の意は至て明かである。此處に『法』といふのは凡ての事物の根本的の性質のことである。佛の智慧は一切の事物の眞相を照して、一々皆其の要に當るのである。徒に事物を識ることをのみ努めても、其の智識が散漫にして要を得なければ殆んど何の役にも立たぬ。『大學』に心を正うすることを說いて、

身に忿懥する所有れば則ち其の正を得ず、恐懼する所有れば則ち其の正を得ず。好樂する所有れば則ち其の正を得ず。憂患する所有れば則ち其の正を得ず。心焉に在らざれば視れども見えず、聽けども聞えず、食へども其の味を知らず。

とあるは誠に能く穿つたる語である。自分の心が僻して居ては、如何に多くの經驗を積んでも正しい智識は得られぬ。一切の煩惱を離れ盡したる佛の御心にはいつも一切の事物の相が正しく映つて居るにちがひ無い。即ち明鏡止水の正しく物の形を映すに比ぶべきものである。斯く正しく徧き知力を具へらるゝが故に、一切衆生を救護することも出來るので、

妙智等倫無し。（無量壽經）

といふも實は此の意に外ならぬのである。

次に明行足といふは知る所と行ふ所とが共に完全に具足して居ることである。知つて行はなければ、知つたかひは無い。久しく學べば多くを知ることが出來る。多く知れば之を人に向つて說いて傾聽せしむることも出來る。併し是れ丈ではあまり貴ぶべき者ではない。能く知り能く行ふ者の說くことは眞に能く人を服せしむべきである。荀子の勸學篇の語は前にも引用したが、

君子の學は耳より入りて心に著き、四體に布き動靜に形はる。……一に以て法則と爲す可し。小人の學は耳より入りて口より出づ。口耳の間は四寸のみ、曷ぞ七尺の軀を美にするに足らんや。古の學者は己の爲にし。今の學者は人の爲にす。君子の學は以て其の身を美にす。小人の學は以て禽犢と爲る。

とあるは最も適切なる訓戒である。己の爲にするとは己を完全にせんことを目的とするのである。己が完全になれば自ら周圍の人に益を與ふることは出來る筈である。禽犢とは小禽とか牛の子とかの類で、是れは唯だ人が慰みに飼つて置くにすぎぬ。小人の學も正しく其の通りで、一種の慰みになるより外に何の能もないものである。

併しながら自ら善事を行ひて、其の善なることを自覺せぬ者も決して範とすべきものではない。例へば片田舍の非常に寂しい村に住んで居る人は奢侈なこともせず、權謀術數も用ゐず、一生を平和に送るのであるが、是れは質素と正直との貴むべきことを充分に自覺して居るのでなく、唯だ都會生活を全く知らぬために習慣的に質素を守り正直を守つて居るのみである。此の如き人が急に都會へ移り住んで、種々の事を見聞すると共に、初めて活きた世の中が分つたやうな氣がして、『世の中は正直にして居ては渡れぬものだ』といふやうな考へを起し、多年守り來つた所を一日にして捨てしまふといふやうな例は決して少くない。詳に知り固く信じて、而して其の身に篤く之を行ふ者にして、初めて如何なる境遇の變化を經ても其の行ふ所を渝へぬことを得べきである。蘇東坡の詩に

百川日夜逝き、物我相隨ひて去る。惟だ宿昔の心あり、依然として故處を守る。

とあるが、吾等の理想とする所は此に在らねばならぬ。佛は固より知る所も行ふ所も常に相一致して、何れも完全無缺であるから、其の一切衆生を救護したまふ所の働きも御生涯を通じて少しも變る所はなかつたのである。智度論には

云何か明行足と名くる。宿命と天眼と漏盡とを名けて三明と爲す。……行とは身口意の業に名く。唯だ佛のみ身口意具足したまふ、餘は皆失有り。

といつてある。宿命明といふのは自己及び他人の前世のこと迄も知る力である。天眼明といふは何人も眼の屆かぬ所も能く見透す力である。漏盡明といふのは有らゆる煩惱を除くべき道を知る力であつて、三明中最も大切なものである。此の三明が遺憾なく具足せるものが即ち佛の智慧である。斯る貴い智慧が具はつて、身に行ふ所と口に言ふ所と意に思ふ所とが全く一致

したものは佛のみであるから、佛に明行足といふ尊號がつけられて居るのである。

次に善逝といふは好去といふのも同じ意であつて、全く世間の累を受けぬことである。勿論佛は一切衆生を救護せんが爲に此の娑婆世界に出られたのであるが、其の身は娑婆世界に在つても、心は遠く涅槃界に在るので、智度論の中には之を説明して、

佛は一切智を大車と爲し八正道を行じて涅槃に入る。是を好去と名く。

といつてある。又大乘義章には

善逝といふは此れ德の義に從ひて以て其の名を立つるなり。善とは好に名け、逝とは去に名く。如來は好去す、故に善逝と名く。

とある。此處に善とか好とかあるのは『完全に』といふやうな義である。逝とか去とかあるのは離るゝことである。離るゝといふのは世間の人と離れて山の奥に住むことではない。一切世間の事に囚はれず、世間の凡ての變化の爲に累はされぬことである。全く累はされぬ人にして初めて世間の人に對して完全なる敎へを與ふることが出來るのである。

次には世間解であるが、是れは佛が一切の人と物とに就て審かに知り悉さるゝことをいふので、又『知世間』とも名くるものである。世間を知らずして世間を敎へ導くことの出來るわけは無い。隋の慧遠の無量壽經疏に

世間解とは是れ化他の智なり。

とあるが能く簡にして之を悉して居る。智度論には此の世間といふ語を更に廣く解して、

二種の世間を知るなり、一には衆生、二には非衆生なり。

といつてある。衆生とは即ち人のことで、非衆生とは自然界の種々の物をいふのである。人は天を戴き地を踏んで、大なる自然の中に生きて居るものである。此の大なる自然の中に起つて來る所の出來事は皆人の生活と密接なる關係をもつて居る。如何なる人でも自然の外に立つて生きて行くことは出來ぬ。されば人を敎化せんとする者は唯だ人を知るのみでは不充分である、人を包容する所の大自然に就て精到なる智識をもつて居なければならぬ。智度論にいふ所はまことに道理である。佛は衆生を知ると共に又よく非衆生を知ることに於て缺くる所が無かつたに違ひない。

併しながら佛の特に意を用ゐらるゝ所は人生の事であるから、佛法に歸依する者から仰ぎ見て特に貴く思はるゝのは、佛が常に吾等衆生の心の中を明かに照し見たまひて、少しも差はぬことである。即ち華嚴經に

一切の文字言説を出で、一切衆生の心念に行ずる所の根本性の樂欲煩惱の染習を知り、一念の中に悉く三世一切の諸法を知る。譬へば大海の普く能く四天下中の衆生の色身の形像を印現するが如し。

とあるは、深く佛に歸依する者の共に痛感する所である。此の事は前にいふ『善逝』と最も密切なる關係をもつて居る。少しなりとも囚はるゝ所があつては正しい判斷の下せやう筈がない。少しなりとも世間に對して求むる所のある人が、世間を教へ導くべき正しき道を立て得られやう筈がない。佛は善逝であるが故に、能く一切衆生の心の底までも照し見て、之に對して救護を與へらるゝのである。一代の說法は皆此よりして流れ出たもので、

我先に道場の菩提樹の下に端坐すること六年にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ずること得…

…諸の衆生の性欲不同なることを知れり。性欲不同なれば種々に法を說きにき。(無量義經)

とは釋尊の自ら語りたまへる所である。

次に無上士といふは、佛より上に立つべき者は誰もないので名くるのである。世間に於ける如何なる勢力も限りがあるが、佛は一切衆生の爲に永遠に守るべき教へを與へられたのであるから、佛より尊い者はない筈である。それで涅槃經には

如來は無上士と名く。譬へば人の身に頭を最も上と爲し、餘の肢手足等にあらざるが如し。佛も亦是の如く最も尊上たり。

とある。又智度論の中には

涅槃は法の無上なり、佛自ら之を知る。……諸法の中に涅槃の無上なるが如く、衆生の中に亦佛無上なり。

とある。又法華經の中には『無上兩足尊』とある。兩足をもつた者は人であるが、佛は凡ての人に超越して最も尊さが故に斯く名けらるゝのである。三十二相の中に『無見頂相』といふのがあつて、佛は誰よりも身の丈が高くて誰も其の頂を見ることは出來ぬと言ひ傳へてあるが、是れは佛が無上尊であるといふ意を現はしたものに外ならぬのである。

次に調御丈夫といふのは佛說十號經に依ると、『大丈夫の力用を具して而も種々の諸法を說き、一切衆生を調伏し制御して、垢染を離れて大涅槃を得しむる』の意である。調伏といふ語は後世に至つて誤用せられて、他人に禍の來るやうに祈ることを意味する習はしとなつたが、本來はさういふ意味ではない。吾等の心は種々の煩惱の群り起るために擾されて、いつも混亂の狀態に在るのであるが、其の混亂の狀態を整へて調和の狀態とならしめ、其の種々雜多の煩

惱を征伏して勢力の無いやうにしてしまふのが即ち調伏である。されば正しい意味でいふ調伏とは惑を去らしむることである。制御とは象や馬を馴らすことであるが、それを又調御ともいふのである。無量義經の中に於て、諸菩薩が佛を讃歎した偈に、

天人象馬の調御師、道風德香一切に薰ず。

とある。巧なる御者は荒い象や馬を訓練するのに或は嚴しく抑へ、或は優しくあしらひ、終に其の意の如くに使ふのであるが、佛も亦其の通りである。聽く者の機根に應じて、それ〳〵に適當なる教訓を與へられ、終に凡ての者を佛法に歸依せしめらるゝのである。佐藤一齋の言志錄にいふ所には

誘掖して之を導くは教の常なり。警戒して之を喩すは教の時なり。躬行以て之を率ゆるは教の本なり。言はずして之を化するは教の神なり。抑へて之を揚げ、激して之を進むるは教の權にして變なり。教も亦術多し。

とあるが、釋尊の如きは實に之を兼ね具へられた者と申すべきであらう。

次には天人師といふのであるが、佛は獨り人間の師たるのみならず、天上界の者も皆佛に歸依することによつて、眞に意義ある生活を送り得べきものと考へらるゝのである。元來人間界には苦が多いけれども天上界には苦がない。それ故に此の人間界に於て善を積んだ者は、來世に於て天上界に生を受くるといふのが印度人の舊くから信じ來つた所である。現に釋尊が出家せられて間もなく此の事に就て跋伽仙人と問答せられたことがある。其の頃の婆羅門の中に苦行を主とする一派があつて、彼も其に屬して居た。此の派の人々の信ずる所に依れば、現世に於て種々の苦行を爲し、絕えて樂を求めなければ、其の報として來世に於ては天上界に生れ、永く樂を受くることが出來るといふのである。釋尊は彼に對して、『何の爲の苦行ぞ』と問はれ、彼が『來世に於て永く天上の樂を享けんが爲である』と答ふるを聽かれて、

汝の求むる所は究竟の樂ではない。凡て業と報とは相應ずるものであるといふが、汝は現世に於て唯だ限りある苦行を積んで、來世に於ける限り無き福報を期待することは出來まい。其の福報が盡くる時には天上界の樂を失つて、求く種々の苦を受けなければならぬ。汝の求むる所の樂は苦に終るより外はあるまい。

と申されたと傳はつて居る。然らば如何にして永く苦を脫することが出來るかといへば、各自の心の土臺かち立て直すより外に道はない。自分の善い行に對して福報を得たいと期待する念が抑々誤つて居る。此處を根本的に教へたものが即ち佛教である。されば苟くも心を有するも

のは皆佛教を學ぶことによつてのみ永遠に平和と安樂とを享け得らるべきである。若し此の事に努めなければ、たとへ天上界に在る者と雖も必ず其の福報が盡きて苦界に沈む時が來るのであらう。斯ういふ考へに基いて佛は天人師として仰ぎ尊ばるゝのである。

天上界の者でも皆佛の御力を仰ぎ、佛の御力によつて救はるゝといふ意味を寓した傳說は隨分多くある。例へば帝釋天の如きも深く佛に歸依し、佛法の世に弘まることを護らうといふ念願を常にもつて居る。それで或時は天龍夜叉、鳩槃茶（鬼の一種である）等を驅使して、牛頭梅檀樹を以て大講堂を建て、牀榻臥具等も盡く皆具備して佛と僧とを供養したと傳へられて居る。又阿修羅王の女に毘摩質多といふのがあつて、極めて美しかつたので帝釋天は之を娶つて妻としたが、或日帝釋が侍女と共に後園に出て逍遙して居たのを毘摩質多が見て嫉妬心を起し、帝釋は自分を疎んじて他の女に心を移したと父の王に告げた。阿修羅王は之を聞いて大に怒り、兵を興して帝釋を攻めたが却て散々に打破られ、身を無熱池の中に潛めて繞かに免るゝことを得た。帝釋が斯く强敵に打克ち得たのも平生佛法を信じて慈悲心の敦かつた爲だと解釋されて居る。而して阿修羅も亦後に至つては佛に歸依したと傳へられる。此の傳說は

如何なる惡魔でも終には皆佛に歸依するものである

といふ信念が、凡ての佛法を奉ずる者の間に頗る强かつたことを證するものである。

又歡喜天に就ての傳說の如きも頗る意義深きものである。此の歡喜天は一般に聖天と稱し、吾が國にも所々に其の像が祀られて居て、之に福を祈れば七代の福を一代に授けらるゝなどゝいふ俗說さへある。象頭にして人身なる男女が相擁して立つ所の像である。此の男の方は毘那夜迦王といひ、女の方は扇那夜迦といふのであるが、毘那夜迦は大自在天の子で、扇那夜迦は觀世音菩薩の化身といふことである。毘那夜迦は非常に勇猛にして、自ら其の力を恃んで暴虐の限りを爲し、甚しく世を害したが誰も之を制することが出來なかつた。其の時に扇那夜迦は世間の人を救はんが爲に彼に近づいて其の歡心を得、終に彼をして其の心を飜して惡行を止めさせたといふのであるが、是も

暴力は終に慈悲の力に勝てぬものであるといふ意を現はすと共に、佛法の限りなく尊いことを示したる傳說である。いふ迄もなく觀世音菩薩の一切の働きは、佛の化導を贊くるものであると信ぜられて居る。

尙ほ多くの經論等に就て見ると、獨り天上界のみならず、有らゆる生物界に屬する者は皆佛に歸依して其の生存の意義を全うすべきものと考へらるゝのである。例へば法華經の序品を讀

むと、釋尊が靈鷲山に於て此經を說きたまふに當つて、聽聞のために集つた者を數へ上げてあるが、其の中には文殊師利等の諸菩薩、摩訶迦葉等の阿羅漢がある。其の外諸國の大王小王もある。又帝釋天を始めとして天上界に住する者も多く居る。又緊那羅といふのは天上界に居る樂神である。乾闥婆といふのも同じく樂神である。又阿修羅王や龍王の名が多く擧げてあるが、其等は皆海中に住むものである。又迦樓羅といふのは金翅鳥と譯すので、空を飛ぶ鳥類の王ともいふべきものである。又摩睺羅伽といふのは大蟒神と譯すので、地に住む蟲の王ともいふべきものである。其の他にも耶輸陀羅等の女人もあり、曾ては佛敵であつた阿闍世王なども ある。之を綜合して考へて見ると、此の聽聞者の中には地上に住む者、天上界に住む者、空を翔る者、水中に住む者等の代表者が皆含まれて居るのである。其等が皆法華經を聽聞するために集つて來たといふことは、

如何なる所に住む者でも、生命のある者は皆佛に歸依し、佛の敎へを受くべきものであるといふ意義を最も明かに示して居るのである。其等凡ての者を代表する意味で天と人とを擧げたので、天人師とは『凡ての生命ある者の師』といふ意味に解すべきである。

終りには佛世尊といふ尊號であるが、佛とは覺者の義なることは前にいつた通りである。其の覺といふ語に、覺察と覺悟の二義が含まれて居ることも前にいつたが、此處に重ねて大乘義章の中の說明を引用したいと思ふ。即ち先づ覺の二義を說いて、

一には覺察を覺と名く、人の賊を覺るが如し。二には覺悟を覺と名く、人の睡り寤むるが如し。

とあり、更に委しく之を說明して、

覺察の覺は煩惱障に對す。煩惱の侵害する事等しく賊の如し。唯だ聖にして覺知すれば其の害を爲さず。故に名けて覺と爲す。覺悟の覺は其の智障に對す。無明昏寢する事等しく睡の如く、聖慧一たび起り飜然として大悟すれば、睡の寤むることを得るが如し。故に名けて覺と爲す。

とある。即ち覺察といふのは賊が入つたのに氣がついて之を追ひ拂つたことで、賊とは即ち煩惱に喩へたのである。又覺悟といふのは睡つて居たものが眼を覺したことで、睡るとは智慧が昏つて居るのに喩へたのである。要するに一切の煩惱が除かれて智慧が少しも曇りなく輝き出した有樣をいふのである。斯く絕大の智慧を以て一切衆生の心の底を照し見て、之に救護を與へたまふが故に、何者も之を仰ぎ尊ばぬものはない。慧遠の無量壽經疏に、

佛は衆德を具し世の爲に欽仰せらる。故に世尊と號す。

とあるによつて其の意はよく悉されて居る。以上を以て概略ながら佛の十號の說明を終つた。

斯くも尊い佛が吾等暗愚の凡夫を隔てたまはず、吾等の苦を以て其の御一身の苦と爲し、常に吾等の爲にのみ心を碎かるゝのである。少しなりとも此に思ひ到つたならば、何人も感激せずしては已まぬであらう。法華經の文は幾度か引いたが其の譬喩品の中に說かれたる長者と其の諸子との話は、吾等衆生に對せらるゝ佛の御心を最もよく說明したものと思はれるから、重ねて此處に引用しやう。先づ一人の長者が大きな家をもつて居たが、其の家は非常に舊くて柱も腐り壁は落ち、その中には種々の怪しい動物が住んで居たとあり、其の動物の擧動が委しく描き出されてある。是れは吾等の心中に起つて來る所の種々の煩惱に喩へたのであつて、

是の如き諸難恐畏無量なり。

とある。實に人生の諸難は皆各人の煩惱より生み出さるゝもので、其の害は無量である。さて此の長者は外出して、後には其の子等のみが殘つて居たのであるが、忽ちにして家の中から火が起り、家はやがて燒け落ちてしまはうとするけれども、子等は少しも之に氣附かず、遊び戲れて居る有樣である。此の火宅はまことに人生の現狀である。人生は無常にして吾も人も何時死に襲はるゝかも知れぬ、その上に又種々の苦難があり、種々の災害が起るのである。然るに多くの人は之に氣附かずして唯だ眼前の樂みをのみ追うて居る。經文に

衆生其の中に沒在して、歡喜し遊戲し、覺えず知らず驚かず怖れず、亦厭ふことを生せず、解脫を求めず、此の三界の火宅に於て東西に馳走して、大苦に遭ふと雖もこれを以て患とせず。

とある通りである。

長者は歸つて此の有樣を見、何とかして其の子達を救ひ出さなければならぬと考へた。自分の身は安全であるけれども、其の子が皆安全にならぬうちは心が安まらぬのは親の情である。併し子達は愚であるから親の心を知らず、如何に勸めても火宅の中を出やうとはせぬ。長者は彼等を救ひ出すべき方便を案じ『此の門外に美しい羊車と鹿車と牛車とがある、其等は皆汝達に與へんが爲のものであるから、早く出て取るがよい』といつた。子達は之を聞いて先を爭つて門外へ出たので、皆火宅の難を免るゝことが出來た。長者は之を見て

我已に之を救ひて難を脫るゝことを得しめぬ。是故に諸人我今快樂なり。

といつた。是れが眞に親たる者の情である。佛も亦其の如く、唯だ吾等衆生が共に苦を脫し得

ることをのみ悅びとしたまふのである。さて長者は諸子に約の如く車を與へたが、それは前にいつた所の羊車鹿車牛車などでは無く、それよりも遙かに美しく七寶を以て飾つたる車を大なる白牛に牽かせて、彼等の自由に乘るに任せたとある。羊車等は佛の方便の敎に喩へ、大なる白牛の牽く車とは佛の眞實の敎に喩へ、佛は種々の方便の敎を說きたまふのみならず、最後に至れば其の自ら覺り得たる所を其儘に打明けて、眞實の敎を說きたまふべしとの義である。釋尊は以上の長者と諸子との譬喩を說かれて後、其の一代の說法の目的を語つて、

如來は已に三界の火宅を離れて、寂然として閑居し林野に安處せり。今此の三界は皆是れ我が有なり。其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり。而も今此處は諸の患難多し。唯我一人のみ能く救護を爲す。

と仰せられた。此の後半の句は今までにも度々引用したが、是こそは眞に釋尊の御精神の在る所を遺憾なく說き顯はしたものと申すべきである。

先づ佛は三界の火宅を離れて、獨り寂然として安處せらるゝとある。佛の御心には絕對に苦惱もなく憂悶もなく、永く安らかに居たまふのである。而も一切衆生が火宅の中に在つて其の火宅なることを覺らず、空しく毎日を過して居るさまを見ては、『我より外に之を救ふべき者はない、我一人の力を以て是非とも彼等を救はなければならぬ』と思ひ定められて、其の安穩平和なる境界をすてゝ、此の火宅の中へ下り立ち、吾等衆生と共に住んで吾等を懇に敎へ導かるゝのである。而して吾等が此の無意義なる生活を脫して、共に生きがひのある生き方をするやうになれば、初めて滿足を感ぜらるゝので、それは彼の長者が諸子の安穩なるを見て初めて心を安んじたのと全く同樣である。此等の事に基いて、吾等と佛との間に特に重要なる三點の差異が認められる。

第一に吾等の心には苦惱があり憂悶があるけれども、佛の御心は全く安穩であり平和である。

第二に吾等は專ら一身の憂を以て憂とするのであるが、佛はたゞ吾等の憂を以て憂とせらるゝのである。

第三に吾等は佛の御力に賴ることに依つて初めて眞の悅びが得らるゝのであるが、佛は吾等を救護することのみを悅びとせらるゝのである。

斯く吾等と佛とは非常に懸隔したものであるけれども、佛は吾等をして共に佛の境界に到らしめんといふ大慈悲心から、其の久しく勤苦して後に覺りたまへる所を惜氣もなく打明けて吾等

の爲に說かれた。それが即ち大乘の敎である。

彼の長者の諸子は羊車とか鹿車とかを得て滿足するつもりであつたが、父の長者は彼等の希望する物よりも遙かに美しい車を白牛に牽かせて彼等に與へたといふ。親の慈悲は斯くまでに深いものである。吾等衆生を『悉く是れ吾が子なり』と仰せられたる佛は、此の長者と同じく吾等の希望するより以上の幸を吾等に與へんことを念として居らるゝのである。此の佛の御心を知つたる迦葉等が

我等今日未曾有なることを得たり。先の所望に非るを而も今自ら得たり。

といつて深く感謝したのは左もあるべきことである。

佛に歸依し、佛法を學ぶ者の中に聲聞、緣覺及び菩薩の區別のあることは前から屢々述べ來つた通りであるが、此の法華經方便品の中に於て釋尊は

汝等疑有ること勿れ、我はこれ諸法の王なり。普く諸の大衆に告ぐ、但だ一乘の道を以て諸の菩薩を敎化して、聲聞の弟子無し。

と仰せられ、更に重ねて

復た諸の疑惑無く、心に大歡喜を生じて自ら當に作佛すべしと知れ。

と仰せられたのである。『聲聞の弟子無し』とは如何にも力强い語である。即ち苟くも佛弟子たる者は悉く皆大乘の敎を學び、悉く皆菩薩道を行じ、悉く皆末には佛の境界に到達せんことを期せなければならぬとの意である。勿論佛の說きたまへる所にも極めて卑近なものがあるけれども、佛は其の卑近なる敎へを與へらるゝ時に、聽く者を漸次に敎へ導いて、後には必ず大乘を學ばせやうといふ御心を以て說かれたのである。譬へば高い樓へ上るためには數十段の梯子が掛けられてあるが、其の最も下の段でも樓上と續いて居るのである。

思益經には佛が思益（梵天の名である）に對して、『佛は五力を以て法を說くものである。此の五力を知る者は佛の如くに法を說くことが出來る』と敎へられたことがある。而して思益が其の五力とは何であるかと問へるに對して、佛は

五力とは一に言說、二に隨宜、三に方便、四に法門、五に大悲なり。

と答へられた。此の第一の言說といふのは法を說くに當つて最も適切なる言說を用ゐらるゝことである。之に就て

諸法は說くべからず、而も是を說く。

といつてある。如何に適切なる言語を用ゐても眞理が說き盡せるものではない。說く所は其の

一部分のことに過ぎぬ。併し言語を用ゐなければ人を教へ導くことは全く出來ぬ。故に最も善く說く者は、聽く者をして自ら深く言外の意を味ひ、更に深く自ら究めて眞理を捉ふることを得しむるやうに說くのである。佛の所謂言說とはそれである。第二に隨宜といふは聽く者に適當なる教を與へ、漸次に之を導いて深きに入らしむることで、

垢法を淨法と說くことあり、淨法を垢法と說くことあり。云々

といつてある。皆其の宜しきに應じて說き、結局は眞實のことを覺らしむるのである。第三に方便とは布施とか持戒とか忍辱とかいふことを細々と教へらるゝのをいふのである。佛となれば絕對の眞理と一致せられたのであるから、一切の差別を超越して居らるゝので、

如來は我相もなく人相もなく、衆生相もなく壽命相もなく、亦施も慳もなく、持戒も破戒もなく、忍辱も瞋恚もなく、精進も懈怠もなく、禪定も亂心もなく、智慧も智慧果もなく、一切の相あることなし。而も此を說くは皆衆生の爲の方便として說くなり。

とある通りである。即ち所謂菩薩道なるものは佛の境界に到達するための方便であるから、佛は殊に力を用ゐて之を說かるゝのである。第四に法門といふは佛の說きたまふ教義のことである。絕對の眞理は固より言語文字に現はし得べきものではないが、之を捉ふるために如何なる徑路を經ざるべからざるかを、順序を立て組織を具へて說かるゝものが即ち法門である。されば

法性は淸淨なり、我文字を以て此を示す。

といつてある。終りに大悲といふは一切衆生を救護する根本の心である。一切衆生は皆佛性を有するものであるから、能く此の佛性を養つて育てゝ行きさへすれば終には佛と同じ境界にも到達し得べきである。然るに多くの者は之に氣附かずして煩惱の爲に役せられ、其の一生を無意味に終らんとするのである。佛は之を憫れみ、彼等を覺醒せしめ、彼等を教へ導いて彼等が全く其の惑を離れ盡すまでは決して之を捨てまいと思つて居らるゝので、之を大悲といふのである。此の大悲心よりして救護の働きが生ずるのである。されば大日經にも

菩提心を因と爲し、大悲を根本と爲す。

とある。又涅槃經には

若し大悲なければ是を佛と名けず。

といつてある。此の佛の大悲の中に漏るゝものは一人も無い。吾等は互ひに賢愚の別を立て善惡の差を分ち、愚者を卑しんで賢者を貴び、惡人を排斥して善人を敬重する。併し佛は吾等の

認めて愚者と爲し惡人と爲す者をも捨てられぬのである。

思益經には以上の五力を數へ上げてあるけれども其の根本的のものは第五の『大悲』である。他の四者は大悲よりして發し來る所の種々の働きに外ならぬものである。但し佛が如何に一切の衆生に救護を與へやうと思召されても、其の救護を受くべき本性の無いものは如何ともし難いであらう。譬へば土の中に草の種や木の種が埋つて居るが、日の光りに暖められて皆芽を出し、地上にズン〳〵と伸びて行く。併し砂や礫は如何に日の光りを受けても芽を出すことは出來ぬ。それは砂や礫に生命がないから、如何に日光を受けても伸びて行くことは出來ぬのである。それと同樣で、佛の御力を以てしても無より有を生ずることは出來ぬのである。佛が一切衆生に救護を與へらるゝのは、一切衆生の中の如何なる愚者も惡人も皆佛性を具へて居ることを認めらるゝが故である。これは前にも引いた語であるが、

佛性等しきを以ての故に衆生を視ること差別あることなし。

と涅槃經にあるのは、能く此の意を示したるものである。

涅槃經にはまた三因佛性といふことが說いてある。即ち一切衆生が共に佛性を具へ、共に佛の境界に到達し得べきものであることを明すと共に、如何にして佛の境界に到達すべきものなるかを示すものである。其の三因佛性といふのは、

一に正因佛性。二に了因佛性。三に緣因佛性。

である。第一に正因佛性といふのは人々皆絕對の理を明にし、一切の邪非を離るべき性質を、生れながらにして具有せることをいふのである。前にも引いた首楞嚴經の中の語に、

衆生元より佛性有り他より得べきにあらず。譬へば人ありて自ら衣の中に如意珠を持ちて覺知せざるが如し。又倉に寶を藏して之を知らず、馳走して食を求むるが如し。

とあるのと合せて見ると、其の意は尤も明かである。第二に了因佛性といふのは能く學んで智慧を成就することである。了とは絕對の理を照了するの義である。人々皆佛性を具へて居るとはいふものゝ之を養つて長ぜしめなければ何の用をも爲さぬ。然るに吾等は前生より正しく學んで正しき智慧を成就することに力を用ゐず、果敢ない生活のみを續けて來た爲に、切角具有せる佛性が少しも伸びずして、唯だ眼前の小い利害得失を考量することにのみ忙しいのである。法集經に據ると、摩訶陀國の王が或時釋尊に向つて、『一切の衆生は何によりて業を造るや』と問うたが、釋尊は之に、答へて

一切の衆生は我見によりて顚倒の分別を爲す。顚倒の分別は惑なり。惑の故に業を造る。業

を造るが故に解脱すること能はず。

と仰せられた。王は更に問うて『我見は何によりて起るや』といつたが、釋尊は

我見は無明を根本と爲す。

と答へられた。王はまた『無明は何を根本となすや』と問うた。釋尊は

無明は理に違へる作意を根本と爲す。

と答へられた。王はまた『理に違へる作意は何を根本と爲すや』と問うたが、釋尊は

不平等の心を根本と爲す。

と答へられた。王は更に『不平等の心とは何ぞや』と問うたが、釋尊は之に答へて

無始より以來實の如くに知らざるを不平等の心といふなり。

と仰せられた。吾等凡夫は無始の遠い昔から、正しく學ぶことをせぬ爲に、何事をも實の如くに知る力が無く、一方に偏し一部に限られたる見方ばかりをして居る。それ故に小き自己の利害得失のみを重に考へて、種々の罪を作り種々の惡業を爲すのである。若し佛法に歸依して正しき教を學び、次第に智慧が明になれば、次第に惡業に遠ざかり得らるべきである。之を稱して了因佛性といふ。第三に緣因佛性といふのは、了因を助くる所の一切の善根功德のことである。即ち吾等の周圍の人々の幸福を增進し、その不幸を除去するために絕えず力を用ゆることである。吾等の心は小き自己の利害得失にのみ局限され易いのであるが、斯る弊を除くために常に努めて周圍の人々の爲に力を盡さなければならぬ。人の爲は畢竟自己の爲である。人の爲に力を盡すことによつて自己に囚はるゝ心が改まつて行くのである。斯くして努めて已まぬものが、即ち正しい智慧を成就することを得るのである。法華經の提婆品に檀王が阿私仙人に隨つて學んだことが記されて居るが、王は四方に宣令して法を求むるに當り、

誰か能く我が爲に大乘を說かん者ぞ。我當に身を終るまで供給し走使すべし。

といひ、仙人は其の大乘を說くに先つて、

若し我に違はずんば當に爲に宣說すべし。

といつた。それで王は初めの約束の如く仙人に仕へて有らゆる勤勞に服したのである。即ち經文には其の有樣を叙して、

即ち仙人に隨ひて所須を供給し、果を採り水を汲み薪を拾ひ食を設け、乃至身を以て牀座と作せしも身心倦むこと無かりき。時に奉事すること千歲を經て、法の爲の故に精勤し給侍して乏しき所無からしめき。

とある。斯く勤めて怠らなかつた爲に智慧も開けて、終に佛と成ることが出來たとある。行基大僧正が此の意を歌に詠んで、

法華經を我が得しことは薪こり菜つみ水くみ仕へてぞ得し

といつた。勤勞を厭ふものは智慧を成就することは出來ぬのである。如何に正因があつても、了因と緣因とが之に伴はなければ、いつ迄も凡夫の境界を脱することの出來やう筈はない。法華經の方便品に

佛種は緣によつて起る。

とあるのが眞に意味深く感ぜるゝわけである。

天台大師の著なる『金光明經玄義』にも此の三因佛性に就ての說明がある。先づ佛性といふことを說明して『佛とは覺に名け、性とは改まらざるに名く』とあつて、次に正因佛性に就て

土内の金藏の如く、天魔外道も壞ること能はず。正因佛性と名く。

とある。大地の中に金鑛が埋まつて居るのを誰も知らなければ、何時までも掘り出す人がないから、埋まつたまゝで何の用をも爲さぬ。併し此の金は何時までも金である。天魔外道と雖も之を如何ともすることは出來ぬ。人の生れながらにして佛性を具ふるのも亦此の如くである。此の佛性が全く滅び盡すといふことは無い。如何なる惡人でも其の心の底には佛性が潛んで居るのである。たゞ多くの人は此の事に氣付かぬので、此の佛性がいつ迄も光りを發すべき時にあはぬのである。次に了因佛性に就ては

智と理と相應ず。人の能く金藏を知るが如く、此の智は破壞す可からず。了因佛性と名く。

とある。智と理と相應ずるといふのは智を磨くによつて漸く理を明にすることが出來たことである。それは譬へば地中に埋まつて居る金鑛を見出し、それを掘り出して物の用に立てるのと同樣である。其の智の光りは普く世間を照して、世間の人を救護する所の大なる働きをするのである。次に緣因佛性に就ては

功德善根覺智を資助し、正性を開顯すること草穢を耘除し金藏を掘り出すが如し。緣因佛性と名く。

とある。金鑛を見出せば之を掘り出すことが出來るわけであるが、其の掘り出すのは草を刈り拂ひ土の中へ深く穴を穿つ等の手數を要する。惑を去つて覺を開くのもそれと同樣である。唯だ佛の敎を學んで智を磨くといふだけでは足らぬ。世の爲人の爲に身を勞し心を勞して、種々

の善い働きをして居る間に、佛の御心も本當に分り、小い一身の利害得失に囚はれて暮すの無意味なことも充分に悟り得らるゝのである。

されば眞に『學ぶ』といふのは唯だ教を聽いて其の意を解することではない。深く之を信じなければならぬ。唯だ信ずるのみではない。必ず之を身に行はなければならぬ。之を身に行つて後でなければ眞に解し得たのではない。行はぬ前の智解は、まだ本當の智解ではない。固く信じ篤く行ふに至つて初めて教を聽いたかひがあるのである。蘇東坡の小品文の中に『賣油翁の事を錄す』といふ一篇がある。

陳康肅公射を善くし當世無雙なり、公亦此を以て自ら矜る。嘗て家圃に射る。賣油翁有り擔を釋て立ち之を睨し、久しくして去らず。其の矢を發すること十にして八九の中るを見、但だ微かに之を頷す。康肅問ひて曰く、汝も亦射を知るか、吾が射また精ならずや。翁曰く、他無し、但だ手の熟せるのみ。康肅忿然として曰く、爾安んぞ吾が射を輕んずる。翁曰く、我が油を酌むを以て之を知ると。乃ち一の胡蘆を取りて地に置き、錢を以て其の口を覆ひ、徐に杓油を以て之に瀝ぐに、錢孔より入りて而して錢濕はず。因て曰く、我も亦他無し、たゞ手の熟せるのみと。康肅笑ひて之を遣る。

是れは一の小話であるが大に味ふべきものである。何事でも自得すれば此に至るので、言語を以て說明し得らるゝものではない。信仰上の事も亦此の通りである。能く學んで能く解し、又能く信じて能く之を身に行ふこと久しきに及んで、漸く自得することが出來る。併しながら吾等に佛性が具はらなければ如何に貴い教を聽いても之を學ばうといふ氣も起らず之を信じ之を行はうといふ氣も起らぬであらう。吾等が自ら斯る貴い佛性を具ふる身であることを深く感謝しなければならぬ。又たとへ佛性を具へたりとも、佛法を聽くことが無かつたならば此の佛性を開發すべき道を辨へずして終つたであらう。吾等は如何にして佛恩を稱ふべきかを知らぬものである。

殊に迦葉が『先の所望にあらざるを而も今自ら得たり』といつた一言は最も吾等の身に適切に感じられる。吾等は最初から佛に成らうといふ大理想を立て佛法を學んだのではない。然るに佛は吾等を教へ導いて佛の境界に到達せしめなければ止まぬと仰せらるゝのである。先づ一般世間の有樣を見ると、道も教も一切求むること無しに一生を送るものが大多數である。其等の人々は決して其の生活が滿足なものであるから、道も教も入らぬといふのではない。誰でも滿足して居るものはない。外から見れば羨しい境界に在る人でも、其の心には何等かの不滿が

ある。大成功者の模型ともいふべき豐太閤が伏見城で死ぬ時に、

露とおき露と消えゐる我が身かな浪華の事は夢のまた夢

といふ辭世を詠んで居るのを見ると如何にも氣の毒の感に堪へぬ。此の如くに人生は果敢ないものであるが、多くの人は人生には何故に滿足がないかといふことに就て深くも考へず、ウカ〳〵と毎日を送つてしまふのである。然るに何等かの出來事に出逢つて、眞面目に考へて見ると、今までの生活のあまりに無意味であつたことが感ぜられて、『今少し意義ある活き方は出來ぬものか』といふ要求が自ら其の心の底に起つて來る。これが信仰を求むる緣となるのである。併しながら其の求むる所の所謂『意義ある活き方』は、まだ佛と成るといふやうな高尚なものではないのである。其の求むる所は唯だ煩悶なく憂惱なき生活を送るに在るのみである。迦葉は自ら述懷して、

我等內の滅を自ら足ることを爲たりと謂ひ、唯だ此の事を了りて更に餘事無かりき。

といつた。內の滅とは其の心の內に起つて來る苦みや惑を除き得たことをいふのである。更に餘事無しとは自ら世間の累を脫し得たるに滿足して、更に世の人を導かうとか、救はうとかいふ念の起らなかつたことである。迦葉は釋尊の門下に於て殊に重きを置かれた人であるが、此の人ですら初めは佛と成らうなどゝいふ考へは無かつたといふ。況して吾等の如き凡俗の者が最初からさういふ高い理想をもつことの出來やうわけは無い。

それでも心の中の問題に就て考へる者は、一般の水平線よりは餘程上の方に在るものなのである。世間で『信心をする』といふ人の十中八九までは病氣を早く直したいとか、災難を除けたいとかいふ欲求に動されて所謂信心をするのである。人生といふことに就て眞面目に考へて見ないでも、病氣とか災難とかによつて脅されて、自分の力よりも更に大なる力が何處かに存在するらしいといふ感じを起す場合は可なりに多い。さういふ事が緣となつて信心を始める人が夥しくある。(信仰の各種に就ては餘程前に一通り申述べたことがある。今こゝでは必要な點だけを簡單に繰返して述ぶるのである。)斯ういふやうな信心を如何に久しく續けても、佛の御心の分らう筈はない。況して佛の御心を吾が心として世に立たうなどゝいふ覺悟を起さう筈もない。併し斯ういふ淺はかな信心でも、佛法を學ぶべき緣にはなるものである。昔の人の句に

菜の花や滋賀の都のはいり口

といふのがある。近江の琵琶湖の畔には菜の花が非常に多く咲いて居る。其の菜の花の美しいのをめでながら、春風のソヨ〳〵と吹く中を歩いて行くと、いつ來たともなく滋賀の都の趾

へも來て、昔を弔ふ氣も起るのである。緣といふものは誠に貴いものである。

信仰のことも亦其の如くで、至て低い程度の信仰しかもたぬ人でも、それより更に深入するやうに導かれて行くと、いつか一歩より一歩と深入して、後には正しい信仰をもち、正しく佛の御心を解し得るやうにもなれるのである。兎も角も自分よりも偉大な力をもつたものが何處かに居るといふことを感じたのは良いことである。併しそこから一轉するところが最も大切なので、若し誤つて惡い方へ深入すると、たゞ無意味に何等かの神秘的な力をのみ賴つて、自己の當に爲すべきことに努むる念が全くなくなつてしまふ。此の如くであれば無信仰な人よりも遙かに劣るといつても過言ではない。譬へば吾等は食物を攝ることに依つて身を養ふのであるが、毒の混じた食物を攝れば、身を養ふどころでは無く或は身を殺すことさへある。

病は口よりして入る。

といふ語は確かに眞理を含んで居る。信仰も大切であるが、誤つた信仰は大なる禍の元である。身の病が口より入るやうに、心の病が信よりして入る場合が極めて多い。

幸にして佛法を信じて淸淨なる生活に入りたいといふ心持が起つて來れば、佛の境界に近づくべき端はこゝに開くるわけである。佛は何時如何なる者に對して敎を說かるゝにも、『彼は佛性をもつて居る、彼は佛と成り得べきものである』といふことを念として說かるゝのであるから、たとへ最初から佛に成らうなどゝいふ高い理想をもたぬ者でも、眞面目な念を以つて佛の敎を學んで居れば、いつとなしに佛の御心に近いやうな心をもつやうになるに極まつて居る。吾等は『佛になどなれまい』と思つても、佛は吾等に對して『皆佛にしてやらう』といふ御心を以て臨まるゝのである。若し自ら覺りたまへる所を吾等に傳へたまはぬならば、法を惜むことになる。それでは大慈悲の佛とはいはれぬ。されば法華經の方便品に於て、

自ら無上道大乘平等の法を證して、若し小乘を以て化すること乃至一人に於てもせば、我則ち慳貪に墮せん。此の事爲めて不可なり。

と明言せられたわけである。尙ほ此の方便品の中には

若は曠野の中に於て土を積みて佛廟を成し、乃至童子の戲に沙を聚めて佛塔と爲せる、是の如き諸人等皆已に佛道を成じき。

とか、若くは

乃至童子の戲に、若は艸木及び筆或は指の爪甲を以て而も畫きて佛像を作せる。是の如き諸人等、漸々に功德を積み大悲心を具足して、皆已に佛道を成じ、但だ諸の菩薩を化し、無量

の衆を度脱しき。

とか、若くは又

或は歡喜の心を以て歌唄して佛德を頌し、乃至一小音を以てせしも、皆已に佛道を成じき。

若し人散亂の心に、乃至一華を以て畫像に供養せし、漸く無數の佛を見たてまつりき。

とか、其外種々の場合が擧げられ、

若し人散亂の心に、塔廟の中に入りて、一たび南無佛と稱せしも、皆已に佛道を成じき。

とさへいつてある。土や砂で塔を作るとか、爪の先で佛の御姿をかくとか、たゞ一枝の花を佛に供へるとかいふことは至て小い善事にすぎぬ。又佛を禮拜するのに一心を籠めてするのでなく、散亂した心で口先でばかり南無佛と稱する如きは、善事といふ名を冒すことも出來ぬほどの業である。而も皆佛と成るべき道を得たといつてある。

唯だ小い善事を行ふのみで止まれば、それ迄のことであるが、之を緣として進み求めて已まなければ如何なる大善ともなるべきである。中庸に出たる孔子の言に

君子は道に遵ひて行く。半途にして廢するも、吾は已む能はず。

とある。世間の道を學ぶといふ者の多くは半途にして廢するが、自分は努めて道を行ひて已まぬといふ意で、是れが眞の君子たるものゝ志である。なほ之に續いて

君子の道は費にして隱なり。夫婦の愚も以て與り知る可し。其の至れるに及びてや、聖人と雖も亦知らざる所あり。夫婦の不肖も以て能く行ふべし。其の至れるに及びてや、聖人と雖も亦能くせざる所あり。

とある。匹夫匹婦でも知り得る所、行ひ得る所のことを努めて已まなければ、聖人と雖も力及ばぬといふ程の大事を成すことも出來るのである。佛法を學ぶに於ても其の通りである。即ち前の經文に數へ上げられたる小い善事の下に一々皆『漸々に功德を積み、大悲心を具足して』といふ句を補つて讀めば其の意味が能く分る。最初は佛像に花を具へるとか、口先ばかりで南無と唱ふるとかいふやうな小い善事でも、それが緣となつて漸次に多くの功德を積んで行けば漸次に佛の御心に近いやうな心をもつやうになり、結局は佛の如き大慈悲心を具ふるにも至るべきである。兎にも角にも怠らず又急がず、妄りに自ら侮らず、又決して自ら足れりとせず、一歩より一歩と確實なる歩みを進めて行くべきである。

勿論それには久しい修行を重ねなければならぬことであるが、必ずしも歳月の長短のみに依るべきものではない。懈怠の心を以てたとへ百年を送るとも、精勤なること一日なるには遠く

及ばぬ。傳教大師のことは前にも幾度か引いたが、其の願文を讀むと實に感奮せざるを得ぬ感じがする。大師は十二歳にして出家し、十九歳に至るまでに六宗の教義を究め、俊秀の聞えが高かつたのであるが、（當時は奈良が日本の佛法の中心であつた。而して奈良の諸大寺に於ては、その頃までに支那から傳はつたる、六宗の教義を研究したものである。六宗とは小乘の三宗即ち倶舍宗、成實宗及び律宗。大乘の三宗即ち三論宗、法相宗及び華嚴宗で、これを古都の六宗といふ。）更に深く究めて、佛の御本意が果して何れに在るかを覺らうと心を決して延曆四年十九歳の七月中旬、叡山に登つて草庵を結んだ。元來此の山は大師に取つては深い因緣のある山で、父の三津百枝といふ人が男子を得たいと思つて此の叡山の麓に草庵を結び、清淨なる生活をして佛に祈願し、やがて望みの如く男子を得たのが即ち大師である。

さて大師は叡山に引籠り、深き研究に入るに先つて、一篇の願文を作つて之を佛前に於て讀み、其の志の存する所を述べ、自ら此の志を達せざる内は此の山を下るまいと誓つたのである。其の願文に於ては先づ

生ける時善を作さずんば、死するの日獄の薪とならん。

といひ、自ら省みて

得難くして移り易きは其れ人身なり。發し難くして忘れ易きは斯れ善心なり。

といひ、修行の必要を述べて、

因無くして果を得るは是の處有ること無く、善無くして苦を免るは是の處有ること無し。

といひ、佛の戒めたまへる所を思ひ合せて、

然れば則ち苦因を知りて苦果を畏れざるを釋尊は闡提と遮したまひ、人身を得て徒に善業を作さゞるを聖教に空手を責めたまへり。

といひ、而る後に自ら五ヶ條の誓願を立てたる次第を述べて、

愚が中の極愚、狂が中の極狂、塵禿の有情、底下の最澄、上は諸佛に違し、中は皇法に背き下は孝禮を缺けり。謹んで迷狂の心に隨ひ、三二の願を發す。

とある。而も此の願を貫かんが爲には如何なる困苦をも忍ばんといふ決心を以て、

無上第一義の爲に、金剛不壞不退の心願を發す。

といつた。大師は僅かに十九歳の青年にして、斯くまでの大決心をしたのである。

而して其の五ヶ條の誓願なるものを讀むと、苟くも大乘佛教を學ぶ者の共に念頭に置かなければならぬことが皆悉されて居るやうに感ぜらるゝのである。其の第一には

我未だ六根相似の位を得ざるより以還は出假せじ。

とある。出假といふのは出假行のことで、即ち世間の人を教化することをいふのである。假とは差別のことで、即ち世間の種々無量に差別せられて居る有様をいふのである。出假とは斯る世間に出て佛の教を弘むる働きをいふので、即ち法師たる者の勤めである。此の如き貴い勤めを果すのは、自分が充分の素養を積んでからでなければならぬ。それには六根相似の位に到達してからでなければならぬと大師は思ひ定めたのである。相似の位といふのは、天台大師の立てられた六即の第四位に當るのである。此の六即のことは前にも一通り述べたから、此處に委しくはいはぬが、要するに凡が夫大乘の教を學んで佛の境界に到達するまでの間を六段に分けて說いたので、

一、理即――如何なる者でも佛性を具へて居るから佛と成り得べき筈であるが、自ら之に氣づかぬ爲に教を學ばうともせぬ。此の如き境界を理即といふ。

二、名字即――佛教を學んで一通りの教理に通じ、智解は相當にもつて居るが、實行がまだ之に伴はぬ。此の如き境界を名字即といふ。

三、觀行即――佛教の教理を學んで更に進んで其の實行に努め、深く自ら省察して其の足らざる所を補ひ、漸次に進歩して行く。此の如き境界が觀行即である。

四、相似即――次第に行が進んで、佛の教へられた所に背かぬまでになつた境界である。心の底まで佛教の教理と一致するのには未だ遼遠であるが、形に現はれた所は佛菩薩の行とほゞ近くなつたので相似といふのである。

此の相似即に至れば六根清淨なるを得る故に『六根相似の位』といつてある。斯く自身が立派な行の出來るやうになつて初めて能く周圍の人を感化し得べきである。たゞ巧に說くことに依つて人に感化を與へやうと思ふのは間違つて居る。傳教大師が先づ此處に着眼したのは敬服すべきことである。

但し此處に誤解があつてはならぬ。これは『非常なる高德の人にならぬ間は一切教を說かぬ』といふ意ではない。教を說くことは自己の修養の一つである。されば法華經の法師品などでは解說といふことを五種の修行の一つに數へてある。たとへ自分にまだ充分實行の出來ぬことでも『今は出來ぬけれども必ず之を實行するやうに努めやう』といふ決心さへついて居れば、之を人に對して說くのは善いことである。之によつて多少なりとも人を益し、又自分で自分を勵ますの爲にも役立つことは疑ひない。但し之を說くに當つて『多くの人を教化してやらう』など

丶自ら許すことなく、『斯んなことを口に說きながらまだ實行の出來ぬのは恥かしい、早く之を實行し得るやうになりたい』と自ら省み自ら勵む心でなければならぬ。されば相似の位に達せぬ間に說くのは、眞の意味でいふ敎化にはならぬのであると考へて、常に進步に心懸くることが法を弘むる者には殊に必要な義である。

誓願の第二も亦甚だ適切なことである。其の頃は法師といふものが世間に重んぜられ、上流の人々とも親しく交際して居たので、歌を詠むとか、樂器を翫ぶとかいふことに長じて居るものは殊に持て囃された風である。併し法師は法を學び法を弘むることが其の本分であるから、其の本分を忘れて才藝の末に走つてはならぬのである。仍て、

未だ理を照すの心を得ざるより以還は才藝あらじ。

とある。理を照すの心とは即ち智慧のことである。佛法の正しき理を辨へ知る働きのことである。此の智慧が具はらなければ法を弘むることは出來ぬ。法を弘むることが出來ずに法師と稱するは大なる罪を犯せるものといはなければならぬ。此の大切なことに充分力を用ゐて、其の餘力があれば才藝に於ても秀でた者になるのは固より望ましいことである。

第三の誓願は歸依者より布施を受くるに就ての考へを述べたものである。僧を招じて法會を營むのは佛の正法を聽かんが爲である。又その僧に對して布施するのは、一には法を聽けるに對する感謝の意を表し、又一には之を以て弘法の資に充てしめんが爲である。されば法師たるものは斯る貴い志に副ふことが出來るか如何かと、自ら深く省みなければならぬ筈である。仍て、

未だ淨戒を具足することを得ざるより以還は、檀主の法會に預らじ。

とある。檀主とは即ち檀越のことである。檀越とは布施すの人をいふのである。檀主よりして法師として尊ばるゝものは、尊ばるゝだけの資格を具へなければならぬが、その根本的のものは淨戒を具することである。淨戒を具するとは即ち佛の定めたまへる大乘戒を守つて少しも違反せぬことである。天台宗の開祖たる天台大師は大に戒を重んじ、自ら梵網經の註釋を作り、又授戒の式をも定め、其の門下に對して

今時の僧衆戒律を以て心に在かざる者、恐らくは佛法を滅さん。

と嚴しく戒め、又

聲聞の小行すら猶ほ自ら木叉を珍敬す。大士の兼懷なる寧ぞ戒品を精持せざらんや。

といつた。木叉といふのは戒のことである。大士とは菩薩道を勵む者を凡て稱するのである。

小乘を學ぶ者でさへ戒を重んずることを知つて居る、然るにそれよりも立勝れる大乘を學ぶ者にして戒を守れぬ筈はないといふのが天台大師の主張である。大師はまた其の著『摩訶止觀』の中にも戒のことを說いて居るが、其の中に戒の重んずべきを力說して、

清淨に守護すること明珠を愛するが如くせよ。若し敗犯する者は器の已に缺けたるが如く、用に堪ゆる所無し。

といつた。天台大師の意の在る所は此の如くである。其の天台の敎義を日本に弘むるために力を盡した傳敎大師が夙くから戒を重んずる心の篤かつたことは更に不思議ではない。戒を持つのは煩惱を除かんが爲である。煩惱を除き得て初めて心が淸淨になる。淸淨なる心をもてる者にして初めて能く人を濟ひ世を導き得べきである。傳敎大師が此の事をその五ケ條の誓願の一に加へたのは誠に尤もなことである。

次には誓願の第四であるが、此處にも吾等は極めて大なる敎訓を見出し得るのである。時代を導くべき力がなければ、一の宗敎として存在すべき意味のないことは多言を要せぬが、その『導くべき力』の根本を養はずして、たゞ『導くための活動』のみに熱中するのは本末を誤つたものである。蘇東坡が其の友人を戒むるために作つた『稼說』の中に、

吾子其れ此を去りて學に務めよや。博く學びて約に取り、厚く積みて薄く發せよ。吾が吾子に告ぐること此に止る。

といつたのは、殊に佛法を學ぶものに切實なる訓戒である。傳敎大師は流石に着眼が勝れて居たと見えて、

未だ般若の心を得ざるより以還は世間の人事の務に著せじ。相似の位を除く。

といつてある。般若とは平等智である。有らゆる變化、有らゆる差別の中を一貫して永久に變らぬ所の原理がなければならぬ。之を捉へ得たものは即ち平等智を具せるものである。人には賢愚の別がある。貴賤貧富等の別がある。又其の行ふ所に善惡正邪の別がある。併しながら人の人たる本性に至つては何人も皆本來具有する所であつて、如何なる惡人と雖も之を失ひ盡すといふことはない。佛法は此の點を基礎として立つて居るものである。佛法を弘むるものは先以て此の點をシツカリと捉へて居なければならぬ。前から屢々いふ通り佛は何人をも惡まず、何人をも隔てられぬ。涅槃經には

人七子有るに、其の一子病にあへり。父母の愛は平等ならざるにあらずと雖も、然も病子に於ては心偏に重し。

とあつて、其の惑の甚しきものほど、佛は特に之を愍みたまふといふことが說き示されてある。佛法を世に弘めんとする者は此の精神を失つてはならぬ。

此の根本的の大切な事をシツカリと捉へて居れば、人事百般に對して正しく之を指導して行くことが出來るのである。奈良平安の朝に於ては、法師といふ者が非常に尊重せられて居たから、世間的の事に就ても種々の相談を受けたと思はれるが、世法は佛法を根柢として立つべきものであるから、佛法の眞の精神を捉へ得ぬものが世法を指導するといふことは極めて危險である。傳敎大師が此の點に心を致されたのは敬服すべきことである。若し修養を積んで、前にいふ所の相似の位に達した者であれば、斯ういふ點に就ての懸念は萬々ないのであるから、『相似の位に達した時には此の限りにあらず』との但し書があるわけである。

誓願の第五に至つては大師の精神が最もよく現はれて居る。元來佛法を學ぶものは、世の爲人の爲といふことを片時たりとも忘れてはならぬのである。己が才識に誇つて、世間の愚なる者を輕んじ侮るの念が少しでも萌すならば、その學び得たる所は却て罪を作る本となるべきである。傳敎大師が

修むる所の功德獨り己が身に受けず、普く有識に廻らし施し、悉く皆無上菩提を得しめん。

といつたのは眞に大乘を學ぶ者の心懸けとして申分のないものである。尙ほ大師は以上の五ケ條の誓願を述べて後、

伏して願はくば解脫の味獨り飲まず、安樂の果獨り證せず、法界の衆生と同じく妙味を服せん。

といつた。また

若し五神通を得ん時、必ず自度を取らず正位を證せず、一切に著せざらん。

といつた。著するといふのは自ら恃み自ら誇る心である。自分だけ覺つたからそれで充分であるとは思はず、自分は世間の人とは遙に隔つた地位に在る者だなどゝは思はず、世間の人を輕んじ侮るやうな心を決して起すまいといふのである。而して後に、

佛國土を淨めて衆生を成就し、未來際を盡すまで恒に佛事を作さんことを。

といふを以て此の願文を終つて居る。衆生を成就するといふのは、衆生をして皆共に佛性を具有せることを自覺せしめ、共に大乘の敎に歸依して其の佛性を開發せんとの志を起させることである。是れが即ち佛事である。佛事とは即ち佛の仕業であるが、佛の仕業といふのは衆生を救護することのみである。大師は幾度生を受けても必ず此の心を失はず、佛の救護の業を贊け

て行かうといふ決心をしたのである。此の如き人こそは眞に佛弟子たる名を冒して耻しからぬものである。

傳教大師の如きは固より非凡なる人物であるから、少年時代に於て既にこれ程の識見を具へて居たので、吾等の到底及ぶべき所とは思はれぬ。併しながら吾等の如き凡庸の者と雖も心を潛めて經論を讀み、佛が何故に此の世に出現して法を說かれたるかを思へば、彼の傳教大師の志せる所を以て吾等も亦吾等の志とし、洪大無邊なる佛恩に報じなければならぬといふ念は自ら起る筈である。但し現在の如き極めて切迫したる時代に於て、靜かに佛法の深義を味ふことは甚だ困難な業である。況して之を世に弘めやうとすれば其の困難はまた一層である。觀普賢經の中に

心根は猿猴の如くにして暫くも停る時無し。

とか、又は

身は是れ機關の主なり、塵の風に隨ひて轉ずるが如し。

とかいつてあるが、實際吾等凡夫の心は常に周圍の物に惹かれて動き、瞬間たりとも靜まることは無い。然るに今の時代は非常に刺激の多い時代である。青や紅に彩つた眩しい燈の影を見恐ろしく鋭い自動車のサイレンの音を聞いて居れば大概の者は頭の中が混亂してしまふ。又各自の生活が複雜になると共に、競爭が益々劇しくなり、人の心と心とは次第に乖離して行くを免れぬ有樣である。此の忙しく騷々しい世の中を通り拔けるのは、宛も浪風の荒い海へ小船を乘り出したやうなものである。英國の古代の諺に

あまり忙しい人は何事をもせずに終る。

といふのがあるが、實際あまり忙しいと、爲すことが皆宜い加減になつて、何一つとして自分の魂を打込んだといふことは無いから、如何に多くの仕事をしても、後になつて考へて見ると一切無價値の事ばかりで、『夢のやうに生きて來たナァ』と自ら悔むより外はない。

斯ういふ時代に生れ合せた吾等が自らも道を求め、又世間にも道を弘めやうといふのには餘程シッカリした決心をもたなければ出來ることでは無い。前にも屢々いふ通り、佛は末世の衆生を救はんが爲に、特に大乘の教を說き遺された法が滅び盡すであらうといふことも豫め洞見して居られたやうである。例へば法滅盡經の如きは末世の有樣を遺憾なく寫し出してある。これは釋尊が入滅より三月ばかり以前に說かれたものであるが、其の時に

世尊寂靜にして默して說きたまふ所無く、光明現ぜず。

とある。即ち釋尊が末世に至つて佛法の衰ふべき時の有樣を考へて、寂しい氣分で居られたのである。此の有樣を見て阿難が『是れは尋常一樣の事ではない』と考へて、三たび迄も繰返して其の理由を尋ねたので、釋尊は終に口を開かれて仰せらるゝには、

吾が涅槃の後、法の滅せんと欲する時、五逆の濁世にして魔道興盛なり。魔沙門となつて吾が道を壞亂す。俗の衣裳を著けて袈裟にも五色の服を樂好し、酒を飲み肉を噉ひ、殺生して味を貪り、慈心有ること無くして更に相憎嫉せん。

とある。正しく今の世の佛敎の有樣が此の通りである。釋尊の當時に在つては、佛弟子の生活は極めて質素なものであつた。其の住む所の僧房は一切の華美なるものを斥け、大なる椅子に腰をかけることさへ禁じられて居た。(前に大乘戒に就て述べた所を參照せられたい。)又食事といへば、毎日一度の正食と一度の小食のみであつた。正食は飯であるが、小食は今日でいふ團子のやうなものに過ぎなかつた。又衣類といへば肌着の上に袈裟を纏ふのであるが、其の袈裟は多くの人から貰ひ集めた布を綴つて、それを田の泥で染めて用ゐたので、之を壞色といつた。佛弟子たる人々が此の如き簡易質素の生活をしたに就ては二つの理由がある。其の一つの理由は

心を專にして修行することが肝要

であるからである。人の心の力には限りがある。若し衣食住のことに多く心を勞するならば、道を求むるとか敎を聽くとかいふことには自ら疎になるを免れぬ。それ故に佛弟子たる者は衣食住に就て多く心を用ゐぬやうにしなければならぬのである。今一つの理由は

人の努力を尊重しなければならぬ

が爲である。一粒の米でも一寸の布でも容易に出來るものではない。然るに自ら耕さず自ら織らずして、人の耕したものや人の織つた物を布施せられて生命を繫ぐのであるから決して之を濫費せぬやうに、出來る丈少しく用ゐて濟ますやうにしなければならぬのである。然るに末世に及ぶと此の正しい風儀が壞れてしまひ、出家の身でありながら美しい衣を身に纏ふことを競ふやうになる。又互ひに勢力を爭つて憎みあひ、嫉みあふやうになる。此の如くにして、佛法を弘むべき任を負うて居る者が佛法の衰微の因を作つて居るのである。釋尊は又語を次いで、斯る時代にも『諸の功德を作し、正に志し善を思ひ、人を侵害せず、身を捐て物を濟し、自ら己を惜まずして忍辱仁和なる』人も少しはあるであらうと仰せられ、更に

設ひ是の人有るも、衆魔の比丘咸共に之を嫉み、誹謗して惡を揚げ、擯黜驅遣して住することを得しめざらん。

とある。邪な心をもつ者は正しい人が兎角自分等の邪を遂ぐる妨げとなるので、之に迫害を與へて、其の勢力を奪ふことに殆んど全力を注ぐのである。是れが末世の實狀である。

又釋尊御在世の時の僧は一切財物を蓄へず、餘りがあれば盡く之を世の貧しい人々に施したのであるが、末世になるとそれと正反對になるのであらうと察せられて、

但だ財物を貪りて積聚して散ぜず、福德を作らず、奴婢を販賣し、田を耕して種植し、山林を焚燒し、衆生を傷害して慈心有ること無からん。

と仰せられた。敎を說く者は自分の說く所が人に容れられなければ、いつでも袂を拂つて去るといふ覺悟がなければならぬ。聽く人の意を迎ふるために、自分の所信を枉げるといふやうな未練な考へで、世を導き人を敎ゆることの出來るものではない。それ故に生活を出來る丈單純にして居なければならぬのである。若し貨殖を謀り生活を豐富にするやうになると、それに執著が生ずるために、時としては周圍の人に迎合する必要上から、所信を貫けぬことも起るのである。併しそれが末世に於ける僧徒の常態である。又互ひに勢力を爭ふがために種々の騷動を起して、一般の人にまで迷惑をかける場合も少くない。平安朝の末に於ける叡山と三井寺の爭ひなどは其の最も著しい例である。佛は斯ういふことのあるのを疾くに洞見して居られたのである。

又佛の正法を世に弘むることを己の任とする者であれば、一人でも多く道を求むる人を得ることを深き悅びとしなければならぬのであるが、自分の實力が無いと、學問あり識見ある人の相手となることを避けて、成るべく愚人を相手にし迷信を勸むることを重な業とするやうになるのは是非もない次第である。釋尊は之を豫め察して、

或は縣官の吾が道に依倚するを避け、求めて沙門と作れども戒律を修めず。

と仰せられた。縣官といふのは地方を治むる官吏のことであるが、釋尊當時には未だ敎育が普及して居なかつたから、有識階級といへば先づ官吏に限られた有樣であつた。それに基いて斯ういはれたので、今日の語に改めていへば『有識者の敎を求むるのを避けて』といふ意である。古の高僧碩德といふものは唯だ佛法を信ずることが篤かつたのみならず、普く其の時代の人を指導するだけの智識と抱負とをもつて居た者である。然るに末世になると智も足らず心も卑い者が多く出家するから、往々にして有識者の相手になることを厭ひ、專ら愚夫愚婦のみを

集めて佛の御本意に叶はぬやうなことを說き聽かせ、又自身の身持も修まらぬのが多くなるのである。

斯る淺學不識の者が經論を讀誦したとても、聽く者に善い感化を與へられやう筈はない。釋尊はそれ故に、更に語を次いで、

戒を說くと稱すと雖も厭倦懈怠にして、聽聞を欲せず。前後を抄略して肯て盡く說かず。經を誦し習はず。設ひ讀む者有るも字句を識らず。……明なる者に諮はずして、貢高にして名を求め、……人の供養を冀望するのみ。

と仰せられた。師も弟子も共に緩み切つた氣分であるから、聽く者も成るべくは聽きたくないといふ考へで居る。說く者は又充分に研究して說くのでないから、前後を抄略して自分の解し得た所だけを說き、佛の眞意を說き顯はすことなどは出來ぬ。又たとへ口先ばかりで經を讀んでも、其の字句の意味の分らぬ者が多くある。此の如くでありながら、智慧の明なる人に就て學ばうとはせず、唯だ外貌を繕ひ飾つて名を求め利を求むることのみを主として居る。まことに末世の僧の生活が有の儘に活寫せられてある。

以上は末世に於ける法師の有樣に就ての豫言であるが、釋尊は更に一般世間の狀態をも察せられて、

法の滅せんと欲する時には、女人のみ精進して恒に功德を作し、男子は懈り慢じて法語を用ゐず、眼に沙門を見ること糞土を視るが如く、信心有ること無からん。

と仰せられた。是れも近頃の世の中に能く當て嵌るやうである。懈るといふは人生の意義を眞面目に考へることをせぬことである。其日其日を無事に送りさへすれば、それで宜いといふやうな淺はかな心持で暮して居ることである。慢ずるといふのは人間以上の高さもの、尊きものが有るといふことを辨へず、自分の淺薄なる分別によつて立派に世の中が渡れるものゝやうに思ひ込んで居ることである。此の如き者が多數であれば、世相は益々險惡になるばかりである。此の如き狀態が續いた結果は如何なるかといふに、釋尊は更に次の如くに仰せられた。

人民勤苦して縣官計剋し、道理に順はずして皆亂を樂むことを思ふ。

是れも正しく今の時代に適切である。人民は如何に身を勞しても生活が樂にならず、頻りに苦み惱んで居る。又官吏は人民に對する同情が足らず、たゞ其の威力によつて功を收めんことをのみ考へて居る。それで人々の心が次第に離叛して行き、道理に順はずして動もすれば暴力に賴り、亂を作すことを好むといふ風である。是れが末世の世相である。赤穗四十七士の一人た

る間喜兵衛が元祿元年に大石五左衛門へ宛てた書簡の中に、其の時代に對する憤慨の意を述べて、

武士は捨り果てたるうき世にて御坐候由、何方も御同前と相見へ申す事に候。……利口利發利勘にて大形勘忍仕候はゞ、所領をも奪はれさう成うき世にて御坐候。劍を振はざる亂世と當公方様の上意の由取沙汰仕候。

とあるが、今日でも其の通りである。實に釋尊の洞見せられたる所は少しも違はぬ。

此の如くに淺ましい時代に於ても佛法が急に亡び盡すことは無く、暫くは世間を離れた山の中で淨らかに行ひ澄す人々によつて其の命脈を繫いで行くであらうと、釋尊は御考へになつた仍て經には

時に菩薩辟支羅漢有るも、衆魔驅逐して衆會に預からしめず。三乘山に入り、福德の地にして恬淡にして自ら守り、以て欣快と爲す。壽命延長し諸天衛護す。

とある。今日でも多くの人は斯ういふのが眞の佛法であると思つて居るやうである。世間の僧といふものが十中の八九までは俗人よりも更に俗であつて、名利を貪り勢力を爭ふことのみを專とし、醜いことばかりして居る間に、比較的恬淡無欲にして多く求むる所無く、佛に事へ經論を讀誦することのみを樂みとする者があれば、世人は驚異の眼を以て之を眺め、『斯ういふ人こそ佛の生れ更りであらう』といふのである。而して斯る所謂高僧の說く所が今の活社會と何等の交渉が無くても、それは餘り問題にはならず、相當に歸依者を集めて居る。

此の如き人は確かに尊敬に値する人である。多くの人の難しとする所を實行するのであるから、非常なる勇氣と信念とが無ければ出來ぬことである。されば其の說く所が假令今の活社會と交渉が無くても、其の淸淨なる生活は名利と權勢とより外に何物も無き今の世の中に大なる淸凉劑となることは疑を容れぬことである。芭蕉翁の句に

雲の峰いくつ崩れて月の山

といふのがある。夏の盛りに日暮になると、西の空にムク〳〵と雲が集つて、大小幾多の峰を作つて居る。その雲の峰が夜に入つて盡く崩れてしまひ、空に月影の冴え渡る時に、初めて隆然として聳え立つ高嶺の氣高い姿が現はれて來る、名利の外に超然たる高僧の仰ぐべく貴ぶべき有樣も正しく此の如くである。紅紫の色さま〴〵なる法衣を纏うて其の勢を競ふ人々は雲の峰の如きものである。明治の初年に東京の或る名刹に住して居た某といふ高僧が一日二三の弟子を連れて外へ出やうとした時、本堂の前で二三人の乞食が連れ立つて歩いて居るのに出逢つ

た。その時一人の弟子は『彼等は又本堂の下で夜を明したのでありませう、憎い奴です』といつた。住職が『何故彼等を憎いといふのか』と問うと、その弟子は『時々本堂の縁の下で焚火をするので危くてなりませぬ。若し火事にでもなつたら大變ではありませぬか』といつた。之を聞いた住職某師は彼の乞食達の後姿を手を合せて拜んで、『それ程に苦しい生活をして居ながら、能く盗賊にもならずに居てくれる。有難いことである』といつたので、弟子達は深く耻入つて口を閉ぢてしまつたといふ話が傳はつて居る。此人の如きは多くの貪欲無慚なる僧徒に比べて見ると、實に雲泥の差ありとも申すべき者であらう。

併しながら如何に其の人物が高潔であつても、斯ういふ人の感化の及ぶ所はあまり大きくはない。斯ういふ人は活社會の事情を全く知らぬのであるから、其の說く所は極めて迂遠であつて、たとへ世間の善人の歸依を得ることはあつても、一般世俗の人には全く顧みられぬ。一般世俗の人は『乞食を拜むとは變つて居る。其處が出家の出家たる所であらう』といふくらゐに冷評して過ぐるのみである。されば此等の人は仰ぐべく貴ぶべき人々には相違ないが、佛法を普く世に弘むるだけの力を具へた者とはいはれぬのである。何處の國でも正しい心の人が全く無くなつた時代といふものは無いが、正しい人が勢力を失つてしまへば必ず衰亡に向ふのである。されば自分の行に不正が無いといふことを以て互に滿足して居てはならぬ。正しい人同士が協力一致して、いつも不正なものを制裁するだけの勢力をもつて居ることが極めて肝要である。

弱いといふことが罪の元になる。

互に此事をシッカリと考へて居なければならぬ。たとへ自ら罪を作らずとも、罪の行はるゝのを防遏するだけの强さを缺いて居るものは、罪を作る援助をして居ると同樣である。佛法に於ても此の意義が充分に敎へられて居ることは、前にも屢々述べた通りである。

釋尊が鴦掘摩といふ者を感化して弟子とされたことを前に引いたが、彼の鴦掘摩が白刃を揮つて宛ら惡鬼の如くに荒れまはり、多くの人を斬り倒して居るところへ、釋尊は單身にして向はれ、弟子達が危ぶんで御止め申すのに對して、『たとへ三界盡く寇となるとも吾は省みず、況んや一賊をや』と仰せられた。此處に佛の絕大なる勇氣が現はれて居る。三界が盡く敵となつても恐れぬといふ程の決心があればこそ、一切衆生を救護するといふ大事も出來るのである。屢々いふ通り、佛敎を學ぶ者は佛の御心を以て吾が心としなければならぬのである。されば假令淨く正しい心をもつて居ても、たゞ己を潔くするを以て足れりとし、他の不正不義の徒を

制裁して其の不正を遂げしめず、其の不義を果さしめぬといふだけの覺悟がなければ、佛の御心に一致したものとはいへず、隨て正しき意味に於ける佛教徒とはいへぬわけである。斯ういふ消極的の考への人ばかりが僅かに佛教の孤壘を守つて居るのでは、甚だ心細い次第といはなければならぬ。釋尊は能く此事を見徹して居られたと見えて、前の文に續いて

譬へば油燈の滅せんと欲する時に臨みて、光明更に盛にして、是に於て便ち滅するが如く、吾が法の滅せん時も亦燈の滅するが如くならん。此よりの後は數へ說く可きこと難し。

とある。燈の消え際にパッと明るくなるが、其の光りは長くは保たず、直に消えて眞暗闇になつてしまふのであるが、佛法の滅盡する時も亦その通りであらうといふのである。

前に叙せられてあるやうに、世間の累ひを避けて獨り淨らかに行ひ澄して居る人が假令僅かでも有るのを見ると、佛法の命が斯る人達によつて保たれて行くのかと思はれて、多少は賴もしい感じもするが、それは燈の消え際の光りに過ぎぬものである。滔々たる世間が殆んど皆鬪爭を事とし、相排し相奪ふことになると、斯る消極的の佛徒の力で此の恐るべき力に對抗することなどは到底出來ず、佛法は結局滅し盡すより外はない。釋尊は之を豫め見徹して居られたのである。然らば法滅盡といふことが凡ての最後であるかといふと左樣ではなく、最後には彌勒のことを述べられて、

彌勒當に世間に下つて佛と成るべし。天下泰平にして毒氣消除し、雨の潤すこと和適にして五穀滋茂し、樹木長大に……衆生の得度すること稱計す可からざらん。

とある。一旦佛法が滅びて後、又彌勒によつて佛法の再興が行はれ、此より後は永久に滅ぶることが無いといふのである。

此の彌勒菩薩といふは釋尊の敎を聽聞したる諸菩薩の中でも殊に有力なる者の一人と考へられて居るが彌勒といふは其の姓で、阿逸多といふのが其の名である。彌勒とは『慈氏』の意である、阿逸多とは『無能勝』の意、即ち何人も此人に能く勝るものは無いとの意である。此の彌勒は此の生を終つて後に兜率天に生を享け、後また再び此の娑婆世界に下つて佛と成り、普く一切衆生を救ひ、其の力によつて此の世界が永く榮えて行くと信ぜられて居るのである。此の話の中に含まれたる意味をよく考へて見ると、第一に彌勒は前に此の娑婆世界に居て、此の世界の苦しい所であることは充分に知つて居るわけである。而して第二に生を享けたる兜率天は固より天上界であるから苦もなく累もない所にちがひ無い。然るに其の天上界から又もや苦の多い娑婆世界へ下つて來るといふは、此の娑婆世界の苦を救はうといふ大慈悲心に出ること

勿論である。而も單に之を救はうといふ考へをもつて居るばかりで無く、娑婆世界のことは知り悉して居るから娑婆世界の苦が何に由つて起るか、又此の苦を滅するには如何なる道に依るべきか等のことをも充分に知つて居るわけである。此の洪大なる慈悲と智慧とを具へたる以上は、佛と仰がるゝに至ることも更に不思議ではない。斯く考へ來ると、末世に至つて佛法を再興し、眞暗闇の中に又新なる光明を投ずるといふ大なる働きをする者は、

安らかなる己の境界を去つて、苦に充ちた世界に入つて行くといふ洪大なる慈悲心

其の苦に充ちた世界の有樣を隈なく照し見るところの洪大なる智慧。

を具へたものでなければならぬといふことは自ら明かである。

以上法滅盡經に現はれたる思想は頗る味ふべきものである。法滅盡とはいふが實は滅盡では無く、法は一たび滅しても再び興つて、而して永久に榮えて行くのである。滅したやうに見えても、實は滅したのではなく、暫く其の影を潛めたのみである。何故に佛法は滅せぬのであるかといへば、

何人でも其の本來具有せる佛性の滅び盡すといふことは無い

からである。前に引いた文（三因佛性を説明する所に）の中に、吾等の具有する佛性は地底に黃金が埋まつて居るやうなものであると說いてあつたが、其の金鑛にも種々あつて、比較的地面に近いのもあり、又非常に遠いのもある。末世の衆生の如きは煩惱が積り重つたる心の底に深く佛性が潛んで居るのであつて、宛も數千尺の地底に藏せられたる黃金の如きものである。されば、之を掘り出すことは甚だ困難である。いくら掘つて見ても見當らぬから、大概な者は諦めてしまふのである。併し非常に深く掘り下げて行くだけの努力を惜まなければ、其の黃金は終に闇を破つて燦然たる光りを放つべきものである。同じ光りでも明るい室の中へ射し込んだのと、眞の闇を破つて照り渡つたのとでは、其の光りの强さが非常に異つて見える。末世に至つて貴い佛法に歸依し、周圍の人々が皆爭ひあひ鬩ぎあひ、瞬時も安き心もなくて過る中に、悠然として迫らず、泰然として動ぜず、光明に充ちた心が其の一擧一動の上にも自ら現はれ靜かに世間を見下して居る人の姿ほど偉大なものは少からう。

尙今一つ法華經の文を引いて見たい。法華經の藥王品には、藥王菩薩が前世に於て一切衆生喜見菩薩といひ、日月淨明德佛の敎を受けた時のことが記されてある。此の佛が久しく世に在つて說くべき所は已に說き盡し、入滅せられた時に、一切衆生喜見菩薩は佛の遺骸を荼毘に附し、其の舍利を葬つた所へ最も莊嚴なる塔を建て、佛恩に感謝する意を現はしたが、それで

はまだ心が濟まず、

我是の供養を作すと雖も心猶ほ未だ足らず、我今當に更に舍利を供養すべし。

と心に念じ、多くの人々に向つて、

汝等當に一心に念ずべし、我今日月淨明德佛の舍利を供養せん。

といひ、自ら塔の前に於て其の臂を燒いて供養とした。その時大地は六種に震動し、天よりは寶華を雨したとある。前にもいつた通り供養は感謝の意を形に現はしたものである。寶塔を建てもなほ足れりとせず、自ら其の身を損して供養したといふは感恩の念の最も至れるものである。されば之を見て多くの人々も、今更の如くに佛恩の洪大なること、及び佛法の尊ぶべく重んずべきことを感じ、

此の一切衆生喜見菩薩は是れ我等が師、我を敎化したまふ者なり。

といつたとあるが、既に佛恩に感ずること深ければ、其の報恩の爲に佛法の弘通に全力を注がうといふ決心をすべきである。

佛法が世に弘まれば佛に取つては最上の悅びであつて、如何なる供養も之に勝るものは無い。仍て釋尊は佛法を佛の御心の如くに正しく世に弘むる者を稱めて『唯我のみならず、一切の諸佛も共に讃めらるゝであらう』とて、

所得の福德無量無邊なり、火も燒くこと能はず、水も漂はすこと能はず。汝の功德は千佛共に說けども盡さしむること能はず。

とまで仰せられた。殊に末法の世に及んで世相が最も險惡になり、人心の不安其の極に達すべきを洞見して、其の時にこそ大乘の敎を弘めて徹底的に一切衆生を救護すべきであるとの意で、

我が滅度の後、後の五百歲の中に廣宣流布して、閻浮提に於て斷絕して、惡魔魔民諸天龍、夜叉鳩槃茶等に其の便を得しむること無かれ。

と仰せられた。是れは正しく今日の吾等に對しての御語と解すべきものである。後の五百歲とは即ち末法の世のことである。末法の世といふは正法の世と像法の世とが皆過ぎ去つて後のことである。大集經等に據れば、佛の滅後一千年は正法の世、其の次の一千年は像法の世である。正法とは佛の敎へられた所が能く守られて、多くの人は佛の敎へを理解するのみならず、之を實行して居る時代のことである。像法とは其の敎へは廢らぬけれでも、之を實行するものは至て少く、唯だ敎理の研究やら解釋やらに主として力を注いで居る時代のことである。さて

此の二千年過ぎての後が末法の世であるが、末とは『無くなつた』といふことで即ち法の亡びてしまつた世といふ意味である。

此の末法の世を白法隱沒の時といひ、或は鬪諍堅固の時といふのであるが、何れも今の吾等が眼前に見て居る世の中に最も適切なる形容と思はれる。白いと黑いとは正邪を形容したので、白法といふは即ち正法である。世が末になつて人々が極端に利己的になると、道とか教へとかいふものを全く認めず、自己の欲望を達する爲には如何なる手段をも擇まぬといふやうな人のみが多く出るのである。即ち佛の正法が隱沒して世に行はれぬ時である。斯る時代となれば人々互に名を爭ひ利を爭ひ、奪ひあふことのみを主として、少しも讓りあふとか扶けあふとかいふ考へは無くなる。されば鬪諍堅固の世といはるゝのである。堅固とは『斯うなるに定まつて居る』といふ意である。末法の世に鬪諍が盛になるのは決して動かぬ事なのである。但し斯る時代に於ても多くの人が集つて種々なる團結をすることはあるが、それは各自が私心を捨て協力一致するのでは無く、其の團結の力を假りて各自の欲望を達せんとするに過ぎぬものである。孔子の言に

君子は周して比せず、小人は比して周せず。

とあるが、孔安國は之に註して『忠信を周と爲し、阿黨を比と爲す』といつた。小人は私心を以て黨を作り以て各自の欲望を達するための便とするので、聖德太子が『人各黨あり、また達者少し』と仰せられたのも此の事である。若し單に個人と個人とが相爭ふのみなれば、其の爭ひも左程激烈にはならぬであらうが、互に黨を作り派を分つて爭ふが故に其の爭は極端になるのである。

殊に國と國との間に行はるゝ競爭は、終に戰爭といふ恐るべき結果を生み出すに至るのである。吾等の理想からいへば、個人と個人との間に義理人情が重んぜらるゝ如くに、國と國との間も義理人情を主として、常に圓滿なる交際が行はるべき筈である。又これは單に吾等の理想たるに止まらず、現に『國際の信義』といふことが頻りに唱へられて居るのであるが、事實をいふと信義の重んぜらるゝ場合が比較的に少くて、動もすれば

利害得失が主となつて凡ての問題が解決せられ、

勢力ある大國はいつも勢力無き小國を壓して其の主張を貫くといふ狀態であるのは、まことに哀むべき次第である。個人と個人とが相爭つて終に腕力に訴へるやうになれば、社會制裁の力によつて之を制止するのであるが、國と國との間に於ては斯る制裁の力が甚だ微弱であつて、

平和會議といふものもあるが、充分に其の効果を現はすに至らぬ有樣である。斯る國際の爭ひを止め、絶對の平和の基礎を作るものは宗教を措いて他に之を求むることは出來ぬのであるが、今は末法の時で、白法隱沒であるが故に、世界に眞の平和といふものは見られぬのである。

苟くも義を後にして利を先にすることを爲せば、奪はざれば厭かず。

と孟子のいつたのは誠に當世に適切である。奪つた者は又他の者に奪はるゝことを恐るゝが故にいつも警戒を怠らぬ。斯くして險惡なる世相は益々險惡になるのみである。

併しながら誰も此の如き狀態に滿足して居るものは無いのである。誰の心にも佛性が泯び盡したのでは無いから、周圍の形勢に引摺られて爭鬪的の生活をして居ながらも、其の心の底には『斯んな生活を早く脱出したい。平和がほしい、明るい氣分になりたい』といふ聲が響いて居るのである。勿論人によつて其の性格はそれ〳〵に異ふが、眼の前の事にのみ囚はれず、靜かに落着いて考へることの出來る人ならば、斯ういふ心の底の聲を幾度か聞くにつれて、

吾をして肅然として容を正さしむるものは晴れたる空の星影と吾が心の中の聲とである。

と哲人カントがいつたやうな感じが起つて來なければならぬ。此の感じがやがて正しい信仰の要求となるのである。それはいふ迄も無く、最も優れたる宗教の信仰でなければならぬ。それでなければ末法の世の闇黑界に新しい光りが投ぜらるゝことなどは望まれぬ。

末法の世の極めて複雜なる中で揉まれて、多くの人の心は非常に尖り、何事に就ても批評的になつて居るから、如何に善い教へであつても、あまり單純なものは信仰せられぬのである。それは宛も重い病に罹つて居る者に平凡な藥を飲ませても全く効目がないのと同樣のことである。獨り佛が吾等の爲に說き遺されたる大乘の教は、吾等人間の本性に立脚したる最も正確にして又高遠なる說であつて、此の教には凡て吾等の心の中に萌して來る有らゆる疑惑を解くべき力が具はつて居る。これは宛も非常に優れたる名醫の調合したる靈藥の如きものである。此の如き尊い教を信ずるものが最初から多く出ることは固より望まれぬであらうが、たとへ少數でも大乘の教に就て正しい、さうして深い信仰をもつた人が出れば、所謂廣宣流布の機運が此處に動いて、此より漸次に世相が變化して行くべきである。而して其の終りに於ては此の娑婆世界が光明に充ちたる淸淨の世界となるべきである。然るに若しも末法の世に於て斯る尊い教を信ずる者も無く又之を世に弘めんと努力する者もなければ、此よりも更に單純で、更に淺薄なる教は世に行はれぬに極つて居るのであるから、世間に道とか教とかいふものは全く無く

なつてしまつて、惡魔の横行するに任せるより外はないことになる。それで『後の五百歳に於て普く世に此の教を弘めよ』と命ぜらるゝと共に『若しこれが弘まらなければ惡魔等が其の便を得て、世間は永久に救はれぬことになる。左様のことがあつてはならぬぞ』と嚴しく戒められたのである。

末法の世の複雜極まり無き中に在つて不安を感じた末に、何か眞の力となるべきものがほしいと思ひ立つた人の心の底には、貴い宗教心の芽が延び初めたのであつて、此の芽の延びんとする勢は非常に強いものである。世間が比較的平穩であつた時には唯だ習慣的に念佛を唱へたり題目を唱へたりして、別段に深いことも考へず、先づ先づ毎日を穩かに送つて行くのに滿足して居るやうな人も少くなかつた。然るに末法の世に入つては此の如き習慣的の信心といふものは殆んど全く其の力を失つてしまふから、無宗教といふことを自ら誇りとする人さへ少からず現はれて來るのである。此の如き中に在りながら信仰を求めやうとする人は、習慣的に念佛や題目を唱へた人とは全く其の性質を異にし、其の心の底から湧き起つたる要求、已まんとしても已み難き要求によつて、宗教を求めて行くのであるから、其の力は恐ろしく強いのである。譬へば筍の芽といふものは至て軟いものであるが、其の軟い芽が堅い地面を貫いて出て、スク〳〵と大空へ向つて伸びて行く勢といふものは實に目覺しいもので、凡兆といふ人の句にも

竹の子の力を誰にたとふべき

といふのがあるが、誠に其の通りである。末法の世に於て眞に賴りとなるべき教を求むる人の心の底に動く所の力もそれと同樣である。

眞暗闇になつた娑婆世界が再び佛法の興隆することに依つて、光明に充ちた世界に變つて行くといふは、まことに貴いことの頂上とも申すべきである。日の光りはいつも美しいが殊に旭日の影が美しく感ぜらるゝのは、闇の中に新なる光りを生み出したからである。末法の世に於ける佛法の興隆も亦之に比すべきものであらう。法華經の神力品には釋尊の說法を十方の世界の衆生が讃歎したといふことが記されてある。先づ釋尊が多くの菩薩達に圍繞せられて師子の座に坐したまへる樣を述べて、

即時に諸天、虛空の中に於て高聲に唱へて言く、此の無量無邊百千萬億阿僧祇の世界を過ぎて國有り、娑婆と名く。是の中に佛有す、釋迦牟尼と名けたてまつる。今諸〳〵の菩薩摩訶薩の爲に大乘經の妙法蓮華、敎菩薩法、佛所護念と名くるを說きたまふ。汝等當に深心に隨喜

すべし、亦當に釋迦牟尼佛を禮拜し供養すべしと。

とある。更に之に續いて、

彼の諸の衆生（即ち十方の世界に住む衆生である）虛空の中の聲を聞き已りて、合掌して娑婆世界に向ひ是の如き言を作さく、南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛と。

とあり、其の十方の衆生が釋迦牟尼佛に供養せんが爲に種々の物を娑婆世界に向つて散じたことが記され、而して後に

時に十方世界通達無礙にして一佛土の如し。

とある。是れこそは吾等の如き佛法を學ぶ者の共に理想とすべき所を明かに說き示されたものといはなければならぬ。西方に阿彌陀佛の國なる安養世界があるとか、東方に多寶如來の國なる寶淨世界があるとか聞けば、此の娑婆世界に住んで種々の苦を嘗めて居る吾等は、其等の苦も無く惱みもない世界に自ら心が惹かるゝ筈である。併し十方世界が通じて一となれば、此の娑婆世界も安養世界も寶淨世界も何の隔ての無いわけである。是ほど貴いことはあるまい。

釋迦牟尼佛の敎が普く世に弘まつて、世の中の人の心が根本から改まりさへすれば、娑婆が何時までも娑婆では居ず、光明に充ちたる世界に變るべきである。妙樂大師が

豈に迦耶を離れて別に常寂を求めんや、寂光の外に別に娑婆有るにあらず。（法華文句記）

といつたのは、斯る日の必ず來るべきことを信じたからであらう。迦耶とは集積の義で、即ち吾等の身を指していふのである。常寂とは變化を離れ又煩惱を離れたる義で、即ち佛身のことである。寂光とは佛の住みたまふ寂光淨土をいふのである。吾等の此の汚い身が即ち佛身となり得べく、吾等の住む此の汚い娑婆が即ち寂光淨土となり得べきは、たゞ偏に佛法の普く行はるゝに依るのである。佛恩の洪大なることは固よりいふに及ばぬが、如何に貴い佛法があつても、之を學び之を信じ、之を其の身に實現する者がなければ、其の法は存在の意味がないわけである。之を學び之を信じ之を自己の身に實現する者とは即ち吾等のことである。吾等より外に誰も別に其の人があるわけでは無い。吾等は凡夫ながらに斯る貴い本性を具へて生れたことを深く悅ばなければならぬ。

末法の世に出て佛法を學び、之を佛の御心の如くに正しく信じ、之を世に弘めんが爲に力を盡すことは實に大なる功德であつて、釋尊は之を讃めて

佛滅度の後に能く其の義を解せん、是れ諸の天人世間の眼なり。恐畏の世に於て能く須臾も說かんは、一切の天人皆應に供養すべし。（法華經寶塔品）

とまで仰せられた。勿論最初から大なる勢力が作れるものではないが、努めて已まなければ次第に其の力を加へ、終には此の地上に淨土を實現するにも至るべきである。吾等の毎日の生活が直接にか間接にか、斯る大なる理想の實現に役立つことを自覺した時に、吾等は眞に生きがひのある身として自ら祝することが出來るわけである。釋尊は更に神力品の偈に於て

如來の滅後に於て、佛の所說の經の因緣及び次第を知りて、義に隨ひて實の如く說かん。

と末世に出て大乘を弘むる者の態度を說き明され、此の如き態度を以て終始する者の功德を述べて、

日月の光　明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人世間に行じて能く衆生の闇を滅し、無量の菩薩をして畢竟して一乘に住せしめん。

と仰せられ、最後に至つて

是故に智有らん者は此の功德の利を聞きて、我が滅度の後に於て斯の經を受持すべし。是人佛道に於て決定して疑有ること無けん。

と斷言せられた。釋尊御自身に斯くまで決定的に仰せられたのであるから、吾等は今眼前の世相が如何に險惡であつても少しも失望すること無く、正しき信仰の力によつて斯る世相を根本的に變化し得べきことを信じ、勇ましく吾等の道を進んで行くべきである。

今一つ引いて見たいのは、無量壽經の中の語である。此の經の中に擧げられたる彌陀の四十八願は最も有名なものであつて、一般に佛教に就て何等の智識を有せぬ者でも往生極樂といふ語ぐらゐは皆知つて居る。隨て『極樂に往生することを理想とする以上は、此の娑婆世界の事には一切心を惹かれず、何事も皆打棄て專ら佛をのみ賴んで居ればよいのであらう』といふやうに考へる人も少くない。然るに無量壽經の中には

天地の間五道分明なり、恢廓窈窕として浩々茫々たり。善惡報應し禍福相承けて身自ら之を當く、誰も代る者なし。

とて善を勸むること甚だ懇切であつて、更に之に續いて

忍辱精進にして心を一にし、智慧をもて轉た相敎化し、德を爲し善を立て、正心正意にして持戒淸淨なること一日一夜なれば、無量壽國に在りて善を爲すこと百歲なるに勝れたり。

といつてある。此の一語は娑婆世界の生活の最も大切なることを示せるものである。忍辱精進智慧持戒等が何れも六度の一であることは前に述べた通りであるが、『心を一にし』とあるは禪定のことである。又『相敎化し』とあるは布施行の中の法施である。されば此處には六度が盡

く擧げてあるのである。即ち此の娑婆世界に於て菩薩道を勵めとの敎へである。

無量壽國とは即ち佛の國である。佛の國には善を妨ぐる者は誰もないのであるから、たとへ善を爲すこと百歲なりとも、多くの苦勞を要せぬわけである。然るに娑婆世界は人の心が皆邪曲であるから、此處で善を爲すことは容易でない。併し此處で種々の苦を忍び難に堪へて善を積み、其の周圍の人をも感化することが出來るならば、その功德は莫大である。同じ經には更に此の意を委しく說いて、

佛彌勒に告げたまはく、汝等能く此の世に於て心を端し意を正して衆惡を爲さゞれば甚だ至德なりとす。所以は何ん。諸の佛國土の天人の類は自然に善を爲して大に惡を爲さゞれば開化すべきこと易し。今我此の世間に於て佛となり、五惡五痛五燒の中に處すること最も劇苦なりとす。群生を敎化して五惡を捨て五痛を去り五燒を離れしめ、其の意を降化して五善を持たしめ、其の福德度世長壽泥洹の道を獲しめん。(泥洹とは涅槃と同じ)

とある。佛が此の娑婆世界に出て種々の苦を忍び敎化を續けられたのはたゞ一切衆生を救護せんとの大慈悲心に依るものである。此の同じ娑婆世界に在つて善を爲す者は何れも皆佛の御心を以て吾が心とするものであるから、非常に貴いのである。

觀無量壽經にも此と同じ意味のことが說かれてある。此の經は韋提希夫人の爲に說かれたものである。韋提希夫人は其の夫頻婆沙羅王と共に夙くから佛法に歸依し善行を重ねたのであるが、其の子阿闍世の爲に幽閉せられ悲しい月日を送つて居た。釋尊は御弟子の阿難を隨へて韋提希を慰問せられ、韋提希が『何の罪あつて此の惡子を生めるかと』歎き『願はくば吾が爲に憂惱なき處を說きたまへ』と請へるに對して、極樂世界の極めて莊嚴なる有樣を說かれ、而して

汝今知れりや否や、阿彌陀佛は此を去ること遠からず。

といひ、更に

彼の國に生ぜんと欲する者は當に三福を修すべし。一には父母に孝養し師長に奉事し、慈心にして殺さず。十善業を修す。二には三歸を受持し、衆戒を具足し、威儀を犯さず。三には菩提心を發し深く因果を信じ、大乘を讀誦し行者を勸進す。

とて、娑婆世界に於ける善行の大切なることを說かれたのである。十善業とは前にいつた十惡を犯さぬことである。三歸とは佛に歸依し法に歸依し僧に歸依することである。行者を勸進するといふは即ち佛法の弘通を助くるために、佛法を修行するものを奬勵し保護することであ

る。此處に說かれた所も、前の無量壽經と同じく娑婆世界の生活の輕んずべからざることを明さんが爲である。

法華經は娑婆即寂光土といふことを中心として說かれた經であるから、娑婆世界に於ける吾等の生活の輕んずべからざることが力說せられてあるのは少しも不思議ではない。然るに無量壽經や觀無量壽經の如き、主として極樂淨土の莊嚴なる樣を說かれた經に於ても、決して娑婆世界を輕く視てよいとは敎へられず、以上に引用したやうな語が見えて居るのは最も注意すべきことである。佛は絕大の慈悲をもつて居たまふのであるから、如何なる惡人をも捨てらるゝといふことは無い。否寧ろ惡人に對して特に深き憫みを垂れたまふことは、『如何に多くの子があつても、病子に對して父母の憐憫の情は特に深い』と涅槃經に說かれた通りである。併しながら

佛の慈悲に甘えて、自分の行を愼まぬといふは甚しき不心得

といはなければならぬ。佛の慈悲の貴いことを知れば知るほど吾が身の行を愼んで、佛が世に出て敎を說かれた目的の一日も早く貫徹せらるゝやうにと努めなければならぬ筈である。末法の世の闇は唯だ此の如き殊勝な心の人の力に依つてのみ光明を投ぜらるべきである。

無著菩薩の作つた攝大乘論に『思修の六意』といふことが說いてあるが、是れは末法の世に生れて大乘を學ぶ吾等に極めて適切である。今その項目を擧げて之に至て簡單なる說明を加へて見やう。それは

一に廣大の意。二に長時の意。三に歡喜の意。四に恩德有るの意。五に大志の意。六に善好の意である。

先づ第一に廣大の意といふのは、大乘を學ぶ者は佛の境界に到達するまでの間に如何に多くの善を爲しても、之を以て自ら滿足してはならぬといふことである。途中で自ら足れりとするものは眞に菩薩道を行ずる者とはいはれぬのである。第二に長時の意とは非常に長い間少しも懈怠の念を起さぬことである。後には必ず佛の境界に到達し得らるゝことを信ずるならば、如何に久しく努力しやうとも苦しいの慘いのといふ考への起らう筈はない。第三に歡喜の意といふは菩薩道を行じて一切衆生を利益することに無上の歡喜を感ずることである。たとへ心の僻んだ者があつて嘲笑し罵詈し、その他種々の迫害を加へやうとも、之によつて歡喜の意を損はるゝことがあつてはならぬ。第四に恩德有るの意といふは一切衆生が吾に對して恩德有りと思ふことで、此處に菩薩の菩薩たる所以が最も明かに現はれて居るのである。一切衆生を救護せん

が爲に努力するによつて、吾が具有する所の佛性が次第に開發せられて行くのである。たとへ大乘の教を聽いて、限りなき貴さを感じても、之を實行すべき機會が無ければ聽いたかひは無い。世間に惱める衆生が多くて、救護を待つて居る。吾等は之に救護を與ふることを以て吾等の悅びとしなければならぬ。斯くして初めて大乘を學んだかひがあるわけである。

彼等は吾に對して恩德を感ずべきであるなどゝ思つてはならぬ。彼等あるが爲に菩薩道を行じ得たることを吾が身の悅びとし、之を感謝すべきである。

第五に大志の意といふは必ず佛の如くに大なる功德を積まうとの志を立つることである。佛の偉大なることは申すに及ばぬ次第であるが、其の佛は吾等に對して大乘の教を說きたまふに當つて、

我が如く等しくして異ること無からしめんと欲す。(法華經方便品)

と仰せられたのであるから、吾等は此の洪大なる佛恩に報ぜんが爲に、吾等も必ず佛と同しき功德を積まうといふ志を立てなければならぬ筈である。第六に善好の意といふのは一切衆生に對して絕大の好意をもつことである。即ち彼等をして共に大乘の教を解せしめ、共に大乘の教を信ぜしめ、共に佛の境界に到達せしめんとの意を以て常に彼等に對すべきである。いつでも

『共に』といふ心を失つてはならぬ。

願はくば此の功德を以て普く一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に佛道を成ぜん。(法華經化城諭品)

といふのが即ち吾等の念願でなければならぬのである。以上の六點に常に心を致し、大乘の教を學び菩薩の道を勵んで怠らぬならば、必ずや佛の境界に到達し得らるべきである。

佛の境界は如何なるものであるか。凡夫なる吾等が如何に之を知らうと努めても、充分に知らるべきことではない。それは『唯だ佛と佛とのみ』知りたまへる所である。今まで種々の方面から說いたのは固より其の一端をも示し得たものでは無い。此の佛教綱要を出し始めてから既に二十四號となつたが、畢竟何事をも說き得なかつたことを慚愧しなければならぬ。自分の衷心よりして望む所は佛の吾等に遺されたる經典が普く世間に行はれんことである。佛の御心は此の經典の中に宿つて居るのであるから、たとへ吾等は佛の說法を親しく拜聽することが出來ずとも、經典を通して佛と相接することが出來るに違ひない。

此の中には已に如來の全身有す。(法華經法師品)

とは佛の自ら明言したまへる所であるから、吾等は之を信じなければならぬ。今まで自分が說

いたことが若し大乘の經典を讀む人に多少なりとも豫備的の智識を與へることに役立つたならば、自分はそれで滿足する。自分等が拙い語を連ねてクド〳〵と說明するよりも、此より以上は經典に就て學ばるゝことを御奬め申した方が宜いと思ふ。因て自分の說明は此邊に止め、此よりは重要なる大乘經典の解說に入るつもりである。

『佛とは何ぞや』といふことを知るには、大乘の經典を反覆して讀むが最も好い方法である。併し此處に尙ほ數言を補つて置きたいと思ふ。前に『三因佛性』といふことを述べたが、此より更に進んで行くと三身佛といふことになる。三身とは法身、報身、應身をいふのであるが、又自性身（即ち法身）受用身（即ち報身）變化身（即ち應身）といふ名を以て說かれて居る。（是れは法相宗などでいふ所である）

佛に三種あるわけでは無い。佛といへば一種より外にないが、之を三方から仰ぎ見て之に譬へば富士の山を東海道から見たり、甲州方面から見たりして種々に畫くやうに、佛を三方面から仰ぎ見て三種の名を立つるものである。故に三身を說くといへども『三身即一』であることを忘れてはならぬ。法身とは實在として佛を見たる名である。報身とは智慧といふ點から佛を見たる名である。應身とは慈悲といふ點から佛を見たる名である。天台大師の如きは

法身を毘盧舍那如來
報身を盧舍那如來
應身を釋迦牟尼如來

として說明して居る。（法華文句）毘盧舍那とは『徧一切處』の義である。盧舍那とは『淨滿』の義である。釋迦牟尼とは『能仁寂默』の義である。

說明の便宜上、應身といふことから說かう。應とは應現の意である。『能く機に隨ひて應現し、種々の法を說いて諸の衆生を度す』といふことである。一切衆生は煩惱の故に常に苦み常に惑つて居る。而して此の苦を脫せんことを望んで居る。故に佛は之に應じて種々の法を說き、彼等を救うて凡夫の境界を離れしむるので、其の慈悲の洪大なることは世に比すべき者はない。されば佛を慈悲といふ點から仰ぎ見て、應身と申すのである。變化身といふのも聽く者の機根に應じて自在に法を說かるゝ故に名くるので、應身といふのと同じことである。又天台大師のいつた『能仁寂默』の意に就ては前にも一通り說明したが、能仁とは一切衆生を救ふべき力を有せらるゝこと、寂默とは其の周圍よりして少しも影響を受けぬこと、即ち絕對の覺を